

525
171



始





青年は
想望す

東京日比谷書院發行



序

淺山君逝いて既に半歳、そぞろに君を思ふ。余は君の交友としては、さほどに、長くもなく、またあまりに深かつたとは云へない。併し、その歩んで來た半生が、妙に、似ても居り、またボツリ／＼と、君の語り出すことが、余の感觸をそゝるものがあつた。

君はさきに、「青年と語る」と「私を過ぎた青年」との二書によつて、滿天下の青年をして、心から讚憬させたことがある。今、また、「青年は想像す」と云ふ、題名からして、君の至純なる靈の泉から、シミ／＼と流れ出した清水のやうな、この書を、青年のために、書かれたのである。

君逝いて半歳、世事徒に繁くして、靜に、思をいたすの時もなかつた。ところが、この書は君の通夜に初めて試刷を出したので、とりあへず、余が持參して、未亡人の涙とともに、君の靈前に捧げられたものである。爾

來震災後印刷能力不足の中に、書肆日比書院主の熱心により、今日これを公にすることを得たのである。されば此の書は、君が最後の著であつて、前二書と共に、青年の爲に捧げたる君の最大なる奉仕の結晶である。君が、日本青年館主催の青年團指導者大會の準備委員會に望んだ、その歸途に、腦溢血で倒れたのと、思ひ合して、そゞろに、追憶の情をそゝるものがある。

此の書の内容や價值については、殊更に言を要せない。青年達よ、靜にかみしめて、讀んでいただきたい。さうすれば、五年、十年、二十年否、もつとく、永い間に、この詩人にして、哲學者なる淺山君が、何を語り、何を望んでゐるかが、だんくんと深みを加へるであらう。

大正十三年四月

小石川の寓にて

片岡生

525-171

青年は想望す

目次

青年の心理……………(1—107)

反農思想の動因と青年の願望……………娛樂機關に對する青年の願望……………修養機關に對する青年の願望……………處女に對する青年の願望……………先輩に對する青年の願望……………都會に對する青年の反感……………農民道德に對する青年の所見……………農村寺院に對する青年の意圖……………農村の習俗に對する青年の感念……………田圃の實狀に對する青年の斷案……………政治及選舉運動に對する青年の態度……………讀みものに對する青年の傾向……………

青年團を訪ねて……………108

赤江と廣瀬……………108

大庭と講武……………113

屋裏村行……………117

目次

飯梨村行 一一一

能義村 一一五

古江村 一四三

母里往復 一四七

三島の村 一五四

三良坂 一五九

出雲往復 一六一

模範村を訪ねて 一八五

廣村 一八五

河内村 一九一

大濱村 一九七

大崎南村 二〇三

海潮村 二〇七

富を越えて生きたる々人 二二二

下村育英財團由來記 二二二

救法目論見 二二五

義倉由來記 二二六

小林公益財團由來記 二四七

ある青年團の出來事(戯曲) 二六一

青年は希望す 目次終



青年は想望す

一 青年の心理



私は、大正八年の二月と、昨年の五月とに、その當時私の關係して居つた新聞の社説に「青年の反農思想」に關して、すこしばかり論議を試みたことがあつた。

前の場合は、丁度、米價騰貴の最中であつたのであるが、私は主として此の事實の上に立脚して、「農村の青年が農村を見捨てるのは、農業が其の勞苦の割合に報いらるゝ物質的収入が少ないことを主たる原因として居る」といふ從來の議論を否定し、「現に農村は富み、農業は割のよい仕事になつたに拘らず、都會集中の傾向が、依然として止まないのは、農村青年の反農思想が、單に農村が富

農村青年の心理

まず、農業の割に合はぬことによつて醸成されるのではない證據であつて、それは實に農村が落寞蕭索として、延び求める青年の胸にうちふる、娛樂機關がないからであらう」と論結したのであつた。後の場合は、丁度米價の下落がはげしくて、農村は酸苦の底になげ込まれた時であるが、私は、農村青年の反農思想が、昨今の如き情態によつて、いよ／＼盛んにされるに相違ないことから論を進め、事情の許すかぎり、農村青年を其の娛樂機關なき爲めの蕭索から救ひ、其の教育機關なき絶望から引き上げねば、農村は婦女と老少と病弱とのみの居残る場所になるであらうと説述したのであつた。

二

前の場合に於て、私は三四の青年から意見をきかれたのであつた。私が最初にうけ取つたのは、次のやうなものであつた。

多くの新聞が殆んど農村青年を閉却して居る折柄、先生が我等の爲め同情ある論議を試みられたことは我等の感謝に堪へざる所なり、農村の生活を詩味ありとなし、田園の起臥を畫趣ありとするは、都會人士の空想にして農村青年の都に憧憬し、反農厭土（この語は先生の熟語か）

の思想を盛んにし來れることを不都合なりとするは、社會先達の無理解に外ならず。この事、眞に先生の言の如し。若し娛樂機關あらば我等は今少し都會に惹かるゝ心も和み、農村に安住する心地も深まり行かんと思ふ。先生が、農村青年に對して娛樂機關を與へよと絶叫せられたるは、眞に我等の胸裡を解せられるものとして、我等の愉快に堪へざる所也。然れども、我等の農村に安住し得ざる理由は、これのみにあらず。實に農村に於ける社會教育的施設なきことも重なる原因也。我等は自ら學び、自ら進まん事を自覺しつゝあれども、買ふに書なく、學ぶに師なく、我等これを思ふごとくに、心をくらうせざるを得ず、云々。

その次に受取つたのを抄記すると次のやうである。

淺山先生、今日の社説は大そう興味をもつて拜讀いたしました。私共が農村をいやに思ふのは、御説の通り何一つ私共の心の空虚をみたすといふ念願を満足さしてくれる娛樂機關が無いからであります。金のありなし、儲けのありなしが問題になるのは、大人の事です。儲けたつて、貯へがあつたつて、今日の農村では、何うしても文化的生活をいとむ爲めに金を使ふにも、費ひやうがありません。ですが、私共の農村をいやに思ふのは、これだけではありません。社會教育的の施設がないことが、今日の私共にとつて他の一つの重要な問題なんです。エマクな

れと色々な方が被仰いますが、私共は、實はさういふお話をうかゞはなくても、エラクならうと思つて居るのです。しかし、エラクなる爲めには、それに相應した機關施設が必要です。ソノ機關施設が今日の農村にありますか。その機關施設を運轉し得るだけの人が農村に居りますか。云々。

他の三通も、略これと大同小異であつた。つまり、農村青年が農村を捨てるのは、一つは、適當な娛樂機關のないからであるが、今一つは、近頃農村の青年が著しく求知慾を旺盛にして居るに拘らず、今日の農村に於て社會教育の施設が殆んどないからであるといふのである。

私とても、農村に社會教育の機關がないことが、農村青年の反農思想をはけしくする一つの原因であることを認めなかつた譯でもないが、しかし自分自身の人的價值を、ほんとうに高めようともがきあせる農村青年は、數に於ていくらもないと思つたのであつた。現にこのやうな手紙を寄せた青年達が、何れも其の知識に於て、修養に於て、生活に於て、一般の農村青年とは水準面を高くして居る人達である。それ故、農村青年の反農思想をさかんにする原因として、社會教育機關の缺乏を數へなかつたことは、私の不注意であつたけれども、これが重大な原因であるかどうかは、依然として私の疑問とする所である。たゞ、其の數に於ては少くとも、農村に於ける社會教育の施設が

乏しいことを心から慨きくやむ青年が、ボツ／＼現はれて來たといふことは、喜ぶ可き現象として注意せらるべきであることは勿論である。

三

後の場合に於ても、同じく三四の青年から手紙を受取つた。その一つをあけて見ると次のやうである。

たえず農村青年に關する論述をやつて頂いて、非常に愉快に堪へませぬ。農村青年の反農思想の原因として、御擧げになつた二つの事項は、勿論、異論のあらう筈はありませんが、今一つ大切なものが落ちて居ると思ひます、甚だ失禮な申分ですが、これは私共の望むやうな性的生活が、農村に居ては到底いとなまれぬといふことです、云々。

他の一つはかうである。

農村青年の反農思想に關する御高説は、繰返し拜誦しました。私達は娛樂機關のないことも不満に思ひます。社會教育的機關のないこともいやに思ひます。しかし、私共の一番もの足らぬことに思ふのは私共を理解し、私共と相伴ひ得る處女のゐないといふことであります。先生

はこれをいかゞ御考へになりますか。

他の二通の書面も、大體に於て同様の内容をもつて居つて全く前回とは違つて居ることを注意せざるを得なかつた。

成程、かう云はれて見れば、さうかなと思はざるを得ないのであるが、さてかうした變化は、何に原因したものであらう。前の場合は、殆んど廣島縣であり、後の場合は、みんな島根縣であるから、土地の相違であらうか。又、前の場合と後の場合とは、三年といふ時の隔りがあるから、時の變移であらうか。若し土地の相違であるとするならば、廣島と島根との民俗の相違に歸せなければならぬが、私の見る所によれば兩縣の間に氣質と習慣とに多少の相違はあるけれども、性的生活に關して、際立つてはけしい差異があるやうに思はぬ。それ故、私は土地の相違に歸することよりも、時の變移に歸することが至當であると思ふのである。

丁度、昨年末から社會思想に關する書物に代つて、性に關する書物の賣行きが盛んになつて來たことは、際立つた現象として、多くの人の認めたことであつた、農村青年のかうした要求は、或はこの傾向に影響されたものであるとも云へようが、讀書の便宜をもつことのない農村青年が、さうく都會の讀書界の影響をうけようとは考へられぬ。つまり、文字通りの意義に於ての時代の關係

であると思ふことが、正しい見方であらうと思ふ。セルフ、メイトを志して居るものは、農村女子があまりにその精神生活の無内容であることに於て、さうでないものは、あまりに其の舉措容姿の野卑であることに於て、甚しく不満を感じて居るのであらう。

四

この場合に於て私の受取つた意見は、此の外に今一つある。

農村に居るものでなければ、農村の事情はわからぬと威張る譯でもありませんが、御説の農村青年の反農思想の原因は、御數へになつた事項の外農村の先輩が自分達青年の生活様式に對して全然無理解であるといふことが大切な原因であります。

親爺は目に一丁字もないのに、息子は「改造」や「解放」に讀みふけつたり、武者小路實篤の「新しい村」に共鳴したりする者がある今日である故、これも成るほど一つの原因であるのであらう。しかし自己の生活様式若くは生活信條に關して周囲が無理解であるといふことのために、農村を呪ふやうになるものは決して青年の大部分ではないのだらうと思ふ、が、其の數は兎に角、かやうなる聲明が、農村青年によつてなされたといふことは、恐らくは數年、十數年前に於て見るこゝの

來なかつたことであつて、時代の推移を、マザ／＼と見せられるやうな氣がする。

五

斯くの如く、前後二回の私の所見發表によつて、私は農村青年の反農思想の原因ともいふ可きものとして

- 一、農村に娛樂機關なきこと、
 - 二、農村に修養機關なきこと、
 - 三、農村處女の素質の極めて低いこと、
 - 四、農村の先輩が青年の思想を理解しないこと、
- を數へ擧げることが出來たのである。而して此の四つの原因が、それ／＼其の程度に於て相違をもつて居ることは、申す迄もない。私はすこしく、それを述べるであらう。

六

農村青年の娛樂は、是迄にも多くの人達によつて論議されて居る事であり、昨今、民衆娛樂の間

題が甚だ注目されるやうになつては、一層多くの人達の注意を惹いて居る事であるが、それ等研究者達の「しかあるべし」とするものに對して、農村青年の「かくあれかし」とするものはいかなるものであらうか。私はそれを實例によつて申し述べて見たい。

私は、本年の五月に、やはり當時私の關係して居つた新聞雜誌で「娛樂機關の改善」を論じて、「毎年、これから三四ヶ月の間、盛り場や、涼み櫓に人集りのする間は、農村青壯年の道徳的に退轉する時機であるとせられて、警察が其の取締りに骨を折ることにきまつて居るが、これは農村青壯年趣味の生活がその道徳生活を脅威することの證明に外ならぬのであつて、かやうなる現象は、優れた文明を有つて居る國民に於てはあり得べからざる事で、其の生活が未だ文化國民に値しない事を表示するものであるとせねばならぬ」と序説し、活動寫眞及び芝居に説き及んで「予輩はかの偏固にして頑冥なる道學者の口吻をまねて、安價な教訓的フィルム若くは無趣味な教訓劇を與へようといふやうな時代錯誤を敢てしようといふ者ではないが、切に清高にして高級なる趣味を體現したフィルムと舞臺とを與ふることの必要を感じてやまぬ」と主張し「若し農村青年の趣味生活が満たされなかつたならば、必ず變形し性慾の濫用となつて現はれるであらう。」と結論したのであつた。さうすると、又例によつて、數四の青年から、これに對する意見を聞かされた。

娯樂機關の改善についての御説は、非常に嬉しく思つて讀みました。盆踊りや宮角力や、力くらべなどを私共の娯樂として奨励される人の多い時に、これ等のものには目もくれず、直に活動寫眞と芝居とを論じられたのは、殊に嬉しく思つて讀みました。盆踊りや、宮角力や力くらべなどのやうな原始的な事柄を、私達に勧めてくれるのは全く私達の心持を知らぬからです。私達の娯樂機關は、氣持のいゝ活動寫眞館と、品のいゝ劇場とです。町村營の劇場活動寫眞館位あつても、文明國としての耻辱ではなからうと思ひます。

これが其の意見の一つであつた。

毎日、私の店に来る××紙を楽しんで居ります。今日の社説の「娯樂の改善」は、私共の一番問題にして居る事で、殊に注意いたして讀みました。いづれ他日また詳しく論ぜられるのでせうから、其の参考にもと思つて、私の青年團で團員の意見を徴したことがありますから、其の結果を御通知いたします。出席團員八十二名中、活動寫眞が五十一、劇場が二十四、玉突、盆踊り、各三、宮角力一でした。これは各自最も好ましい娯樂を一つづゝ書いた結果です。

これがその意見の他の一つであつた。

娯樂機關の改造論は結構に候。しかし、慾の皮の厚い、猶太人見たやうな田舎の富豪や、小學校の地圖さへ碌に買へぬ貧乏な町村の財政をどうかせぬ限り、農村の娯樂機關を何ぼ論じても、それは無効果なりと存候。先生は、活動寫眞と芝居とを論ぜられたが、近頃、官邊あたりで盆踊りや宮角力や石のもらあけ競争やを奨励し出したるは、一文も金をつかはずに、何とかしようとか考へた窮策なり。しかし、それは不有望な無人格な青年團に顔出しもせぬやうな青年に相應した娯樂にして、健全なる國民善良なる公民たらんと欲して、讀書もし、思索もし、新聞に投書位は出来る青年には、見むきもされぬものと存候。結局、農村には、我等に適當なる娯樂機關はあり得ぬ譯に候。日本の現状に於ては、終りに臨んで先生の御健康を祈る。

これが、その意見の今一つの分であつた。

この三つの意見が、我が國今日の農村青年の意見のすべてでないことは勿論であるが、これによつて、我が國の農村青年中に存する傾向の幾分は知り得られると思ふ。この三つの意見によれば、農村に於ける娯樂機關は都市に於て見得る如き活動寫眞館及び劇場であるべきであつて、盆踊りや、宮角力や、力競べなどは計算の外に置かれねばならぬ事になる譯である。勿論、この種の意見の抱持者が、農村青年中のエラ者若くは先達者であることは、言ふ迄もないことであつて、それは、こ

に引用した文章の出来栄えからも推察することが出来ようと思ふ。それ故、此の以外に 低級な——この言葉は少しく私の考へて居る觀念を言ひ表はすには不適當であつて、都合によると一部の農村青年を侮辱したかに取られる懼があるやうに思ふが、他に恰好なものが見あたらない故、暫く此の言葉を使用する——青年の意見がある譯であつて、此の群は、活動寫眞、劇場は勿論、村芝居でも、仁輪加でも、盆踊りでも、宮角力でも、力競べでも、殆んど好悪なしに受取る所の盲目的な娛樂欲求者であるのである。

そこで、農村青年の娛樂機關の問題は、どうしても農村青年の知見の階段に應じて、考へねばならぬといふ事になる、即ち、盆踊りや、其他の、農村固有の娛樂に對して肯定する者は、知見の低い青年達であつて知見の進んだ青年達は、從來、農村になくて、今日都會にある所のものを求めて居るといふ事になる。それ故、若しも、本氣になつて、盆踊りの改良や、宮角力や力競べの復興を研究して、それで農村青年の娛樂機關問題が解決されると考へるならば、非常な謬見に墮する譯であつて、これは知見の低い青年だけの問題であるに過ぎないのである。さうして、さやうなる群が現在に於ても、將來に於ても、決して望ましいものでなく、必ずその階段から躍進して貰はなければならぬものであるに於ては、寧ろさやうなる研究は意味のないものになつて行かねばならぬので

ある。

今日、各地の農村青年團の實情を見ると、知見の進んだ團員の指導力が、漸次に強くなり行きつつあるのであるから、私は、今少し、識者たちが、數に於ては少數であらうとも、知見の進んだ青年の心に注目を拂はねばならぬと思ふのである。娛樂機關の問題に關しても、矢張さうである。

農村に於ける娛樂機關に就ては、他日、更に稿を改めて詳細に私見を述べるであらうが、兎に角、此の問題は、或る種の人たちの考へるやうに單純ではない。殊に知見の進んだ青年達にとつては、それは田園の都會化——若くは田園文化とでもいふべき大きな背景から考へられて居るところの——勿論、それは至極漠然たるものであるが——問題である事を知らなくてはならぬのである。

序に、農村青年たちが、娛樂についていかに多様な考へを抱いてゐるかの實例として、「秋祭り」に關する、九名の青年たちの所見を採録する。

□

昔から村祭と言ふと年中行事の一に數へられて、農村娛樂の一つの機會だつた様です。先づ祭と言ふものから考へないで、娛樂方面のみを考へても、私達はあの程度の娛樂に意義を見出

だせません。

若衆が斗酒を浴び花笠などを頂き、村娘の中を誇らかにねり歩くなどは、遠からず淘汰されること、信じます。それは青年がきつとそんなことに興味を失ふたがためです。そして一方に、村設の劇場、図書館が出来、青年は、皆その方へ吸ひつけられてしまふでせう。

一體、一年一度の村祭が、娯樂の機會視されたのは、娯樂機關の少い時代の仕方なしです。けれど、今ですと、もう小さな町にも常設の劇場位はあつて、月に三四回は、芝居活動等が來るのです。

村祭の改善と云ふことについては私として格別名案もありません。しかし希望としては、もう少し祭は物のたとへの様な「お祭騒ぎ」でなしに、莊嚴に、靜寂に、やりたい。神官はしづかにのりとを上げ、村民は三々五々自由に參詣し、その日は一日全休する、そして図書館や劇場へはいる様にしたい。兎も角常設劇場を普及する必要がある。私は神社の境内で角力や芝居をするべつたりにやることは、不賛成である。神社の境内はもつと靜かなものにしたいたいのが希望である。

天野藤男氏の著書で斯う言ふ問題をとりあつたものがある。「鎮守の境内を村民和樂の境とする。盆踊りよし、運動會よし、送別會よし、青年會よし、展覽會よし」何でもいゝから鎮守の森でワア〜青年も、娘も、幼老も、皆で騒げばいゝといふのである。農村に娯樂の機關がない中はさうするより仕方ないだらう。しかし、私共は、もつと文化的にして住みたいものだと思ひます。

つまり鎮守の森を娯樂機關にしないこと。しかしその日一日は村民一同全休して各自その日の爲に公開される劇場、図書館にて充分享樂すること。

斯う言ふ風に秩序が立つてくると、われ〜の様なもの迷惑しなすみます。實際、村の行事と言ふ權利をもつて強ひられる馬鹿騒ぎが、どれ程異端者に迷惑なことか知れませんが、(足立乙市)

□

村祭は敬神觀念による思想善導といふ點から、又餘興等による農村唯一の娯樂機關といふ點から、又親戚古舊友人相互の親睦を計る絶好の機會といふ點から、最も有意義なる年中行事の一つである。

然るに明治初年以來、舊習打破とか、警察令がどうしたとか、の故を以て、古傳祭や神事或は餘興、仁輪加、其他の催物等、殆んど形を止めず、親戚古舊の往來も減少して、さなきだに無味なる農村は甚だ殺風景を極めたものとなつて來た。

近來識者の間に農村問題が研究せられるやうになり、古來の習慣を幾部更改して復活する形勢になつて來たのは、農村自體の發展上、最も好ましき現象である。

村祭に對する神職の行動が、形通りの儀式的では何等の意義をなさない。もつと動的に、敬神思想普及なり、善行者の表彰なり、修養團體の指導なり各種の方便に依り民衆と密接する機會として利用しなければならぬ。

村祭に於ける餘興等は、他方面より専門藝術家を雇ふより、村内の氏子なり、青年子女なりで、芝居、角力、手品、活人畫、唱歌、遊戯、演説、討論等を開催することにせねばならぬ。經費の如き富者階級の寄附によるべきである。技術の出來不出來にかゝはらず、村の人達で催すことは、自他共に興味甚大にして好評を得ること間違ひない。

村祭に於ける親類縁者の往來は、火に盛ならしむべしである。年中行事の内でも正月、盆會等は寒い時季と暑い時季とで且つ何處も同日であるから往來が急しく、思ふ機會談する暇さへ

ない有様であるにひきかへて、祭日は部落ごととに相違し、時季も寒暑中庸を得て居るので、舊交を暖め親睦を計ることが遺憾なく出来る。たゞ飲食にのみ傾く事は注意すべく、文化的生活は精神的で充分満足出来ることだから、全體に於て古來の儘でなく改更して、理想的ならしめねばならない。

村祭の向上發達如何は今後農村問題の解決に重大なる關係を來し一大問題であるからよりよき文化農村建設の爲に研究努力すべきことである。(廣江直義)

□

村祭は其地方地方に依つて行事が違つてゐますので、一概に申すわけにまゐりませんが、私の村では現在のまゝで改善の必要を認めません。私の村の祭禮のやり方を、神社の方での行事と家の方での行事との二方面から觀察して批判して見ようと思ひます。

先づ神社の方では、村の青少年男女を以て組織する御神樂を奉納して、神官の祝詞祭文の奉讀をやるこの御神樂と云ふのは、非常に古典的な行事で、笛や太鼓の音までが、いかにも神意をなだめまつる様な音律を傳へ、見るもの聞くものをして、そぞろ太古の國に逍遙するの思ひあらしめる。そして舞ひ終つたら神樂衆は一同神前に額いて神酒を頂き御祓を受ける。それと

同時に、村の氏子が作つた處の五穀や菜果をも奉納する。この行事に對しては、一寸も改善すべき個處を認めぬのです。

又一面家庭に於ては六親眷族を集めて酒宴を開く遠く數百里外に出てゐる家族でも、祭禮と云へばきつと歸つて来る。又子女は一年中では最も此の祭禮を楽しみとする。(私の地方では反つて正月よりも祭禮の方に重きを置く習慣がある)。斯くして一家眷族相和して談笑裡に酒杯を擧げるの悦樂は、誠に言外無量であつて、此點に就ても改善の必要を認めませぬ。

斯かる意味に於て村祭りには農村行事の最たるものであつて、然も神州としてのわが國で最も古典的な秘的なものであるから成るべく(我地方に於ては)現状のまゝで永續させたいと思ひます。

俗にお祭騒ぎと云ふ諺がある様ですが、是は地方に依ると或は無益の事に莫大の費用をかけたり、或は神輿擔ぎが喧嘩したりする様な事から起つた諺ではないかと思ひます。が、私の村では實に平和にそして嚴肅に行はれるので、一寸も此様な憾みを感じてゐません。此點は私の村として幸福だと信じてゐます。

要するに私の村としては村祭は現状維持で進みたいと云ふ結論です。(國信篤村)

地方に依つて種々相違があると思ひますが、私の地方なんか、もすこし古典的に行きたいものだと思はせられます。由緒ある古傳祭なんか、殆んど廢れて、みる影もないんですもの。一般的に高潮されてゐる問題ですが、矢張り農村は農村らしい神社中心の享樂本位に行きたいと思ひます。それから、あのお祭氣分の豊かな大幟、あれが次第々々に平凡な國旗なんかに改造されて行くのは惜しい事です。『豊穰な熟れ稻をわたる秋風にはためく大幟の音、これに平穩な、眞摯な、豊かな、平和な村が表徴されて、感激の泪が流れますもの。(福島米路)』

土用もすでに終りを告げて、節は早や立秋の頃、然し秋立ちぬとは名のみにて、照る陽も吹く風もまだ眞夏の様な暑さを容赦なく射つける。だがそれでも流石に日が沈んだ後は、庭先きの叢にしのびやかに鳴蟲の音や、程近い小川のせゝらぎなどが何となく秋の訪れのそれらしい思ひを誘ふ響きがこもつてゐる。その頃だ———中海の北岸に枕木山を背にして安らかな平和な夢を幾百年來見つけをる私の村で何人もがそれらに異つた喜びと期待とを持つて待つてゐる唯一の村祭が行はれるのは。春の耕耘から植ゑ付け、炎天のもとの除草と農家の人達が夜の

目もろくに寝ない程に眞黒くなつて働いた百姓仕事も、やがて來ん十一月の收穫までは暫らくの間所謂農閑の季節に入るのはこの頃からだ。

何時も見馴れた目には、何の刺戟も感興もない自然を相手に、明けても暮れても、只こつくと土を掘つて生きる田園の人々には、生のアンニユイと半歳の辛勞を暫しでも忘れるためには、村祭は唯一の慰めでなくてはならぬ。

あるは敬神あるは尊祖と云ふ様な道徳的倫理的方面の價值も、もとより没却すべきで無いけれど、私はその半面に於て、農村娛樂の一としての村祭に可成りの意義と生命とを見出したいと思ふ。

二、夜祭り情調

村は何と云つても夜が一番ふさはしい。張り切つた青田を渡つて來る秋近い風が、浴衣の肌にはさはやかな感觸を惠んで行く、灯ともし頃になれば、近郷近在の老ひも若きも大も小も、心いそぐと夜涼を趁うて、吸はれる様に町へ町へと流れ込んで行く——幼い夢を辿つて見れば、父や母に連れられて小鳩の様な胸を喜びにふるはせながら、程近い海邊に夢の國か、お伽の世界のそれを思はせる様に、はなやかにつらなり輝いてをる町の灯をこがれて心も空に詣つ

た思出が、美しく繪巻きでも見る様になつかしく思ひ出される——その頃からはすでに十数年の月日が過ぎ去つてをるけれど、矢張りこの村祭から受ける感銘と印象は、幼い頃の純な心に刻まれたそれと少しも變りはないやうだ。

夜毎にハツキリとして行く銀河が、底深い空に帶なりに光つてをる夜空高く、ハタ／＼と風にはためく大幟のうす黒の影が見えると、如何にも祭らしい心を胸に感じる。社のある町近くへ來ると、神樂の太鼓の音が、いやが上にも心を足を輕ろからしめる境内にはもう人が一杯だ、一年に何回か數へる程しか使はない、白いものを田舎らしく付けた若い女達が、でも、夜目には可成りの美しさを惠まれてをるのがうれしい。社殿では今しも七坐神樂の最中だ。太鼓、笛と云つたやうな單純な樂器でかなでられる神樂のメロデーは、なんと云ふ典雅さであらう。流麗さであらう。凝乎と心耳をすまして聞入つてをると、我々の血管の中のどこかに人知れず潜んで流れてをるであらうところの、祖先以來の醇朴なそして敬虔な態度で神に仕へた心が、生々と蘇つて來る様に思はれる。

近代科學が生んだ華かさはあるが、どことなくとげ／＼しい電燈の光りと、夢見る人の瞳の色を思はせる様に、淋しくゆらぐ御神燈の蠟の灯影とが皮肉な對照をなして、明かるく照らさ

れた社殿の中央では、ときはの色深き眞神と、赤い紐の長い鈴を左右の手に持つて、數人の神官が装束姿も藪たけて、輕快なそして優雅な態度で、神樂舞を舞うてをる。

社殿を取り巻いた群衆の瞳は、熱心にそれに注がれてをる。蓋しかうした古典的な匂ひ高い藝術にはその方面の教養貧しい人々の心にも傳統的に、可成りな感銘を與へずには置かないのである。

夜は深更に及んで天心に月影さはやかに仰がれる様になつても、人足はなか／＼に絶えない。海ばたの廣場や波止に三々五々群がつて、涼をむさぼる人達も容易に減じない。さもあらう、追うても、追うてもつきない享樂を求める人々の心理は、都も鄙も何の變りも無いのに、惠まれる事のあまりに薄い田園の人々は、せめて斯様な祭の一夜の敢果ない賑ひをでも、心ゆくまで味ふ事が許された樂みの一つだのだもの。

三、田舎芝居

村祭のある頃には、それを當てこんで、いつもは寂びれてをる半農半漁の海沿ひ町の四つ辻に雨風にさらされて、流浪の悲しみを物語る様な色をした木綿幟が、二三本立つて田舎廻りの旅役者の芝居がある事が知られる。小屋と云つても何間四面かを露祭や小板で圍つてあるだけ、

天井は青空、疊は草敷き舞臺として蓆の屋根と板敷きの床が見物席と違ふばかりだ。芝居の最中に海から吹き込む風は、舞臺の書割幕をあふり上げて、肝心な大立ち廻りの邪魔をする事も稀では無い。野趣瀟々とは本統にこの事だ、化粧道具や鬘や、衣裳や、そんな物が、雜然と取り散らされた樂屋が、小屋の裏へ廻ればそのまゝ見える。立ち坐つたりする役者の影が、明るい灯の色と共に、ひた／＼よする夜潮にユラ／＼と映るのも、また無く美しくそして涼しい。

手に手に、敷物や提灯を携へた見物の人々が、さうした舞臺に演じられる、舊劇と銘うちながら科白は現代語が聞かれたり、節には何の關係もないお笑草が挟まれたりした、合の子芝居を、でも、少からぬ興味を持つて見物するのだ。

心ある人々から見れば、安價であり低級であるとの批難は免れないけれど、それをそしる前にさうした物にでも、寂しい心の慰安を求め、享樂の満足を買はねばならない田舎の人達の淋しさを思はねばならないだらう。それに付けても、近頃チラホラ各地に行はれる、純粹な土地の人々が演ずるページェントや、農村劇がモット盛んになつて、ローカルカラーの鮮明な郷土劇が見られる様になる事が願はしい、いつ迄もあの型にはまつた忠臣蔵や、何々仇討と云ふ様な劇ばかりでは、これからの農村の人達は満足が出来ないであらう。

もつと日常生活に即した、そして新らしい心意の上に、直接燃える様な感激を植まつける現代劇が農村に於て見られるやうになる事が望ましい。(安達限義)

□
あの大幟は、たまらなく好い。「御寶前」と刷毛書した太文字の筆かすれか、大まかにハタツと風に打たれるのを見て、如何に純真な子供心を幸福感に涙ぐます事だらう。そしてその子供らしい、大きい抱擁性で、何物をも、生々した愉快に彩り、家族的の肉親的親和性を濃厚にする。尙それが、その祭禮的なムード、寮圍氣をその環境一帯に油の様に瀾漫させて行く。兎に角大幟は好い。

餘興はもつと郷土的色彩のあるものが好い。そして可及的各氏子獨自性のものが好い。わざと他から興業師を招く等は意味の無い事だ。諸種の神事は復活して好いものがある。出雲地方の大社派神樂等は少し改良すれば好いものだと思ふ。

兎に角大體に於て現状を維持しつつ、改善の歩を漸次進むれば好い。改善すべき緊要専門的傳統の虚飾やなけ出しの裕福を銜つた暗闘的の無謀な大散財が親族や周圍の爲めに眞面目に行はるゝ事である。全く無意義で、且又、この折角の親和性を傷つけるものである。

氏神祭禮は昔から一種ユツタリとした落ち付があつて毫も淫蕩性や浮誇味が無いのは好い傾向だ。兎も角、あんな變な傳統的無意義な習慣を脱却してあの純真な子供達が夢みる祭禮氣分そのまゝで、家族親戚知友相集つてあどけない叙情味の大幟を仰いだ時と同じ氣持で一日の享樂に相互の魂の融和を得るが好い。

それには以前云うた氏子擧つて郷土藝術を眞面自でやる事だ。そこには何等の不純も認めないブライドがあり、温情味があるから。(磯遊多香雪)

□
氏神祭。それは我が國體の上から言つても、最も意義あるものでなくてはなりません。殊に學校とか神社佛閣などを中心として居る地方にあつては一層その感を深く致します。然らば現在の村祭りは如何かと言ひますと、誠に淋しい無意義なもので御座います。私は「私の町の氏神祭」について少し申し上げます。

祭と言つた所で参拜者は神官と學校兒童とを除けば幾何もありません。現在の祭の缺點は茲

にあると思ひます、寺参りはよくしますが宮詣りは三年も五年もの永い間一度もした事のない人が多い位です。敬神の念が薄い爲でもありませんが、一つは祭典に何等面白味のない事が原因して居ると思はれます。貧弱な奏樂と、一般人には譯の分なぬ祝詞との外何もないのです。之は神社の費用が少ない爲に出来ないのかも知れませんが、御神體の渡御、御輿練り、或は馬場を設けて競馬を行ふなど娛樂的方面の分子に富んだ祭禮にしたいと思ひます。それに爲めには神社の合祠が何よりの急務です。今千戸を有する我町内に八ツの神社があります。(此地方は一般に此の位の割です)。一社の平均氏子数は百二十五戸ですこれでは氏神の維持費を負擔するのも容易ではありません。従つて宮殿も御粗末で、崇巖とか森巖といふ感じが起り様がありません。

そこで地勢から考へて、東西二社となし、(一社とすれば尙可)規模を大にし、出来る限り結構を盡し未典も盛大にし、神社を中心とする娛樂的施設をなし、せめて年一回の祭りには人を神社に集中する様にしたいと思ひます。そうしてそれ等の神事に青年團員、處女會員などをあたらしめる事が出来れば、從來部落々々の餘りよくない所に、合して、酒を飲んだり、猥らな話に時を過したりして居る墮風も一新する事が出来ると思ひます。(立川亮作)

□

神聖なる平和の日として村民の一致融合を期したい。

髣髴として我々の頭裡に浮ぶ村祭り。各部落の青年が、産土の神庭に集まり、又は神輿を終日練つて歩いて、酔人相扶けるまではいゝとして、はては争鬪に血腥い風を吹かせた時もある。が、これは餘りに野蠻的であり、幾多の悔恨と村民間の反感とを醸した。この弊習に目覺めた人々が、力を得て終に此様な事を全廢するの時代が來た。がこれは餘り極端だつた。直に鎮守の森さびれて、村民の一致融合の期を無くするとの批評を聞くに至つた。茲に於て近來村祭の復樂を思ふ者の多きを加へて來たのは、淺慮のそしりがないでもないが、此は尤ものことである。

そこで、我々青年は此の村學に對して如何なる希望を有するかといふに、私は「神聖なる平和の日として、村民の一致融合を期したい。神輿を擔ふもよい。……が……心から嬉々笑々、心を清淨無垢にした氏子の欣喜の絶頂でありたい。相撲大いにあるべし。……が……相組んだ體の温みは村民を代表しての厚い接觸でなくてはならぬ。『ワアツ』轟くときの聲は、漂渺の天に對して永久にこの勇士の成功を祈る村民の祈願でありたい。」

剣道柔道も、この神々に於て鍛錬すべきである。管絃も獨り房裡に奏すべきでない。この神庭の席の上に調ぶべきである。

村内あらゆる階級を通じて靈境に雲集し、自己の好嗜の全部を盡し、造詣の總てを調べ、閑雅なる樂の音、勇猛なる氣合、靄々たる笑聲雲外に搖曳するとき最高度の靈的感應が喚起され、神の心は我の心我の心は神の心といふ境に達するや疑ひない。かくしてで思想智識の交換感情の融和が出来、村民一致に貢献することはまことに偉大なるものがあるのである。(松葉熊市)

□

若人が潑刺たる元氣にまかせて赤鉢巻で村中御輿をかつぎ廻るのは、壯者に適應はしい楽しみかと存じます。氏神の拜殿で神樂、狂言、舞を見るのは女子供の喜ぶ行事だらうと思ひます。又村一番の強者は俺だと節くれ立つた腕に力瘤を入れて土俵に力量を争ふ者にも、手に汗を握つて見る者にも、互に楽しい行事と思ひます。

夜は親類縁者の人々と連立ち村の若い衆の芝居を見に土間の棧敷に陣取るのも都人の帝劇見物以上の愉快を感じる事と思ひます。

斯うした無邪氣な各人私自満足なる樂みを得る村祭の行事は改善したくないと思ひます。が、

然し村芝居を高級な教育活動寫眞にする等は喜ぶ可き改善と存じます。今一ツ改善したきは、年中汗水流して蓄積した辛棒金全部を、お理の御馳走費に充て、甚だしきは借財迄することです。祭の御馳走は僅かの御神酒に五目飯に止めたいと存じます。(沖元紫浪)

七

農村青年の修養機關に就ては、社會教育に關する一般の注視が盛んになつたのにつれて、或は理論の上から、或は實際の上から、論究され、調査されて居ることは、今更、申す迄もない事である。しかし、これに關しても、農村青年の要求するものと、それ等の論究若くは調査の結果とは、或は吻合することが六ヶ敷いではないかと思はれる節がないでもない。

私は、二年程前、廣島縣甲奴郡の某青年から、六錢の切手をはつた部厚い手紙を受取つた。新聞の原稿でもあらうかと思つて封を切ると、ソレは倉田百三君の「愛と認識との出發」中にあるすべての獨逸語や英語や佛蘭西語を丹念に抜書きしたものであつた。自分の村にこれが解る人はいないから、忙しいのにすまぬが意味を教へて呉れといふのである。

また同じく二年程前、私は、やはり広島縣某郡の某青年の來訪をうけた。それは數日前の自分の村の青年團例會の雄辯會で、プロバカンダといふ言葉を使った所が、團長である學校長から、そんな危険なことをいふものでないと注意を受けたが、自分は危険でないと思ふが、判斷してくれといふ用件であつた。

この私の遭逢した二つの事例から、敏感なる讀者は、農村青年の修養機關の問題が、簡易圖書館を設けたり、巡回文庫を盛んにしたり、夜學會其他の修學機關を盛んにしたりする事だけでは解決出來ぬものである事を氣付かれたであらう。つまり、この場合に於ても娛樂機關の場合と同様に、知見のすゝんだ青年とさうでない青年とを分けて考へると、知見の進まぬ青年は攻學の念がなく、知識慾が薄い故、よしや、圖書館を設けて、夜學を盛んにしても、それは豫期せられるやうな効果を與へる事は出來ぬのであり、知見の進んだ青年にとつては、さやうな施設では、とても解決されぬ進んだ問題をもつて居るのである。

そこで、農村青年の修養機關は、更に農村青年の指導者の問題と密接な關係をもつて來る譯である。

八

次に農村處女の素質については、私はかつて二三の青年からその感想を受取つた。

彼等青年婦女は、皆愚劣で、俗悪で、無感覺で、一言で云へば、人格の卑しい奴等が多いのです。いや、人格も糸瓜もない者です。それ故、我村には一人としてヴァルゲンが居りません。彼の豊年踊り盆踊り、又縁日の裏面に潜む陰謀を考へて見れば、合點することが出来るのです。そして追ひつ追はれつして、互ひに満足して居るのです。私は、彼等の艶かしい姿を見る度に、おゝ汝等憫む可き男女の群よ！と心の内に叫びます。而して、彼等の風紀を改善すべく叫ぶ人は、一人としてないでせう。どうか、淺山先生、私のこの切ない心に同情して、風紀改善に努力せられんことを切望いたします。

といふのが其の一つである。封筒にも、手紙にもT.M.とあるばかりだから、誰であるか更に不明であるが、其の筆蹟などから見て、全くの農村青年であることは、間違ないやうである。

今日「社會と教化」の八月號が参りました。これは中田先生と仲間とつてゐます。今月から初めてとつたのです。内容は格別なものはありません。文部省囑托の淺山尙氏が「農村青年

の心理に關する「考察」といふ一文を書いて居ます。未完ですから、ほんの冒頭でした。淺山尙といふのは、廣瀬で話した文學士でせう。「反農思想」について新聞で論じたことに、農村青年から反響のあつたことが書いてありました。それは廣島縣と島根縣とでしたが、能義郡山佐村の某が書いた手紙ものつてゐました。山佐村の某とは萬波様、あなたのことだと思ひます。あなたの口調によく似て居ますから、こんな文でした。(文略)これについては、後でくはしく書くとのことですが、淺山氏は此の現象を、時代の推移であると云つて居ます。都會の雜誌の影響ではなくて、文字通りの時代の關係であると見る方が正しい見方であると思つてゐます。農村女子が精神生活の無内容なること、舉措容姿野卑であることが、農村青年の不滿であり、反農思想を醸すものであらうとのことでした。

大分私達の考へに近づいて書いてくれた様に思ひます。私達は、農村生活が勞働に對して報酬が少ないことや、娛樂機關のないことは、さほどに苦にさせぬ。まだ子供ですから實生活にふれないだけ、そしてその子供上りであるものが、どうして其の位なことで都に飛び出しませう。やつぱり要するに相伴ふべき處女のないこととせう。私も、このことはもう前から氣づいて居ます。

農村の處女達が——私達が處女や他の女達に相當な羞恥をもつて居るのに——大膽にふざけ廻ることが私の不滿でした。私ば現在の女子が、とても私達と相伴ふ様な知識をもちうると思ひません。又のぞみません。(望んでも仕方がありません。現在の處女には)が精神生活だけは、しつかりした内容をもつて居てもらひたいと思ふのです、それも六ヶ敷いことになしに、たゞ理性が目ざめてほしいだけです。理性に覺めることしばしが間でも實行の渦からのがれて、しづかに反省することが觀照でせう、このことが、少しづつでも處女の心の中にあつたらと思ふのです。

私が處女にのぞむことは、たゞそれだけです。しかし、それが萬人に出來ないことでしたらさうしてそれが單に藝術的人格でしたら、私は尙更農村にいゝ藝術家がとゞまらねばならぬと思ふのです。

これから、文面は農民藝術論に進んで居るのであるがそれはこゝに要なき事である故、一切を省略する。これは此の稿の冒頭に述べたことゝほど同様のことを「社會と教化」といふ雜誌に書いたのを読んだ感想である。その感想を筆者は隣村の萬波氏といふ友人に送つたのであるが、それを萬波氏が何かの参考にならうかと思ふと言つて、私に送り越したものである。

私の、この反農思想の原因と思はれる四個條の列擧を讀んだ此の二人の青年は、他の三つの原因に就ては殆んど何事をも語らずしてたゞ農村處女の素質の極めて低いことに就てのみ語つて居る。本文前節に引用した四通の書面と、此の二つの手紙とを讀了して、自覺の第一線上に立つて居る農村青年の問題の一つが農村處女の問題であることをたしかめ得たやうな氣がする。

かやうなる傾向は、前にも申し述べた如く、決して性に關する刊行物の賣行きが目立つて著るしくなつて來たといふ讀書界昨今の傾向から誘發されたものでなく、それは實に農村青年の自覺の道程が、そこに達した結果であるに相違ない。従つて、これに對しては徒なる善惡の批判を加ふることの代りに、これに苦惱しつゝある農村青年の心理を理解し(同情すべきである——こゝ迄書いて)一寸ペンを置いた時、私はふと机の上に、九月號の「國本」を見出したので、借りうけて讀むともなしに倉田某の「野の人々」といふ創作を讀んだのであるが、そこに現はれて居るやうな青年男女の無自覺から來る場面は、もう我が國に於ては過去のものであることを疑はない。もし、さやうなる●團氣の力に、今もすべての農村青年は満足して生活してゐるのだと考へて、私が此の節に於て指摘しつゝある傾向を見るならば、私の見解は全く時はづれなものになるであらうが、しかし、さやうに考へることは、よしや、それが全部ではないにしても、眞面目に眞剣に自己改造に目ざめつ

つある農村青年に對する侮辱であり、冒瀆でなければならぬ——

思ふに、この傾向が、誤まらるゝことなしに進み動いたならば、優生學的運動——それはよりよき遺傳をのこすことによつて、次代の社會をよりよき素質の人達の集團であらしむる所の——と、女性に對する正しき認識とが農村青年によつて了得、體認されるに相違ない。優生學的運動に關する記述は、他の機會に譲るが、女性に對する正しき認識が、來るべき、また來らしむべき社會に於ては、必ず體認されなければならぬものであることは、改めて申す迄もない。

英語にベターハーフといふ言葉がある。「良き半分」と直譯し得べき言葉である。普通「妻」といふ意味に使用されて居るが、私は、此の言葉を以て、女性が人類に於て占め得べき地位役割を言ひ現はしたものであるとする。蓋し、女子本然の使命は妻となる——従つて母となる——ことであり、妻本來の位置は、男子である夫に對して、正に良き半分であることではなければならぬからである。私は信ずる、眞に光明に充ち、眞に感謝にみちた世の中は、すべての男子が敬愛に値する妻——従つて母——を得た時にのみ顯現すると。

然し乍ら、此の明白なる事由に就いて、今日、何人の男子と女子とが、充分なる了解を有つて

あるであらうか、予輩は、到る處で憤ろしき極の女性の冒瀆と、悲しきまでの女性の無自覺とを見せつけられることを憾みとする。すべて女性は「愛」そのものである。——武力は他に勝ち、他を亡ぼすことは出来るが眞に他を救ひ、生かすことは出来ぬ。他を救ひ他を生かすのは「愛」である。人類を救うた宗教が、すべて愛を基調としてゐるのを見よ。而してその宗教の開祖達の父なる人の名が傳はらず、母なる人の名のみ傳はつてゐることは何といふ意味深いことであらう。

——男子が、此の事實を了解することが出来ずそれをひたすらに凌辱の對象としてのみ取扱ひ女性が多し取扱はれることに満足して居るならば、世の中は常に争ひ、もがき、競ふことにのみ苦しめられるであらう。平和と協同と及びそれに結果する進歩とは、どうしても「愛の文明」に俟たねばならぬものであり「愛の文明」は、人類の半數を占めて居る女子が、その本質を充分に發揮することによつての外、得難いものであるからである。(拙稿「時代の要求と女子」の一節)

農村の青年が、農村の處女に絶望しつゝあるのは、農村青年の心の中に、かやうなる意味に於ての女子を見出さうとする意識が目ざめかけて居るのではなからうか。この目ざめが、直に優生學的運動を結果することは、言ふまでもない。かう考へると、此の傾向は實は、農村青年の心の裡に生ひ立ちつゝある優生學的運動の承認、及び女性に對する正しき認識の、先行的顯現であるのではな

からうか。

かくして農村處女の教養が、看過し難き問題になるのである。農村處女の教養は、言ふまでもなく處女會——近頃は女子青年會といふやうな名によつて呼ぶ人もあるやうであるが——の仕事であるが、私は、こゝに記述し且つ解釋した農村青年の心理的傾向を照準の重なるものにして、處女會の内容は、くみ立てらるべきであると考へる。安價なる職業的技術と、皮淺にして斷片的なる知識とを與ふることを止めて、女性本然の力を彼等からよびさまし、人類に於て女子の^{地位}をむる地歩を彼等に了得させることが、農村處女會の第一の仕事であるべきであると考へる。處女會に對する私の所見は、他日、稿を改めて發表して見たいと思ふが、農村青年の農村處女に對する見方が、單なる凌辱の對象としての女から久遠の女性としての女へ高揚しつゝあることを、私は多くの讀者と共に注意したのである。この傾向がほんとうに強められたならば、前に引例した「野の人々」中にあらはれるやうな青年男女は、我が國の農村から影をひそめて、そこには禮儀と節制とに富んだ、さうして人生を深く、正しくたのしみ得る男女のみがあるであらう。

九

以上、私は、私の反農思想の原因と目すべき原因の三つについて、夫々少しづつ、の説述を了へて、最後の「農村の先輩が青年の思想を理解しないこと」といふ一項を残すだけになつた。一兩年前——事實は果してどの位のものであるか知らぬけれども、——青年會館の建設に關して抗議したとか、内務、文部兩大臣の演説に彌次を飛ばしたとか、農村青年に關する様々の事柄が傳へられて來たことから、農村青年に對する一段の見方に多少の動搖が生じたやうであるが、農村青年は決して彼等の父兄と同じやうなら田吾作ではないのである。數年前、私は廣島縣の囑托として、青年團に關係してゐたのであるが、或る時、一人の青年から「先生が縣廳の人であるといふことが、切角の先生のお話をその儘、私共にうけとることを困難にします。先生が、全く野の人であつてくれればとばかり思ひます」といふ告白をきいて、未だ農村青年の心理に通すること淺かつた當時の私は、驚き入つたのであつた。いづれにしても農村青年の心的生活が、近年に至つて恐ろしく躍進しつつあることは疑へないのである。が、本節の主要題目たるべき自己の思想の先輩によつて理解せられぬ悩みは、農村青年にのみ特有のことではなく現代の青年が、共通して悩んでゐることである故、これは他の機會に譲るであらう。

10

かくの如く、私は農村青年の心理を考察して、反農思想のかなりに横溢してゐることを指摘し、かねて其の原因をも討尋したのであるが、しかし農村青年の全部が、この思想の抱持者であるかといふと、それは必ずしもさうではない。

私は一昨々年の三月、廣島縣下の某郡に於ける中堅青年の講習會に列席し、會員と寢食を共にして氣持よい三日間を過したのであつたが、最後の晩の懇話會の席上で私は一青年によつて語られた次のやうな言葉をきいた。

淺山講師の御講話中に、我々農村青年の心理に關するお話がありました。如何にも、あの通りだと思ひます。が、只一つ、「都會に對する反感」に言ひ及ぼされなかつたのは、如何いふ譯かと思ひます。

我々農村青年の間には、農村の現状を極端に忌避して、都會にあこがれ、都會に流れ出る傾向があると同時に、また都會人のやり方をにくみ、都會に悪感を招く傾向があります。さうして、本當に自覺してゐる所の、又は自覺しやうとして居る所の青年の胸には、多く後の方の傾

向が、強くなりつゝあるのではないかと考へられます。

私は、この言葉をきいた時に、「あらざれかし」と祈つて居つたものに、思ひがけ無くもぶつつかつたやうな複雑な感情を禁じ得なかつた。その青年は、更に語をついで次のやうに説き述べた。

私共が都會の悪感を惡むのは、今日の都會それ自身が、吾々の心身の上によい影響を與へることが出来ないやうな情態であるからではなくて、全く都會人の我々農民に對する態度がよくないからであります。都會人の我々農民に對する態度は、侮蔑そのもの、不誠意そのものであります。のみならず、彼等は我々から詐欺的行爲によつて、さまざまのものを搾り取つて行きます。しかも、たゞ朴直であつて、さういふ都會人の詐謀を見ぬくことの出來ぬ我々農村の先輩は、都のものは、賢いからといふ理由のもとに、諦め諦めして居つたのであります。新聞も讀まず、雑誌も讀まず、従つて今日の社會の現状に關する理解と人間の行爲に對する批判とを有たず、たゞ徳川時代以來、長く虐げられて來てゐた結果である所の奴隸的な、さうして他の何れの階級の人達よりも劣つてゐることを承認する感情を、むしろ人民の正しき道德的觀念であると考へる。我々の父兄先輩としては無理も無いことかも知れません。しかし、自覺したる我々農村青年は、都會人のかうした態度を、農民が愚かであるからといふ理由のもとに、

承認することは出來ません。否、進んでその不當をならさざるを得ないのであります。

青年はかく語つて、席についたのであつたが、私にはこの短かきテーブル、スピーチによつて、新らしく一つの考課が與へられたのであつた。

一一

その年の晩秋、私は、偶々列席したやはり廣島縣下の某地方に於ける教員練習會で、この一青年のスピーチを紹介し、併せて私の感想を附け加へたことがある。さうすると、それから一週間ばかり経つて、私は一青年から次のやうな手紙を受け取つた。

今日は、私の村の青年團總會の下相談の爲め、幹部會を小學校で開きました、その席上で○先生から先生のお話になつたことを聞きました。私共は暫くそのことで話し合つたのでしたが、結局、誰も誰も否定するものはありませんでした。つまり、私共の心の中には、漠然とした都會反感があつたのであります。さうして、多くそれに氣付かなかつたのであります。氣付いても、それを整然とした形でもたなかつたのであります。斯うだ、あゝだといはれて見ると、始めてはつきりした譯であります。我々農村の者が、多くの人からふみつけられ、馬鹿にせら

れたことは、年久しいものです。私共は、ほんとうにしつかりしなければならぬと思ひます。この手紙の筆者であるところの青年は、その二三年前から、私が毎年一回づゝ出かけた青年講習會の會員であつたことや、私が廣島府廳にゐた頃主幹をして居つた雑誌の投稿家であつた關係やらで、親しく話しもし、絶えず手紙の往復もしてゐる青年であるが、教員練習會に出席した人から私のお話を傳へ聞いて、自分の感想を申し送つたものであることは、申す迄もない。

一一一

私は、此の手紙を読み了つて、農村青年の間には、反農思想と相並んで、都會に對する反感が、かなり力強く醗酵しつゝあることを確めざるを得なかつた。都會人に對する農村人の呪ひ！、都會と農村との争ひ！ 私は多くの人の信ずる如くに、人は常にその屬する社會をば住みよき社會にするために、出來得る限りの熱意を注ぐべきであると信ずる。而して、住みよき社會の統制原理は、公正と協同とであると信ずる。公正と協同との破られざる社會は、惠まれたる社會では無い。そこは、露骨なる自己意識と、極度な排他感情と、さうして争ひと嫉みとが跳梁して、他人に對する敬、他人に對する愛、平和、互助、互讓、さういふものが影を薄くした社會である。而して、公正と協

同とを破つて、社會をかくの如くに誘ひ導くものは、實に「他に打ちかちさへすればいゝ、自分さへ儲ければいゝ」といふ思想である。此の思想が徹底する時には、他を犠牲にし、他を踏み臺にして、自己の私利私益をはからうとするものか、若くはそれに成功するものが、幅をきかすことになる。さうして、それが展開すれば、必ず闘争が生れる。社會のあらゆる部分が、それらに反情と闘念とを以て相對する時、あるべき社會が出現し得るであらうか。わけても、都會と農村とが、闘争關係によつて對立するといふことは、考へるだけでも悲しいことではないか。私は久しくこれを纏れて居た。しかもこの惧れは事實の上は肯定を餘儀なくせられた譯である。

一一三

由來、農村の問題といへば、地主對小作の争議か、農村民の都會への流出、若くは農村人口の増進を數へ上げるのであるが、未だ都會に對する反感の醗酵が、多くの人達に留意もされず、指摘もされぬのは、どういふ譯であらうか。此の意味に於て、安藤廣太郎、博士が「私の再度繰り返して高唱したいのは、農村内に於ける小争議は兎に角、都會の人々が農村に對する理解のないといふことは、何時か田舎と都會との争議となつて現はれはしないかと思ふ。現在商業立國、工業立國を

主張する人々があるけれども、それ等の人には、商業工業の裏面に農村あり、農業あることを忘れて居る。工業労働者は農村から、材料は農村から、食料は農村から、皆供給されて居るのに、農村を無視し農民を踏み付けてゐるのは、やがて農民の自覚が強くなつた曉に、必ず農村對都會の争議となつて現はれ、しかも食物を以て對抗するのであるから、根強いものになつて、現はれはしないかと憂慮される、農民の團結した場合の力は、實に強いものである。利を以て團結する商工業者の團結とは全然趣を異にしてゐる。食糧を以て持久戰的に出られた場合には、他のすべての職業、凡ての階級の人々は惨敗を見なければならぬ。都會の人が農村——農民を理解しない今日の様な情態が繼續すれば、必ず將來ある時機に争闘となつて現はれる日のある事を心配されてはならぬ。「農業世界」二月號二六——二七頁、と云はれたのは、その都會と農村との關係についてその見方は兎に角として、兩者の間に於ける争闘の可能を指摘されたことは特筆に値するものである。

既に、都會に對する反感が、或る形をとつて生ひ立ちつゝある以上、これに對する處置はどうすべきであるか。氣早き人達は、直ぐにもこれが考究に進むであらうが、私は讀者と共に、今暫く農村青年の心緒の聲をきくであらう。

一四

昨年の春、私は山陰道の或る地方での青年大會で、一人の青年が次のやうに語るのを聞いた。

識者とか先輩とかいふ人達は、しきりに我々に向つて農村を捨てるなといひます。新聞や雑誌を見ると我々農村青年が、都會へ、都會へと飛び出すことが農村の一大事であると書いてあります。成る程、農村から都會に出るものゝかなりあることも、それが我々青年に多いことも、事實であります。しかし私は、否眞に正しき人生を送らんことを期する私共は、決して農村を捨てません。茂つた山、緑の丘、赭き土、さうして太陽に輝き、小川は呷き、樹々に花が咲き、野菜は實る。あゝわが愛する農村よ。私は、この農村に生まれました。そうして今日まで生きて來ました。私が古い、私が葬らるべき所も、この農村を外にして何處にありませう。と申して、私は無條件に農村を現状を承認する譯ではありません。貧しき衣食、不潔なる住居、低級なる知識、改良し發達さすべきものは、甚だ多いのであります。我々自覺せる農村青年は、まづこれ等の改良發達さすべきものを改良發達させ、農村をして豊かな自然の恵みにふさはしい内容をもたせなければなりません。その爲めには、我々は二つの戦ひを覺悟する必要があります。

第一は、我々農村の者の無知であり、世間知らずであることをいゝ事にして、農村からいろいろなものゝを誤魔化し取つて、しかも傲然として農村の者の馬鹿であることを冷笑する都會の者に對してゝあります。第二は、この都會の者の手先になつたり、共謀者になつたりして、自分の金儲けをする物識り、又は小知慧があると云はれる我が農村と先輩の一部に對してゝあります。

青年は、是に續けて、都會の人が恣に農村民をごまかして、色々踏みつけた事をしてゐるのは、農村民が無知であるといふことにも關係はあるが、しかし無知をいゝ事にして、誦詐瞞着の限りをつくすといふのは世にも卑怯な不道德的の行爲であること、また農村の先輩の一部が、これと一味して、自己の懷中を肥さうとするのは、稻の害虫以上の害虫であつて、建設せんとする農村文明の賊であること、これ等のことを、絢爛な修辭と感傷的な語調——餘談であるが、出雲人の聲調は甚だ音樂的である——とて説き述べて、かなりの印象を會衆に銘み得たらしかつた。

私は、此の演説をきいて、都會に對する反感が、こゝにも、生ひ立つてゐることを知つたと同時に、その反感が、單なる漠とした憎惡の情に止まらず、農村改造若くは田園文化の建設といふ理想に結びつけられてゐることを知つた。同時に、此の都會反感の思想が、誘導され、傾向つけられ得

べき方途を明かにし得たやうな氣持を感じたのであつた。

一五

それから間もなくのことである。私は二人の農村青年に來訪をうけた。——當時、私は松江市に居住してをつた——さうして、二時間近くも話したのであつたが、その二人の青年は、頻りに武者小路氏の「新しい村」をなつかしがつてをつたが、「新しい村」の一人にならうかといふ譯ではなくて、自分達の村を「新しい村」にしたいといふのらしかつた。種々聞いて見ると、武者小路氏の「新しい村」が如何なる理想と原則の上に實現されるものであるかに就ては、充分な理解は無いやうでたゞ農村を思ひきり立派なものにしようといふ熱意が燃えてゐることが見受けられた。「新しい村」は兎に角、私はその改良の熱意を非常に嬉しいものに思つた。その青年達の話のうちに次のやうな一節があつた。

都會の者共は、自分も近頃迄は田舎者であつた癖に一しきりえらさうな顔をして我々を馬鹿者扱ひにする。それが癪ですよ。私共は、小さかつたから氣がつかかなかつたのですが、氣が付いて見ると、本當に農村は荒されたものです。第一、自分達の姉や妹は女工として奪はれて、

身體も心もこはしてゐる。山の木は、二足三文に買はれて了ふ。こゝからは鉛が出るの、こゝからは何が出ると、鑛山ゴロにはたゞ使はれる。生絲だつて、米だつて、全く阿呆らしい値でやられるのですからね。さういふ場合、全く嘘八百をまことしやかに並べ立てたり、心にもないお世辭や親切らしさを見せたりして、正直一遍の私達の父親共をだまして了ふのです。それはヒドイものですよ。あなたには想像もつきませんよ。

私は、かく語り出づる青年の顔を見つゝ、浩嘆せざるを得なかつた。外にも色々な事情があるであらう。しかし、農村青年の都會反感の直接原因が、都會人の農村に對する傲慢な、詐欺的な態度及びその態度によつてなされる擧擧採取であることは、本文の冒頭に述べた一青年の言葉と今こゝに書き記した二青年の談話とによつても、充分に、且つ容易に知ることが出来る。

儲けさへすればいゝといふ主義を出来るだけ發揮することが商人の本領であると誤信して居る都市の商人は、雪崩れのやうに農村にはいりこんで、朴直な農村人をごまかせるだけごまかし、欺けるだけ欺き、米を買ひ、山を買ひ、繭を買ひ、材木を買ひ、女を買ひ、さうして株をうりつけ、相場に手を出させないのであつた。それでも、農村の人が「都會の人は利口だ」といふだけに止まる間は、無難であるが、「どうもけしからぬ」と憤激するやうになれば、もう鬭争意識の發生を見ずには

落着出来ないのである。「而して、事態をこゝに誘いた責が、共存共榮の原則を無視し、社會連帯の思想を蹂躪した者にあることは當然である。

しかも、都會反感に對する療法の一つがこゝから見出されべきことは、聰明なる讀者のたやすく氣付かれる所であらうと思ふ。

一六

私は、更にさまざまなる農村青年の心緒の聲をきゝつゝ、私の考察を進め行くであらう。

農村の青年が、數年來、著しく面目を改めて來たことも事實である。「彼等のうちの少数は、思想問題社會問題にさへ驚くべき思辨をすゝめて居る。」と云はれたのは嘘でない。そこでこの機運が、正しく傾向づけられるか否かは、直に將來に於ける我が國地方文化の内容如何に關係して來ねばならぬと思ふ。

自分は、本紙の社説欄を、しばしば我等農村青年の爲に割かれることを感謝するものであるが、殊に、十一日のそれは暗示に富んだ論文であつた。我々は、近來に至つて、つくづく都會人の我々に對する冷笑蔑視が癢にさはるやうになつたのであるが、さうしてそれを一途に都會

人の利己的な、且傲慢な心の持ち方に歸して居たのであるが、それは必しも都會人ばかりを責むべきでは無いので、我々の心生活に自反省せねばならぬものがあるのである。

我々は、田舎ツ平とか、赤毛布とかいふ都會人の侮言罵辭を、甘んじて受けて居たではないか。そうして我々の素朴と眞率とを、「開けない」として慚ぢ、都會人の奢侈と權柄とを、「進んで居る」として羨んで居たではないか。斯くして、我々農村青年の如きも、最初から都會の青年に對してハンデイキャップを置き、自ら彼の下位にあるとして甘んじて居たではないか。否、そのみならず、彼等を模倣することこそ、自己を新しくし、自己を文明にする所以であるとし、つとめて新形の帽子を求め、争ふて新流行の摘髮にならうて居たではないか。この我々の心況こそは、實に都會の人の農村蹂躪の志向を強め、且つその活動を許す原機であつたと思ふ。

我々は、都會人が——我々を馬鹿にしきつて、我々から欺すやうにして多くの物を奪つて行つた都會人に對して、目にももの見せてやらなければならぬと思ふ。彼等をして思ひ當らせ、さうして慚ぢさせ、後悔させるやうに仕向けてやらなければならぬと思ふ。が、その爲に採るべき方法が何であるべきかに就ては考慮を要する。若し、現在——と言ふよりは迄の農村の老壯

者や青年などの抱懐して來た考へ方を捨てずその上に報復の手段を講ずるならば、それは失敗に終ると私は信ずる。否、報復その事が不可能だと私は信ずる。何故かといふに、今日までのやうに、都會人をば、最初から優越の地位に許して置き乍ら、それと對等に應酬するといふことは、あり得られぬことであるからである。

そこで、私は都會人の農村蹂躪に對する防衛策をば、農村文化の建設にありとせざるを得ないのである。而して農村文化建設は、農村と都會との間に存する「特異」を識別することを第一歩とする。即ち、農村には農村としての文化が生ひ立つべきであつて、農村が文化するといふことは、決して今日の都會がもつやうなものをもつやうになることではないといふことの自覺を出發點とする。

たゞ徒らに、都會人に對する反感にのみ激昂することをやめよ、我々は徐ろに農村文化を建設することによつて正當なる、さうして徹底的なる都會人への報復をなすべきである。

これは、昨年夏、私がある新聞を通じて、農村青年によびかけた時、ある青年が、これに應じて、私に寄せた感想の大要である。讀者は、前節に引用して山陰道の一青年の演説の要旨と併せ讀むことによつて、今日、農村青年の胸に生ひ立ちつゝある都會に對する反感が、反動的に農村文化

建設の思想を喚び起しつゝあることを、一層明瞭に知り得られたであらうと思ふ、農村の文化的向上が、農村自體の上から目標づけらるべきであり、又方法づけらるべきでもあることが農村青年によつて自覺されはじめ、しかも、それが農村文明建設の基調であらうとして居ることは、如何なる點からも、喜ぶべきことでなければならぬ。が、これに關する更に詳細なる解説は、不日公にするであらう所の「農村文明觀」に譲つて、こゝでは、彼等の都會に對する反感の體貌だけを指摘するに止める。

一七

私は——恐らく讀者もさうであらうと思ふが——以上數人の青年の感想から、彼等の都會に對する反感は、復讐的態度にのみ終始しようとするのではなく、反動的に田園文化の建設への努力を生みつゝあることを歸納し得る。それはつまり、今日の目覺め、若くは目覺めんとしつゝある農村青年が、機にふれて口にする都會反感は、都會中心文明——それは資本主義經濟組織の成熟に隨伴する必然的現象である所の——に對する反感ではなくて、農村人に對する都會人の行爲に對する反感であることの證據である。短かく言へば、「都會」に對する反感でなくて、「都會人」に對する反感で

あることの證據である。この事は、昨年秋、私の手にはいつた次のやうな一青年の手紙で、一層確め得られるやうに思ふ。

(前略) 私達は馬鹿でした。土に對する私達の柔順を誰にでも示すことを、私達の本分であると思つて居りました。さうして、文明に對しては、どうしても都會人と肩をならべて伴ひ進むことは出来ぬ、さういふ點では、一切都會人には頭が上らぬとかういふ心持ちが、私達の柔順を、むしろ自卑に近く引下げてさへ居ました。都會の人達が、さまざまの不都合をはたらいても、私達は私達の無知を悲しみ、都會の人達のすばしこいに驚嘆するのが先きで、都會の人に對する怒り、憎みはその次ぎにわきました。

しかし、それは間違です。私達は、もう都會の人に對する私達の柔順を捨てねばなりません。さうして如何なる點からも、都會の人達の亡狀を責めねばなりません。是れ以上彼等の勝手は許せません。それにしても、従來、農村に於て指導的地位にあつた人達が、農村を如何にすべきかといふことに對して、如何に無定見であつたかといふことが、近頃しみじみとわかります。

「責める」といふのも「都會の人達」である「許せぬ」といふのも「都會の人達」である。「都會」で

はない「都會文明」そのものではない。無論、「都會」に今日のやうな繁榮を許し、今日のやうな都會文明の獨占を許す所のエコノミカル、システムそのものではない。

それ故、今日に於ける農村青年の胸に生ひ立ちつゝある都會反感の傾向及び程度は、私の考へ得る範圍に於ては、未だ戰慄に値するものはないと言ひ切ることが出来る。

一八

元來農村の青年程、取りわけ土に生きつゝセルフ、メイドを志して居る青年達程、純良なものは無い。

先生、當地は寒明けとともに、めつきり春らしくなりました。そして峽の凹地に、残つて居るばかりで雪もすつかり消えました。露の蒸などが、ぼつ／＼頭を出すのも近いうちだらうと存じて居ります。何だか地上一帯には、春のやはらぎが、みち渡つて來たやうで御座います。人里からすつと離れて、丁度別世界の感のある一軒家の私の宅の後庭にも、木瓜やさくらや椿が茂つて居ます。それがみんな芽をうす赤くして、春を迎へて居るので御座います。何でも白熱的に働かねばならぬぞ……こんな力強い何者かゞ又私の四肢へ言ひ知れぬ精力を與へてゐる

ので御座います、かくして私は、百萬の金を得んとする努力よりも、もつと／＼愉快的な、正しく生きる努力に生き、ひとかどの物質を得た歡びよりも、正しき生活に依つて得た恵まれたる幸福に生くるので御座います。實は只今、先生の「郊外雜記」を讀んで了つたので御座います。が、私たちのやうな田舎ものには、とても想像にだも及びません。あゝした風な生活をしてゐる人達を思ひますと、私たちは先づその人達を氣の毒に思ひます、と同時に、省みて私たちの生活に對する信念がつよめられます。私は都會の人達の、これ迄田舎に對して試みた不都合を責めるよりも、貧しい農民生活は力強いぞと云ふ觀念が、しつかりと刻まれました。それにしても、私の働く野山には、薪木がみち、大きなキャベツや白菜がみちてゐるのに、先生のお住居さへ近ければ、まだ畑泥の生々しいのを投り込んで差上げるのに――

何といふ純良な魂であらう。これは、私が上京以來、約八ヶ月間の郊外生活中に私の見聞した事件を直寫した「郊外雜記」といふ雜筆を讀み了つて、直ぐ筆をとつたものらしいのであるが、夜逃をしたり、かけを仆したり、ごまかしそのものゝやうな生活をする一部の都會人の話をきくと、惡みと怒りを忘れて、先づ氣の毒がり、直ぐ自らの生活をかへりみて居る

郊外雜記

こゝ——東京市外西巢鴨——に移り住んでから、もう半ヶ年といふ時が過ぎた。郊外生活といふと、真雅な、清新な、さうして貴族的な生活を聯想させるが、それは語感に過ぎぬのであつて、事實は、全くこれに反する。私は、どこが市内に、適当な家が空きはせぬかと思ひ續けつゝ、この半ヶ年を過した。

元來、日本の大都會は、都會の本義——それは人間をして最も容易に文化生活を營ましめ、またそれを高めしめるに好都合なる場所であるべきであるが——とは正反して、高價、危険、不安、惡徳そのものとして存在して居る。今日に於ては、自分の魂を傷けることなしに都會生活を生活することは、餘程の用意がなくては出来ない。私は、都會の無限に強きかに見ゆる力を嘆美する前に、その示現する多くの惡態を悲しまざるを得ないのである。而してその大都會の惡態を倍大にしたものが、東京の郊外である。

私が友達の世話で、やつと此の家を見つけ出したのは、去年の七月のはじめであつた。もうすつかり夏になりきつた空には、烈日の光りが粉のやうに舞ひ散つて居つた。私は家族のものと、曲折や凸凹の多い道を、王子電車の新田停留場から、やつとの思ひで、辿つて来たのであつた。三月に竣成した家だといふのに、もう二度も空いたのださうである。さうして、酒屋の丁稚の話によると、其の二度とも、借主は夜逃同様に、近所の店屋を借り伏して、どこかに行衛を晦ましたのださうである。硝子の破片や、手水鉢の

ここれが、庭のそこ、こゝに散らばつて居た。流し月の障子には、支那人らしい手で寒山會といふ文字が書いてあつたりした。

それでも、南向になつて居るから、夜はすゞしい月影が、部屋の中程迄さしこんで来た。それに丁度、家の前が二百坪ばかりの長方形の島で、そのはづれに、一かたまりの高い落葉樹が並んでゐるので、何となしに田園の清新さがあつた。

丁度その頃、私の家を中心に、七八十軒の借家が建築中であつた。屋根瓦を置いて居るのもあれば、やつと棟上げがすんだばかりのもあつた。これから地ならしをしようといふのもあつた。大工の鑿の音や、槌の音が、朝から晩までひつきりなしに響いた。月のある夜などは、かなり遅くまで、そのひびきは止まなかつた。

そのうちに一軒々々、門燈が出来、一寸した植込が出来、さうして貸家と書いた紙が斜にはられて行つた。その造作もない落成が、家建てといふと、餘程大仰な仕事であると思ひ込む。小さい時からの私の癖を、すん／＼訂正した。その出来上つた家は、大概、疊一枚二圓の割で、家賃がきめられた。さうしてあれがふさがらうかといふ私の懸念を裏切りつゝ、短くて半月、長くても一個月のうちには、皆借手がついた。

かうした雜駁で、喧噪で、何の落着きもないうちにも、どこか「發展」とか「創造」とかいふやうな感じを味はせるものがないでもなかつた。行水をすました長女と次女を兩側にこしかけさせて、夏の夕ぐれ

の椽側で私はよく「開拓」の色調に思ひ耽つたのであつた。そんな時には、きまつたやうに向ふの高い落葉樹が、夕風に白い葉裏を見せ見せした。

前の畑の茄子の花が小さくなつて、植込みに戸迷ふ夕方の風がうすら冷える頃になると、借家人仲間では、私が一番古参になつた。私は引越しそばを二軒にくばつて、五軒から貰つた。

妻は、くもものが高い高いといった。私は、東京だからといつて、いつもそれが當然であるやうな口吻を洩した。

すると八月の中頃の或る新聞の雑筆欄に、西巢鴨あたりは、市内で借住した人達の隠れ場所だから、其の邊の商人もちやんとそこを呑み込んで、他所とは三割か四割高く賣つて居るといふ意味の記事が出た。それを妻に見せると、「矢張り高いんですね」と獨り言のやうに云つた。私も「私達のやうに正直に支拂をするものは、全く馬鹿を見る譯で、割に合はないね」といふ言葉が、咽喉先まで出かけたのを、やつと抑へた。割に合はぬ、さういつた打算一點張りの考を言ひ現はすことは、恥しいことだと思つたからである。

多くの場合に於て、當り前の方法で生きることは、一見割りの合はぬやうに見ても感じもするものである。しかし、さういふ場合には、勇気づけられねばならぬ。當り前に生きること程、正しいことはなく、正しいこと程、心の安易を得ることにはなく、心が安易である程、わが生を保ち強めることはないからである。が、かうした一些事にも、私の道心は、逢着しないてよい事に逢着して、味はぬでいゝ動搖——がすかである。

すぐもとに復したとはいひ乍ら——を味つたことは、呑み得ない。恥しいことであるが、それは事實である。

九月の半頃であつたが、私の斜めうしろの家に居た人がどこかに引越した。その人達は七月の末に移つて来たのであつた。荷物が曳き出されてから、その女主人が——その家は五五六の後家さんらしい女と、大學生といふ男と十二三の女の子の三人ぐらしてあつた——挨拶に見えたが、高輪の方にといつただけで、番地は素より、町の名も云はなかつた。無論、轉居告知の貼紙などもせず了ひであつた。

ところが、その翌月、役所から歸ると、妻は私の顔を見るなり「Kさんは夜逃げらしいんですよ」と言ふ。「どうして」と訊くと、十時頃、いつも來つての魚屋が來て、Kさんはどこに移つたか知らぬかといふ。挨拶には見えたが場所のお話はなかつたと答へると、昨日の朝、私が廻つたのに、何とも云はずボウハイと引こして了ふのはひどい。四圓四五十錢程貸があつたのに、と至極口惜しがつて居たさうである。

あの朴實らしい人が——私は全く意外なものに打つ突かつたやうに感じた。

それから一月ばかり立つた或る日、この魚屋がやつて來て、Kといふのは夜逃げの常習犯で、太い野郎だといつて怒つて行つた。何でも魚屋は、高輪といふだけを手裏に、二日程つぶして探し歩いたんださうである。さうして、やつとKといふ近頃引越して來た家を見出したが、標札は、前のK、Hと違つて、K Bとしてあつた。けれども間違はなさうだから、思ひきつて臺所の障子を開けて來意を告げると、女中らしいものが出來て、ちつとも知らぬ、多分家違ひだらうと、丸でにべもない返事である。違ひないと

は思ふものゝ、踏み込む譯にく行かないから、門口に廻つてぢつと氣配を伺つて居ると、障子をあけて女の人が椽に出て来た。間違ないKの婆さんであつたさうである。

その話を聞いて、私はまた思つた。ママあの朴實らしい女の人が——と、

Kの居た家は約一月程空いて居たが、九月の半頃になつて、借り手がついた。若夫婦つきりで、門の柱には、東京帝國大學法學部學生N、Sといふ名刺が貼りつけられた。男は朝になると角帽を被て、どこかに出て行つた。夕方にはいつも二人連れで、出て行つた。御用開きの丁稚は、私の妻に「あれだけの家にはいる人にしては、荷物が少ない。引越しの車を見たが、蒲團一揃ひと、本箱と机と椅子だけだつた」といつたさうである。

が、それから毎日々々、世帯道具がふえて行つた。新調の盥が来た。大正ヘツツイが来た。米櫃が来た。さうして、絶えず蕎麥屋がドンブリを運び込んだ。私共は、始めて新世帯をもつた人達だと思つた。さうして、御用開きの丁稚の邪推深い言葉を笑つた。

二十日程たつた或る日の午後、その人達はどこかに引越して了つた。無論、近所に挨拶もしなかつた。標札もかけつばなしであつた。移つて来た時、小さな手車一臺であつた荷物が、二臺にも載りきれぬ程に殖えてゐた。

其の夕方、薪屋が、八百屋が、雜貨屋が、ひつきりなしに私の家に来て、Hさんはどこに引越したか知らぬかといふ。「少しも知らぬ」といふと、皆「ママやられた」といつて聲を落した。薪屋は、標炭を二俵

買つたんださうである。八百屋は、大した金目にはならぬが、それでも日々野菜を入れてゐたのださうである。雜貨屋は、鹽や、米櫃や、そんなものを十五六圓程貸して置いたのださうである。

「お金はいつ頂けるのかといふと、お金は銀行に預けてあるけれども、主人が學校に通つてゐるから時間の都合でどうしても未だ引き出せぬ。どうか今一兩日待つてくれとさう細君がいふものだから、兎に角帝國大學生だしと思つて我慢して居たんですが……ひどい奴でしたな」

雜貨商の主人は、かういつて掛けへ放しのNといふ標札を睨みかへした。

「まるで詐欺です」

主人は最後に此の言葉をつけて、話をきつた。いかにもその仕打を考へて見ると、最初から一定の計劃があり、成心があつての仕事としか考へられない。それにしてもかうして、其の場其の場を逃げまはつて居る人の、行く先はどうなるのであらう。私は、何となしに浩嘆せざるを得なかつた。

私の家の丁度裏にも一軒貸家がある。私がこゝに來たのと入り替へ位に空いたのであつたが、二箇月ばかりして、ふさがつた。標札には、SとYといふ二家族の姓らしいものが書いてあつた。丁度その引越した日であつた。子供と庭で遊んで居ると、垣根越しに此の裏に越された方は、Sさんといふのぢやないかとたづねる二十前後の若夫人があつた。知らぬといふと

「ぢや、御主人の外に十四五の嬢さんが二人に、五六つの男の子が一人、それに女中らしい若い女がゐやしませんか」

と云ふ。さうのやうにも思ふが、素より判然しないことであるから、私は「さうらしくもあるが、確かとはわかりません」と答へた。すると、その女の人は、御免下さいとも云はず門の戸を開けて、庭に入つてきて、聲を潜めてかういつた。

「少しお金を御融通して居たので、御返済を願つたところが、今日のお正午過ぎに来てくれといふ事だつたから、お約束通り上つて見ると、すつかり引越して了つていらつしやるんですよ。そこで、近頃の運送店を訊きまはると、やつとこゝいらだといふ見當がついたので、参つたやうな譯ですの……御主人は久榮に出でいらつしたのですが、今は何でも小さな商店に出でいらつしやるやうです。それに女中さんとへんな仲になつて、奥さんは子供をのこしてお實家に歸つていらつしやるんですよ」

私は、金の方の問題よりも、よくある例の三角關係といふ奴ぢやないかと思つたりした。女は「兎に角いつて見ませう」といつて、丁寧に御辭儀して出て行つた。

それから三箇月ばかり立つた或る晩、若い男の荒々しい罵聲と泣くやうな女の聲とが聞こえて来た。注意すると、それは裏家の勝手口である。何でも、懸金の催使らしかつた。私は壓搾されるやうな思ひで、その聲の止むのを待つた。

それから、暫くの間、何といふこともなかつたが十月半頃の或る晩、妙に裏の家からガタ／＼した音がきこえて来た。引續いて、荷物など運び出すらしい音もきこえたが、その晩は丁度來客があつたので、別に深い注意も拂へなかつた。

翌朝起きて裏の家をのぞいて見ると、玄關の戸も、兩戸もあけつげなして、器も人も影もない。夜逃したのである。私はまた驚かされ、悲しまされた。

その日の朝から、いろ／＼な人が、裏の人の行衛を聞きに來た。すこしも知らないと言ふと、昔な商がみして、また仆されたと言ひ云ひ歸つて行つた。ある指物屋などは丁度一週前に、六十五圓の筆筒を一棹十五日支拂の約束で入れたのださうである。

「こんな調子ぢや、成る程、ものは高い譯だ」
私がかういつて妻と苦笑した。

十一月の末になつて、家の前の島のそこ／＼に札が立てられた。また貸家が立つのであらう。私は、私の領分がいよ／＼取り上げられるやうなわびしい氣がした。前の落葉樹に、もう小鳥も來なくなるかと思ふと淋しかつた。

+ x + + +

それ故、若し彼等の考へ方を自然の展開にまかせたならば、都會に對する反感も、恐らく、都會の文化が生産に於ける閑散階級と同じ様に、地方の生産に寄食する所の文化である故に、都會文化の生殺は農村人の手にあるといふ風に前提づけることなく、今日のやうな農村に於ける文化の無展開は、健全なる社會生活の上に、好ましい影響を及ぼすものでないといふ風に結論づけるであらう。

世の識者たちで、若しも農村青年の胸に脈搏ちつゝある都會反感に對して、何等かの對策を講じようと志される方があるならば、彼等がほんとうに善良な心の持主であるといふことの認識を忘れないで頂きたいと思ふ。

一九

しかし、農村青年が善良な魂の持ち主であるといふことは、都會人の從來のやうな農村に對する態度を許すといふことではない。いはれなくふみ躪られ、限りなく傷けやぶられたならば、如何に善良な魂であつても、「自省」と「寛容」とに定着することは出来なくなるであらう。

私は、讀者と共に、私の手元にある一篇の詩を一瞥したい。

都會の人等よ！

美服にまとふ醜惡な魄、

巧辯につゝむ譎詐な根性、

その傲慢その己惚、

百姓を人の數とも思はぬそのやり口、

一體それは誰に許された權利なのか。

都會は文化の前進！

なる程さうだ。それに違ひない。

との事が、しかし君等に暴慢を許す理由にはならぬ。

若し、これを君等が理由にするならば、

さうだ、俺等にも考へがある。

一寸の蟲に五分の魂だ！

殊にだ！

都會の文化獨占は、

果して必然であらうか。

不可動の事實であらうか。

君等も彼等を馬鹿にする事を考へる前に

すこしはこんな事を考へたらどうだ。

光は動き、時は動く。

百姓だつて動かうぢやないか。

無論、この詩から、纏まつた何物をも得られないことは事實である。しかし、その代りに私は或る物を感じさせられる。若しこの詩の基調をなした情念を、體系づけ、理論づけたならば、或は私がかれ迄指摘した農村青年の都會反感の色調をば、すつと左傾したものであるであらうと思ふ。いづれにしても、落つる桐の一葉に、天下の秋が知り得られるならば、この一篇の詩からも、都會に對する反感の進み行き得べき方向が看取され得ると云はねばなるまい。

誰が、今日の農村青年の都會反感が、思想的背景を有つやうになり、對象を都會の本質の上に進めようとするやうな展開を見る日が來ぬと斷言出來よう。私は農村青年の都會反感が、今日最も大切なポイントに立つて居ることを疑はない。

110

既にこれまでに、「反感思想」を討尋した際にも、「都會反感」を考察した折にも、農村青年が農村

今日の情態に對して如何様の心もちをもつて居るかといふ問題には觸れたのであつたが、更にこれから私は農村の各方面に涉つて、それについての青年たちの心理を検したいと思ふ。

農村青年の心理といつても、無論、青年全部の心理でないことは、申す迄もない。これまでも、これからも、私の取扱ひ、また取扱ふであらう幾多の材料は、悉く農村青年から得たものであることは無論であるが、しかしそれは寧ろ少數派と目すべき青年たちの意見であり、主張であり、感想である。けれども、その少數派こそは、今日の農村に於て自覺の第一線に立つて居る新人であつて青年間に於ける輿論なり、新運動なりは、多く此の人達によつて喚起もされ、進展もして居るのである。そこで、將來に於ける農村の體様を推し測らうとする爲には、これ等の人々の言論こそ最も貴い資料でなければならぬ。

かくの如き意味に於て、農村青年の少數をのみ視野に入れて居るといふ譏りあるに拘らず、私は尙ほも筆をつゞけて行かうとするのである。

111

私は、例によつて、讀者と共に、さまざまなる青年の叫びをききつゝ、私の考察をすゝめるであ

ちろ。

泥臭い田舎、土と汗とにまみれた黒い農夫、それ等は吾々に何の田園の厭悪も反農の、心も起しません、むしろ尊い大自然に育まれながら、神秘的空気の中に労働することは、吾々に與へられた使命と喜んで服しますけれども、黄金によつて動き、黄金によつて尊び、人生これ黄金の争奪なりとの如き田舎の現在の先輩の人々の間で明け暮れ、その臭になやまされることこそ、堪へ得られぬ不快とする所であります。その人々には、文化生活、現在の青年の思想、よりよく吾々が生くべき爲の修養の機關施設等に關して些の理解もなく、たゞ拜金にのみ没頭するその田舎の空氣こそ實にあきたらなく存せられます決して反農ではありません、田舎、腐敗した空氣そのものを呪詛し、その大轉換、大改新を切望するのです。

金といふものがすべてに對して決定的威力をもつて居ると信じてそれを得ることの爲めに、あらゆるものを犠牲にし、あらゆる手段をめぐらすことは、獨り田舎のみではなからうが、農村に於ては、特にそれが目立ち、且つ何人にも痛感される。殊に、農村は都會とちがつて、どの家も、どの家も、短かきも數代長きは數十代、その土地に定住して居るのであるから、隣保相知るは勿論、一村の人、悉く相知相識の間柄であつて、隣家の姓氏さへはつきりしないといふ都會とは、全く別個

の世界である。従つて、その輯睦の程度も、うらやましい程濃いものがあつたのである。その農村が、日一日、金のために惑亂して來て、人と人とは心の中で互に刃をとぐやうになり、親しみにあふれた瞳が、見るからに險しくなつて行くのである。さうして、悪徳、不信、奸計、詐謀、あらゆることが行はれるのである。志操が純潔であつて、如何に生くることが生の第一義であらうかに思ひをひそめる青年たちが「かやうなる現象をその儘に肯定し得ないことは當然である」。

私は、こゝに掲げたこの短かき手紙の一節によつて農村青年の或る部分に、金錢を第一とする農村今日の情態に對して、甚しき不満を抱いて居るものがあることを知り得た。而して、この情態は如何にして救はるべきであらうか。それに關して青年たちは、如何なる成案を抱いて居るであらうか、それらはすべて後段に譲るであらう。

一一一

前以て斷つて置くが、今日尙ほ農村は、決して疲弊して居ないと説く人達が居るが、それは所謂机上の空論者の言である。皮相なる表面的觀察である。私は小學の門を出で、以來、十餘年一日の如く郷土に鋤鋤とる労働者であるから、斯くの如き皮相論者の言に賛することの出來

ない現實の悲哀に徹して居る。農村は正しく疲弊しつゝある。農民道徳は日に日に衰退しつゝある。人道は獸道に墮ちつゝある。かるが故に其の救済乃至展開を冀望するのである。卑近な引例をすれば幾らでもある。例へば、農村に於ける人望家といふものを解剖して見る。昔は學德兼備の人をこそ所謂人望家として尊敬して居たけれども、現今は、馬鹿でもいゝ只無闇矢鱈に農民に酒を振舞ふて、人心を收攬するものが農村での最上の地位と相場をきめられて居る。村會議員の候補でも、如何に政治的手腕ありとするも、如何に心の潔白なりとするも、それだけでは、必ず落伍者の地位に立たねばならぬ。地獄の沙汰も金次第とは、誰の作つた金言かは知らねど、現今の農村はあまりに金と酒とに中毒されて居る。換言すれば、心の陋劣なる者程農村に於ける人望家であり、心の潔白なる者程、農村に於ける落伍者である、故に昨日の模範村も、今日は犯罪の村と化する。何で怪しむに足らるのである。

かくして小智慧もつ者はその小智慧を悪用して榮え、眞の仁人はその智を善用せんとして衰へる。虚偽、誹詐、詭言、到る所に行はれ、悪人強者となり善人は弱者として亡ぶ、痛ましい哉農村の現状、是をしも農村道徳の向上など、呼ぶ勇氣があるか。農村は精神的にも行き詰りである。是をしも匡さずんば、終に亡國あるのみである。肝膽そゞろに寒さを覺ゆるではない

か。

この一文は、私の手許によせられた原稿の一節であつて、今日の農村に於ける一弊習を指摘したものである。前節に摘記したM君の手紙と併せ讀んだならば農村の老壯が、如何に金を求め、又如何に金を悪用しその爲めに如何に農村道徳が覆されて居るかを覗ひ知り得るであらう。同時に、それに對して一部の青年が如何に強い反感を抱いて居るかを、推知し得るであらう、私は農村に於ける選舉違反の事實が、意外に多きを怪んだのであつたが、これ等青年の所説にきけば、それは當然すぎる當然でなければならぬ。青年たちはかくの如くくづれ行く農村道徳の振作について、どのような積極的な意見をもつて居るであらうか。私はこれ等の考究をすべて後に譲つて、取り急ぎ今少しく農村現状に關する農村青年の聲をきくであらう。

二三

前に掲げた手紙及び感想と殆んど同時に受取つたものゝ中に、次のやうなものもあつた。

徳川時代の百姓一揆、は現實の苦痛に困つて起つたものださうですが、大部分の農村民が農村をにげ出すのは、食にこまるからです。成る程、新聞や雑誌をよみ、考や頭の進んだ人達が

農村をすてるのは他に最も複雑な、深刻な理由がありませう、しかし、多くの人が漸次に都會に流れ出しますのは、何といつても生活苦からです。

まあ農村の中以下の百姓の困つてゐることは、お話になりません。食ふものだつて御覽なさい。監獄の囚人の食物よりまづいといふぢやありませんか。着物だつて、洗濯して、つゞり合せて、一枚の着物を何年きるかわかりません。さうしても、苦しいのです。ソレに勤儉ぢや貯蓄ぢやと説かれるのは、氣がしません。民力涵養とか、報徳會とか、よく村で集りがありますが、聴衆として前にするのは、私共貧乏百姓で、暮しむきのよい地主階級は、別席にちやんと参考の爲めにきかうといふ風をして控へる。さうすると講演者は、お前等が貧乏するのは當然だ、もつとはたらけとか。出来るだけ貯金をせよとか、大聲で話す。滑稽でもあれば、腹も立ちます。あんなことを企てたり、あんな事をきかせたりするよりは、村の有力者は、出来るだけ村全體の生活の苦しみを救ふことに考へをめぐらしてほしいと思ふ。

尤も村林の造成などばかり考へられては困る。村林の造成は村税の全廢を理想とすといふことですが、村税が廢止されて一番恩恵を蒙るのは、大金持ちだ、其の日暮しの百姓には何もありません。

第一、寺を何とかしてほしい、私も宗教の感化の偉大なことは認めます。しかし今日の農村にある多くのお寺の住職の言動は、決して農民に何等のよい感化をも與へては居りません。すこしの敬虔な情緒も、すこしの正しい信仰も、農民は、住職たちから受取つては居りません。

たゞ彼等は、さらにだも貧しい私達貧乏百姓から少がらぬ金をとつて居るだけです。私の村には五つ寺があります。村の總戸數の三百二十軒に割あてると、六十軒で一ヶ寺を受持つ譯です。さうして、確かには知りませんが、一ヶ年一ヶ寺千圓は、取り立て居ると思ひますから、總計五千圓です。五千圓他の事業に使つたとして御覽なさい。

私は、貯蓄の餘裕もない貧乏百姓に貯金などをすすめぬより、こんな方面からずん／＼改善の手をつけて行くべきだと思ひます。

私は、一枚半紙に走り書きしたこの手紙を讀んで、農村青年が、如何に本氣になつて今の農村をずみよき農村にするための考慮をめぐらして居るかに驚いた。

如何にも、農村に於ける數多き今日の寺院が、これからも現状のまゝを持續して行くことが出来るであらうか。それは私も常に一つの考課として居つたのであるが、今こゝにあらはれる青年の聲

をきいて、將來の體様をほゞ想像することが出来るやうに思つた。しかし、これに就ても、青年は寺院處理の方案をまでも、考究して居るのであらうか。これは私の最も興味をかけて居る問題である。

二四

金に窮しながら「時」に對して冷淡である。一寸出合つても、一時間や二時間は世間話にツイやす。會合に時間を厲行せぬのは無理もない。

働く時と休む時との區別がない。隨つて仕事が捗どらぬ。天候に左右されたり。繁閑の差が甚しかつたりする關係もあるが、一體三反や五反の田畠に何人かゝるのだらう。八時間労働といへば、百姓は馬鹿に短かい様に思ふが、工場等のやうに、専念に働いたら八時間で十分だ。何も星を戴いて出で、月を踏んで歸らんでもいい。

娘を一人とつがせるもなか／＼でない。その爲め數人の女兒があれば、家産を傾ける始末、何百圓の衣装を簞笥に收め、牛は飢になき馬は千松を嘆じてゐる。

正月といへば、何日も遊んで飲む。生れたといつては飲む。死だといつては飲む。婚禮と

いつては飲む。四日も五日も、しかも大勢集つて飲む。飲むといへば徹底的に飲む。倒れて後止むのである。その癖、大に活動すべき農繁期には、ろくなものは食はない。

少し金が出来れば、倉を建てる。庭に樹を植えるが、農具の買入れには錢を惜む。

亭主は酒を呑むに忙しく、妻は兒を生むに忙しく、息子は無駄づかいせんとするに忙しい。その半分でも日々の臺所にまはしたら。

數へ来れば、僕を更ふるも及ばない。

この文の筆者君は、この一篇を私に送つて間もなく、東京に出たと見えて、四月の下旬私は、印絆纏姿の同君の訪問に接したのであつた。「少しは眞面目に生きようとすれば、今日の農村は餘りにも弊賣が多い。しかも、頑迷で且つ改善の念に乏しい農民は、少しく改善運動を起さうとすれば、様々の口實の下に、手強い壓迫を試みようとする。私は、農村に生きんとして、終に生を得ない」同君はかく語つて暗然とした。農村に生きんとして生き得ないといふ同君の言葉は、にはかに肯定し得ないとしても、同君の指摘した農村今日の弊賣は、どうしても否定することは出来ない。

二五

金に狂喜する農村民の態度、日に衰退し行く農民道德の現状、農村寺院と農村との關係、當然打破さるべき墮俗惡習、それ等に對する農村青年の意圖のいくらかは、前號に引用した手紙や、文章によつて知り得られるのであるが、農村全體に對して、彼等はどういふ思念を抱いて居るであらうか。私はこの爲に、讀者と共に次の詩を讀みたいと思ふ。

世の中のあらゆる醜を、無盡藏の大地にかき納めて
平然と大空を眺めて居るのが田園だ

みにくい世の中に生きて、臭い土にもぐり込んで
平氣で居る愚物が百姓である

田園醜！

若しこの言葉を耳にしたならば
都會人も百姓共も共に驚異せざるを得ぬであらう
私はこゝに痛快に叫ぶぞ、——田園醜！

古より田園を醜しと云つた人を私は未だ知らぬが
私はずねに思ひ、田園の醜の多きことを！
清潔な精神に美麗な化粧を施して人間生活を幸福なものにしようとならば
それは百姓では出来ぬことだ

人間が「自然に歸れ」ない以上
人間が「四つ這になつて歩かぬ」以上
裸形の人間が幸福でない以上
田園生活はあくまでみにくい

春の花、小川のせらぎ、咲きみちた田の紫雲英、さては褐色に枯れ行く裾野の草
これ等を美しいといふ者があるとすれば
それは百姓の生活をしないからだ

さかんに田園美を書き立て、「趣味に生きて實利に生きぬ」と云つた「みゝすのたはこと」の著者の言ひ草だ

見給へ！

あの肥壺から汲み出す人糞を！。そしてその鼻をつく悪臭は何うだ

私は詩人に告げよう

「貴下はそれを美しい心で歌ひたまへ。しかし貴下は美しい心で人糞を汲み出す勇氣がありませんか」

身に襤褸をまとふよりも

伊太利ネルの柔かさと温かさと、羽二重の滑らかさと光澤とに包まれたいのが人情の自然だ

澤庵よりも奈良漬の方がおいしい

心のみ美しく荒れはてた手で百姓する處女よりも

美しい心で美しく飾つた處女がどれ程幸福だらう

田園より出た偉人はまことに多い

併しながら彼等が終生の事業は土まみれの百姓でなかつた

田園を美といふ勿れ

美しさはたゞ愛の心に湧くのだ

心から田園を愛しようとする者は

田園を美しと言ふ勿れ

醜い田園を愛せんとする心が美しいのだ。

此の詩の作者は、瀬戸内海の島の一つに生れて、小學校卒業以來土まみれになつて畑をほつて居る坂谷二歩といふ青年である。讀者は、眞實を語る此の青年の聲に、強く心を打たれたであらうと思ふ。田園は醜い。その醜い田園を愛しようとするその心根！それは實に涙ぐましい程のなつかしさを感じられるではないか。私は、讀者と共に、「田園醜」の農村現狀觀に立つて、そこに眞劍な努力を拂はうといふ聲が、青年の一部からつゝまじやかに呼び出されたことを特記したいと思ふ。

二六

私は、秩序もなく、農村の諸種の方面に對する青年の聲をきいて來たのであるが、更に農民の選舉に對する態度について農村青年たちがどういふ考へ方をしてゐるか、それを少しく討究して見ようと思ふ。

大正十一年の五月に開かれた全國各府縣社會主義會議の狀況をきくと、青年の政治思想について多少の論議があつたやうであるが、農村の青年で、既に政治の實際運動にたづさはつたものは、今日に於て、必しも珍しくないのである。特に青年團員にも少くないと思ふ。が私は、今、是を是非しようといふのではない。無論またこれに關して農村青年が、どういふ考へをもつて居るかを考察しようといふのではない。農村の青年たち、特に二十二三から三十前後にかけて少し見識があり少し活動性がある農村青年たちが選舉運動に關係したり、今日の政黨が必至になつてつとめてゐる黨勢擴張にたづさはつたりすることは、もう是非の議論を超越した事實である。従つて、今に於て、かくの如き傾向の可否に對する青年たちの考へを考察することは、甚しき手後れであるのであつてそれよりはさうした一種の政治運動に關係することによつて、如何なる印象を受けたか、及び彼等

の先輩のさうした運動に對して取つてゐる態度をどう云ふ風に思ふか、それ等を聽くことが、遙かに緊切なことであると信ずる。

一昨年、私は、次のやうな意味のことを、當時、私の關係して居つた新聞に書いたことがある。

——我が國民は、近來殊に著しく新聞によつて傳へられる政治界、實業界、若くは官界の不正事件に激昂してゐるが、若し世間に傳へらるゝ事柄が事實であるならば、吾人も、亦、それに對して憤懣を感じる點に於て、決して人後に落つるものでない、しかしながら、斯くの如き事態が生れたらば、畢竟、一種の英雄主義、商業主義の横行に對して寛容であつたばかりでなく、むしろこれを歡迎し、助長した我が國民の心的怠慢の結果であるのではなからうか。しかし乍ら、此の種の弊害は其の國民の進展可能性にして甚だ旺盛である場合に於ては却つて局面一新の機會ともなれば原動力ともなり得るのである。そこで見やうによつては、世間の人が近頃口癖のやうに言つてゐる大正維新の騰立てがぼつ／＼出來て來たといへば言へるであらうと思ふ。さうすると問題は進んで、誰がこの弊害をして局面一新の機會たらしめ、原動力たらしめるかといふことになるが、この問題の答案は甚だ簡單である。即ち青年殊に二十五歳以上の青年が、その爲に選ばれるべき人であると云へば足りる。此の意味から、吾人は多くの青年に對して、其の奮起を促さざるを得ない。近來、國家社

會の中心圈内には此老年の言動に失望したといふ人たちが、「世界は未だ米英の自由に料理し得るところでない。亞歐兩大陸に跨つて、今後尙ほ混沌たるものが多い。眞に我が民族の活躍すべき時機は、今後に在る階級と地位とを恃む徒の如きは、もはや語るに足らない」といふやうなことを言つて青年に呼びかけてゐるのも、畢竟、第二維新の新天地を打開する爲めには、青年以外に、何ものゝ力もないからのことである。吾人は、青年たちが、この世をばよりすみよき社會にする爲めにその羽翼をのばさんことを望んで止まぬものである。とりわけ、農村に於て、青年たちがさし當り諸種の選舉運動の爲めに、その純潔なる志操を充分に示現せんことを望んで止まぬものである。これは、重に青年團を了へて各町村の中堅的地位にすゝみつゝある農村青年に呼びかけたものであるが、私は直に次のやうな意味の手紙を受取つた。

——青年指導の地位にある人や、青年の教育者であると自稱する人たちが、私どもの政治的生活について何事も語らず、むしろさういふ方面に關係することを好まぬやうな顔付をしてゐる時に、進んで政治に關係して、純潔なる志操を示現せよといはれた先生の御議論は、少なからず私共をよろこばせた。しかし、事實を申せば、私共は既にもう政治に關係して了つてゐるのである。先生は定めし御記憶があらうと思ふ、此の五月の總選舉の時、〇〇會の長老で、從來、當落の心配などをす

るやうな必要の無かつた〇〇〇〇が、一時、甚だしき趨勢に陥り、あわてふためいて東京から飛んでかへつて來たことを、さうして、政見など發表しなくてもいゝ、知りたければきゝに來いとそれ迄傲語してをつたにも拘らず、それこそ文字通りの草鞋ばきで、口別に叩頭して歩いたことを。あれはみんなあの節の青年たちが躍起して、〇〇〇〇に對立した〇〇候補をたすけたからであつた。〇〇郡〇〇候補が一時非常に苦戦に陥つたのも、やはり同じであつた。そこで、先生の御議論は、正直に言へば、六日の菖蒲である。——私は、この手紙をよんで、そとろに私の迂濶を恥ぢた。それから注意して詮鑿して見ると、大正九年の總選舉以來、府縣會、郡會乃至は村會の議員選舉に、青年の力が大分動いて居る。さうして、その力の意外にも強靱で、また其の効果も著しいことを知つて、それを利用しやうとつとむるものさへ現はれて居る。斯くの如き實情であるから、今、事新しく、農村青年たちの政治的運動の實際にたづさはることの可否に關して、彼是と論議立てることは、むしろ不用に屬するかと考へられる。

無論、一口に選舉運動に關係するといつても、それには色々な動機があるのであつて、一概に、青年にその純潔な志操からとは言ひ得ない。誰もが氣付くやうに、農村青年には、地主級に屬するもの、その地主と特殊關係を有する階級に屬するもの、及び此のいづれにも屬せぬもの、この三つ

の種類がある。而して第一、第二の種別に屬する青年が選舉運動に關係する場合は多く其の父兄の使喚にかゝるもので、全く他動的である。従つて無自覺にして時代に逆行する所謂運動屋に化して何程も異なる點は無い。かの純粹にその理想と信念とから出發して、一指を選舉運動の刷新に染めやうとするのは、實に第三の種別に屬する青年であつて、私の考察の對象とするのは是である。

今春、當地にも縣會議員選舉が行はれました。無理矢理に引張り出された友達もありましたが、私は進んでこの運動に加はりました。といつて私は、私の理想に近い候補者を擁立しやうとした譯ではありません。(今日のやうな青年の情態では、未だ青年自身の力で、一人の候補を立て、青年の理想の爲めに、舊人たちと争ふといふところまでは行きませんが、御承知の通り)立候補を宣した四人のうち、一番、時代を理解する力があり、一番私共の理想を託するに足ると思ふ人の爲に、投票を集めやうとしたのです。二週間ほど、晝夜奔走でやりましたが、私は如何に現在の人々が邪道に踏み入り、悪魔の心に化し去つてゐるかをまのあたり見せつけられました。あゝ縣會議員選舉、その表面は如何に美しく、裏面の如何に穢汚に満ちて居ることが、公然と〇〇、〇〇が行はれ、〇〇の〇〇が〇〇に嚴、〇〇に寛であつたが、餘りのことに私は生き甲斐なき現在社會であるとさへ考へました。

特に、私と同じく他の候補の爲にはたらいてゐる郡の有志や先輩が、他の候補をたすけてゐる人たちと同様な心もちと、同様な手段で當選を争ふたことは、本當に悲しく思ひました。その爲めに、候補者其の人の人格を低めるのは勿論、私自身の理想や信念さへも汚れるやうに思ひました。私は、そこで他の候補をたすける人々と、戦ふと同時に、他の候補をたすける同志の人とも戦はねばならぬのでした。私と志を同じうする友だちの十名近くありましたけれども甚だしく微力を感じました。何度、途中でよさうと思つたか知れません。

しかし、この悪魔の心の人にみちた社會に、清く正しく、神の心に近い心を抱いて生きて行くことが何だか勇ましいやうな、男々しいやうな強味を感じ、かうした自分の周圍を青年の純潔な心で聖めて行く事が、はたさねばならぬ私の責務のやうにも思ひ、しまひ迄やり通しました。

これは三ヶ月程前に受取つた手紙であるが、かうした選舉に關する一種の苦悶を述べた手紙は一二に止まらなう。

私を利用するといふことは、よく知つて居りました。一年前、お宅に上つた時も、たしかお話ししたと思ひますが、私はこれまで議員といふ名を得るまでに、如何に多くの人が悪を——悪

といへぬまでも人間としては好ましくないことをやるかを堪へられぬ悲しいことに思つてゐましたし、うまく利用されてやつて、すこしでも選挙についての私の地方のやり方を刷新するために働いて見やうと思ひました。

ところが驚きました。私の主張した政見発表演説會開催の議などは、青二才の空論として、参謀たちに一言のもとにはねつけられました。さうして申します、選挙といふものは、理屈や議論で行くものではない。懸引、策略の限りをつくして、選挙民をこつちにつけさへすればいいのだと。候補者が、また参謀まかせにして、全くこんな氣で居るから情ない事です。私は「立憲治下の選挙運動が、理屈や議論で行かぬとは、どうしたことだ。理屈や議論で行くやうにしてこそ、始めて憲政の進歩はあるんだ。あなた方の考へ方は間違つて居るといつてやりたかつたが、さういつたととても此の場合反省を促し得るやうには思はれぬから、黙つて置きました。さうして、出来るだけ詳細に、選挙といふものゝ情實を知つて置かうと決心しました。参謀連は、私が自分たちの言ふことを柔順に聽いた位に思つたゞらうと思ひます。

それから、私はいろんな用を言ひつかりました。ところで其のいろんな用が、結局選挙民の〇〇の爲めの〇〇の使ひだから驚くぢやありませんか。私は其の都度ハイ／＼と云ふて、素直

にその使命をはたしましたが、選挙民がまたその〇〇に對して、當然だといふやな顔をするのは一層驚いて了ひました。結局、我が國では、選挙といふことの精神はちつとものみこめず。

たゞ形だけが行はれてるのだと思ひます。これぢや、とても駄目です。(中略)

こんな譯で青年團では、思ひ切つて選挙に對する態度、精神を養成しなければならぬと思ひ幸ひ副團長ではあるし、いろ／＼と幹部や、先輩の一二の人達に相談をすゝめて居ます。今少し具體案が出来たら、御手許にさし上げます。これに關しては、充分立入つて御指導下さい。

讀者は、これ等の手紙から、醜惡なる選挙運動の渦中にあつて、その至純な理想と信念とを生かさんが爲になやみ悲しんで居る青年の姿を髣髴し得るであらう。さうして、又、前節に引用した廣島K氏の書簡と併せ考へて、自覺した農村青年は、如何なるところに人物評價の標準を置き、如何なる人を、如何なる方法によつて、議員たらしめやうとして居るかを推測し得るであらう。

二七

最後に、その青年たちは、如何なる読みものを讀んで居るかといふこと。及びそれらの青年には如何なる読みものを與ふべきかといふことを申し述べたい。

目今、青年團員が如何なる読みものをよるこんで居るであらうか、その適確なところを知ること
 は甚だ困難であるが、まづ、雑誌類については、文部省社會教育課の調査にかゝるものが唯一の参
 考資料である。それによると、それが東京で發行されるものであらうと、地方で刊行されるもので
 あらうとに論なく、今日發行されて居る雑誌は、大概讀まれて居る。その一例として某縣のものを
 あげて見ると、

中央公論、實業の日本、向上、改造、愛國青年、太陽、現代、寸鐵、帝國青年、乃木式、文章俱樂部、新
 青年、奮闘、農家の友、青年タイムス、農業世界、講談俱樂部、講談雜誌、雄辯、偉大、日本少年、新潮、中
 學世界、新國民、解放、文藝俱樂部、面白俱樂部、大成、中學生、青年及青年團、受驗と學生、ホケツト、關
 西農報、市町村雜誌、日本及日本人、武俠世界、人と人、表現、早稻田講義錄、共存、大國民、報德、農業
 時報、少年世界、斯民、國民講談、人情俱樂部、野球界、文化生活、親友、譚海、少年俱樂部、大正公論、日
 本青年、革新、たのしみ俱樂部、素人醫學界、立憲青年、實業之世界、新小説、青年公論、中學講義錄、社
 會と教化、文武、實業、早稻田文學、赤い鳥、少年、蠶糸の光、産業組合、ダイヤモンド、商店雜誌、娛樂
 世界、聖書研究、活動雜誌、皇道、白鳩、日本農友、成功の友、一二年の中學生、短歌雜誌、徑の實、我等
 若人、時報、日蓮、覺醒、向上の友、科學知識、世界少年、新趣味、青年界、教育論叢、社會主義研究、鐵
 道青年、受驗界、新報知、大觀、英學生の友、養鶏の日本、病蟲害雜誌、理科の少年、野球少年、萬機公論
 中學講義錄、日本體育、法制、ニコ、性、うきよ、小説俱樂部、新八道、商店界、飛行少年、通信協會
 雜誌、國論、蠶業雜誌、新農談、人格養成、蠶業講義錄、自動車講義錄、怪談俱樂部、海國少年、創造秀
 才文壇、農業雜誌、都會及農村、習字の友、ABC研究、農事試驗場時報、タイムス、中央美術、海紅、疾

の影、行政論壇、唯一、中國冠句、實業の青年、園藝時報、果物月報、工業雜誌、建築世界、スポーツマン、教
 育研究、社會問題研究、青年會、鐵の友、法論、青年筆筒、男、新文藝、紡織雜誌、寫眞の友、スピード、つ
 ば、武の世界、學の友、高等英字練習、性と戀愛、文化、教育畫報、小説俱樂部、活動くらぶ、俳句の友、健
 康、早稻田雜誌、亞細亞公論、模範立身成功講義錄、復習と受驗、美談、商業講義錄、歡喜、漁業の日本、精
 力、工場會計、國本、明星、日本詩人、文化雜誌、カメラ、不律、新演藝、青年と修養、情歌研究雜誌、國
 民中學講義錄、實業講習錄、中等英語、英語研究、大正文庫、青年機關新聞、軍事豫習講義、剛健主義、新
 修養、武士道、文學雜誌、青年文壇、文檢世界、日本法政新誌、斯華會雜誌、寫眞通信、時事問題研究、通
 俗誌、週刊朝日、士友、文官試驗講義錄、金光教青年雜誌、三寶、傳道、國乃華、青年雜誌、忠孝の日本
 勞働雜誌、新時代の青年團、養兔新報、大日本農會報、政教公論、文章世界、教育新聞、少年タイムス、土
 地と自由、經濟の日本、東方時論、土壤肥料新報、會計、青年教育講義錄、農業教育、料理講義錄、新文學
 世界公論、向上の友、傳道、護法、農政研究、冒險世界、蠶業新報、慈悲之園、黃薇之友、改良之青年、體
 力改善、教育講談、コンモンセンス、新天地、利殖の友、ホトトギス、演藝畫報、活動俱樂部、ウキヨ、文
 武、日新、水鏡、アララギ、體育研究、明日之教育、正則中學講義錄、内觀、獵友、海國公論、外交時報、皇
 國、かうべ、日本教育、書道角力、書道研究、道の友、青年新聞、青年俱樂部、家庭手帳、小文藝、中堅青
 年講義錄、日本青年團報、商業簿記、法曹記事、博愛、愛の友、わが力、地方行政、帝國蠶業界、家禽界
 實踐、白樺、白孔雀、新友、日本農業

等である。これは特別に數の多いのを選つたのではない。各府縣、概ねこれ位の數は擧げてゐる。
 いづれにしても、其の雜多なのに驚かざるを得ないではないか。

さて此のうち最も多く讀まれてゐるものを見ると、それは實業の日本、斯民、青年、愛國青年、

向上、乃木式、農業世界である。これも各縣ほど同様である。これによつて、我が國の青年團員が如何なる内容の雑誌を多く読んで居るか推想し得られる。もつともこの事を青年團員某君に話すと、「實際は、面白俱樂部、人情俱樂部、講談雑誌、講談世界、それから主婦の友といったやうなものを、多く喜んで読んで居るのだけれども、それをその通り正直に報告することは、すこしく體裁がよろしくないやうに思つて、それ等は極く少數のものに讀まれて居ることにして報告した」と言つて笑つたが、若しこのやうなる事實が、かなり多くの青年團にあつたとすれば、この調査の結果は、甚だ確實さの度合を薄くするわけであるが、今しばらくこの調査の結果を信用すれば、我が國の青年團員は、雑誌に於ては、大部分修養本位の——中には羊頭をかゝけて狗肉をうる如何はしいものや、かなり低調、卑俗なものが無いではないが——ものをよろこんでゐるといふことが出来る。

しかし、大多數がかくの如く修養本位の雑誌を喜んで居るといふことは、むしろ現在若くは過去の事實と目すべきであつて、この後もやはりこのやうな情勢を支持して行くであらうかといふことは、全く未知である。すなはち、現状を以て將來の體様を類推し、將來も亦今日の如かるべしと安心することは許されない。

昨今、青年、特に農村青年の思想生活を見ると、數年前に比して、いちじるしき躍進を見せて居る。今日の農村は生活苦のどん底に落ちかゝつて、苦慘の色を呈しては居るが、しかし、草の中、土の上、革新の氣はかなり動いて居ることを認めざるを得ない。少數の青年は農村文化にまでの自覺の火をその胸中にもやしつゝある。特に注意すべきは、彼等の團體的行動の指導者なり、與論の發議者なりが、多くの場合に於て時代の脈搏をさながらに感じつゝある少數の青年であるといふ事實である。此の少數者が、自覺の第一線に立つて、眠れるものを揺りさまし、徐歩するものを鞭撻し、農村青年の全群を動かさうとしつゝあるのである。此等の少數者は、主として、その思想の基準並に成長を雑誌や圖書に依つて居る。此の意味に於て、私は、向上、新民、乃木式等の雑誌が最も多く購讀されるといふ事實よりも、改造、解放、熱風、種播く人、前衛、土地と自由、社會主義研究等の桃色、赤色の若しくは大分左傾したところの雑誌を購讀する青年團員が數は少數なりと雖も、全國各府縣に見出し得ることに深き注意を向けたい。私は昨年滿一ヶ年の間、某々二縣の青年を對象とし、さゝやかではあつたが、青年雑誌を編輯し、刊行したのであつたが、それに書を寄せて來る百餘の青年が、悉く、現代思想の最前線の或る部分に觸れてゐることを發見して、少からず驚いたのであつた。

二八

圖書に關しては、全國に涉つて調査したやうなものがあることを、私は寡聞にして未だ知らない。従つて如何なる圖書をよるこんで讀みつゝあるかは、一層不正確である。尤も、各町村青年團には、文庫若くは圖書館がある。これに購入されてある圖書は、まづその團員の多く讀むべき筈のものであると考へられるが、その書目は、私の知る範圍では、概して優良村巡り、優良青年團、一日一善、青年修養訓、二宮先生傳といったやうな種類のものである。しかしてこれ等の書目の決定が、青年以外の人達、すなはち指導者の立場にある人たちによつて決定されたものであることは、想像するに難くない。従つてこれ等の書物に魂をふるはせて、讀み耽るものが、多くあるかは疑問である。

私は、大正五年から、四五年間地方巡りをして、出來得るだけ機會を求めては、青年に知己をつくり、彼等の胸奥の聲を聞いたのであつたが、その關係で、昨今といへども絶えず諸方の青年から手紙を受けとる。

(前略) お言葉にあまへるやうですが、五圓爲替を封入いたしますから、お序の折に左記の書物を買ひ求めて送つていただけませんか、お願いいたします。私の町青年團の文庫にある書物は、何一つとして、吾々青年の高鳴る胸に觸れるものはありません、優良村のどうやらとか、青年修養の何とやらとか、皆私どもにとつては、どうしても好いものばかりです。

それで、私共三四人が讀書會を計畫して、少しばかりの金を積み立て、ほんとうに讀みたくてたまらぬ書物を買ふことにいたしましたのであります。古本があつたならばなほ結構です。一冊でも餘計買へますから。(後略)

これがその手紙の一つであるが、之れに類した手紙を受け取つたことは、東京に来て今年までまる二年の間に、決して一再のことではない。これに依つても、ほんとうに自分たちの書物を読みたい、自分たちの書物を読むことに依つて、自己の眞實の成長を期したいといふ青年が、青年團文庫や、圖書館に對して、どういふ考へを有つて居るか、よくわかると思ふ。丁度前に述べた雑誌の場合と同じく、青年團の名に於て購入される圖書は、すべて修養本位のものであるけれども、しかし、青年のよるこんで讀み、若くは多く讀んで居るものが、これであるかといふことは出來ない。それよりも、よしや其の數は少いたしても、青年團員たちは、哲學、宗教、其の他思想問題に關するもの及び、現代流行作家の創作をよるこんで讀んで居ることは、争ふぶからざる事實であると

信する。特に、都會の知識階級に於て、下火になつたところの労働運動や、社會運動に關する書物が、ポツ／＼青年團員たちに讀まれて居るといふことは、青年團員の意向をうかゞひ得ると同時に農村問題若くは労働問題が、將來如何やうに、展開し得べきかの類推を、容易ならしめる。私は、倉田百三君の「愛と認識との出發」を數回讀み返して、書中に數多くはさまれてゐる英語や、獨逸語を丹念に抽き書きして、御忙がしからうが、ひま／＼にその語の日本譯をかいて呉れといつてよこした青年團員——それは、補習學校の生徒であつた——を知る、波多野精一博士の「西洋宗教思想史」を讀んではつきりわからないけれども、自分は何だか勇氣付けられたやうな氣がする、この夏御目にかゝつた時に、不審の點を解いて戴かうと思つてたのしみにしてゐるといふ手紙をよこした青年團員を知る。西田天香の「懺悔の生活」は、あまりに甘すぎる、あれよりは有島武郎の「惜みなく愛は奪ふ」を、書架には飾りたいと、私に話した青年團員を知る。「死線を越えて」や「出家と其の弟子」を讀んだ青年團員は、珍らしいことでは無い。無論、前にも言つた通り、これ等の青年は數に於て少數であり、又、其の少數者も、此れ等の書物の内容を、悉く理解し得たものではあるまい。理解し得たところではなく、極く小部分しか味解し得なかつたのであらうと思ふ。了解し難いといふこと、楽しんで讀むといふこととは、結びつきにくいやうに考へられるけれども、事實はさ

うでない。わからないけれども貪り讀み、楽しみ讀む、そこが青年であり、青年の特徴であるのである。特に、思想的に目覺めて、農村文化建設の中心人物たらんことを志す青年たちの特徴である。私は、この事實及び傾向の上に、大方の深き注意が拂はねばならぬと信する。

しかし、此等の群と、青年團文庫若くは圖書館をよるこぶ群との外に、今一つの群があることを知らねばならぬ。その群のよろこびよみ、若くは貪り讀む圖書は、これ等とは甚だしく相違して居る。私が數年前、地方新聞に關係して居つた時、廣告料が割合に高いものは通信販賣のものであり又、其の通信販賣の廣告は、成功案内、苦學案内の類の外に、極めて低級卑猥な淫書であることを知つて、廣告取扱業者に、次のやうにたづねたことがある。「かやうな廣告を、かやうな高い料金を出して、廣告して、果して商賣になるのであらうか。」すると廣告取扱業者は、「それはなるの段ではない。彼等通信販賣業者は、極く乏しき資本でやつて居るのであるから、廣告料金は、彼等にとつての大問題である。そこで、かれ等は、なるだけ販賣部數の多い新聞や雑誌を研究の上に研究を重ねて、それに廣告をする。そんな雑誌や、新聞に限つて、廣告料金は割高であるが、しかも、かれ等は、却つてそれをゑらぶ。そして、充分の利益をあげて居る。地方の若いものからの註文は、誠にあつたゞしいものだ」といつて、私の迂濶を笑つた。成る程、さう云はれて見るとさうであら

う。近頃は、青年雑誌にまで、そんな廣告を見受けるやうになつた。現に私の机上にある三月號の青年雑誌の一二冊をとつて見ても、「男女性慾及性交の新研究」「圖解處女及び妻の肉的研究」——しかも其の内容の廣告には、性交の方法、回数、場所、結婚初夜の注意、處女と非處女を簡易に見分ける法、處女膜の破裂等の文句がある——「男女戀愛の秘密」「愛する人へ秘密の手紙」「男女相愛の秘訣」「男女繪草紙」「男女戀の場面」「男女生殖器圖解全書」「子の出来る法出來ぬ法」といふやうな、書物の廣告がある。青年以外には、殆ど購讀するものはあるまじきこの雑誌であるから、これ等の廣告が、全然、青年を目當てにして、なされてゐることは疑ふ餘地もない。念のために、數月前のその雑誌を探し出して見ると、矢張り、これと同様若くは類似の廣告がある。かれ等通信販賣業者が、高き廣告料金を支出して、かく久しき間廣告を繼續するところを見ると、效力顯著であることが考へられる。これ等の廣告が效力顯著であるといふことは、すなはち青年にして、これ等の書物を楽しみに讀むものが多いといふことである。かりに哲學、宗教、藝術等の愛好者、青年圖書館、圖書館の愛讀者に對して、これ等淫書愛讀青年を、第三群の青年と呼ぶならば、この第三群の青年は、實は、最も數に於て多いのではなからうかと思ふ。

二九

さて、以上申述べた通り、數に於ても、種類に於ても、程度に於ても、かくのごとく雜多な雑誌や圖書を讀んで居るといふことは、一つは我が國の印刷術の發達につれて、刊行物がまことに夥しく公にされるといふことの證據であり、一つは、青年はその讀書慾を、今や非常に旺盛にして居るといふことの證據である、今一つは、その無數ともいふべき刊行物に對して、青年たちは全く無批判的に亂讀して居る——これは他の方面から見れば、指導者が刊行物に對して、教育的見地より手を入るゝことをなし得て居ないといふ事實をも語るものであるが——證據である。

元來、青年の讀みものに關する問題は、ひとり補習教育の場合のみでなく、それを放任せざる限り、甚しく困難を感じる問題である。師範學校や女學校などで特に購讀禁止の書名を生徒に告知して、事實はかへつてそれ等禁止書の愛讀者を多からしめたといふ嚴肅なる滑稽は、數多く耳にして居るところである。これは讀みものゝ指導を消極的の方面から進めて行つたゝめに産み出した失敗である。讀みものゝ指導を消極的の方面から進めて行くことは、今日の如く、殆んど無數ともいふべき雜誌圖書が刊行される時代には、到底不可能である。それ故、もし指導者の立場から、讀みも

のに手を入れようとするならば、積極的の方面からである。すなはち探し得る範囲内に於て、最もよき書物と與ふることである。光と熱と肥料とが、植物をよきものに育つる如く、善き食物とよき読みものとは、人間を最もよく成長させるものである。特に、或る程度までセルフメイドであるべき運命に置かれて居る補習教育の青年たちには、これが最も必要である。彼等のポケットマネーをよき読みものにかえさせ、彼等の簡素なる机上によき読みものを飾らしめよ。それはひとり彼等をよくするのみでない。日本人をよくする。日本人の趣味を、思想を、道徳を、生活を。

幸に、今、彼等は求め居る。讀書嫌ひは日本人の特性の一つであるが、彼等はそれを裏切つて、近來、著しく読みものに對する熱意を高めて居る。しかし、彼等は最もよきものを選び出すだけの便宜と餘裕とを有しない。それ故、彼等は行きあたりばつたりと読んで居る。時たま、指導者の立場による人たちから與へられるものはあるが、それは決してよき読みものではない。人間を伸びるだけ伸ばさせ得るやうな、現代の脈搏をさながらに感じさせ得るやうな、さうして如何に生くべきかの示唆を與へ得るやうな、更にまた如何なる社會の招現に努力すべきかの決意を促し得るやうなそんなやうな読みものではない。つまり、彼等はその求めに對して、よきものが與へられもせず、又見出すことも出來ないのであるのである。

よきものを彼等に與へよ。よき読みものを彼等に與ふことは、今日に於ての大きな問題であるのである。それならば、どういふ基準によつて、所謂「よきもの」は選ばれるべきであらうか。

III

私は、これから第二の問題にはいるのであるが、それには最初に、本文の冒頭に述べた私の言葉をふりかへらなければならぬ。如何なる讀物と與ふべきかを考へるためには、まづ與へらるべき群が、如何なる教育の程度に居り、如何なる人生の期間にあるかを見なければならぬからである。私は、補習教育をうけるものを、義務教育を卒へたばかりで、更に進んで中等程度の教育をうけない十八九歳までの青年といふことにきめて、私の話を進めたいといふのであつたが、今私の考察しようとしつゝある問題の對象たるべき群は、教育に於て小學校を卒へたばかりであり、人生の期間に於て正に青年前期に居るのである。

そこで青年に與へらるべき読みものゝ選擇は、第一に與へらるべき客體、人生の期間に於て青年前期に居るものであるといふ事實の上からなされなければならない。私は、こゝに青年心理の發達を講壇心理學的に記述しようとは思はないが、誰もが知る通り、少年に少年の世界があるごとく、

青年には青年の世界がある。他の人生のどの期間に於ても見るを得ない特徴がある。「十七八の青年」は「十三四の少年」と僅かに三四年の相違があるといふふうに解して、十三四の青年に與へたるものと同様なもので、やゝ程度の高きものを與へるやうなことは、大きな錯誤でなければならぬ。如何に生くべきかになやみ、如何に生くることが最も尊きかになやみ、何を求むべきかになやみ、何を求め得べきかになやみ、如何なる社會を來らしむべきかになやみ、如何なる方向に努力すべきかになやむのは青年である。戀、理想、涙、それ等に生くるのも青年である。甘き悲しみがあつた、薔薇色の誘惑があるのも青年である。つまり、青年期に入つて人生が開け、社會が開けるのである。さうして、かくの如きは、決して中等學校の上級であり、高等學校、専門學校の生徒であるところの所謂教養ある青年のみに見らるべき特徴ではない。店頭にあつて、買ひ手の應對に目を送る青年にも、土を耕し肥料杓をふる青年にも、同じく見舞ふところの轉異である。私は大正五年以來、多くの農村青年に親しんだのであるが、彼等は人生に對し、社會に對し、現實の生活に對し、今日の政治に對し、極めて眞摯な、同時に深刻な訴へをもつて居つた。そのやうなことは、所謂教養ある青年だけの所有するものとのみ思ひこんで、更に彼等の心理に通じなかつた私は、それ等を一つ一つ彼等の間から發見することに、甚しく驚いたのであつた——これ等に關して南光社から出

た拙著「青年と語る」及び日本青年館から出た「私を過ぎた青年たち」を見ていたゞきたい——すべての青年は、同質の特徴をもつ。ちがつてるやうに見えるのは、量の差だ。私は、かうしか信じ得ない。

かようなる「青年」を生きつゝある群には、さうした時期に於てのみなされうべき教養がある筈である。成人の志向を以て、そのまゝ律せらるべきものでないことは、無論である。それは丁度、大人の心をそのまゝに少年の世界に推し入れることが、甚しき亡狀であると同様である。しかしして久しく大人の心のまゝに強ひられがちであつた少年に對しては、少年でなければならぬ運動が與へられ、少年でなければならぬ讀みものが與へられるやうになり、少年がまことの少年を生き得る機運が、近頃、著しく強められて居るにかゝはらず、青年に對しては、未だ此邊の留意が見られない。運動のことは、しばらく他日の問題として、まことの青年を生きるために役立つことを眼目として書かれた讀みものが何冊あらう。無論、青年に讀まるゝことを主目的として書かれたよみものは、少くない。特に青年團が全国各地に組織され、それが相當に體様をととのへて來るやうになつてからは、著しくその數を増して居るが、それ等は、殆んど例外なしといつてもいい位に、青年たちの低い慾望や、空疎な感情に媚びて書かれたるものか、青年を或る意味に於て利用しようといふため

に書かれたものか、若くは大人に適當なるものを、少しく平易な語句に書きかへたものか、いづれかであつて、眞に青年をしてまことの青年を生き得させるための心の糧として書かれたものはない。私は童話ものゝ嘗てなき隆昌を目にして、少年少女の幸福をよるこぶとともに、青年もの——本當の——の甚しく少きことを、青年のために悲まざるを得ない。特に補習教育をうける青年たちのために。

補習教育をうける青年は、家事のために忙しく、職業教育をうくるために時間をとられるけれども、若しよき読みものが與へられたならば、それに読み入る心の餘裕がある。これに反して、多くの中等學校の生徒、中にも、中學校の生徒は、來るべき高等専門學校の入學試験の難關を突破するために、心を籠めて、心の糧をとり入れる餘裕をもたない。彼等には、入學試験問題解答集や、難語難句詳解が、最も必要な書物であるのである——これがあるべからざる事態であることは申す迄もない——その無味と乾燥とから脱がれんがために、彼等の求むるものは「冒險もの」である。低調な戀愛ものである。それ故、よき読みものは、學校教育を受けつゝある十八九までの青年よりも、補習教育をうける同年の青年たちの方が、讀まれうべき可能性が多いのである。従つてよき読みものがないといふことは、補習教育をうけるものにとつて、大きな不幸と言はざるを得ない。

かようによき読みものゝ少ない今日に於ては、所謂思想問題を取扱つたものと、すぐれた藝術的作品——主として創作——とのうちで、最もすぐれたものを選ぶより外はない。——小學兒童に對しては、昨今純藝術的作品が與へらるゝやうになつて居る。小學文藝讀本などいふやうな編纂ものが、忽ち四五千部を賣りつくして居る——しかし、それは、そのうちに、彼等の人生を指導し、彼等の聖志を鼓舞し得るものがなければならぬ。つまり、彼等の生き方に對する彼等のなやみに示唆を與へ彼等の求むべきものに對するもだえに暗示を與へ得るものである。無論、一讀して彼等が理解し得るやうなものは、すくないかもしれぬ。しかし、これは彼等をして決して嫌忌の念を起させるものではない。漢文が、意外に、補習教育をうける青年や青年團員たちにすかれるといふ事實は、よく彼等の心理を物語つて居る。

近來、といつてもかなり以前からの事ではあるか、指導者の立場にある人たちは、思想に關する書物と藝術作品とを、一切、青年から奪つて、その代りに、實業功利に關するものゝみを與へうとして苦心して居るやうである。無論思想に關するものゝなかに、甚しく無責任な、放肆な、若くは疎狂な態度で、駁雜、過謬、國土錯誤な思想を傳へて居るものが、かなり多いことは事實である。また藝術的作品と稱するものゝ中でも、甚しく低級卑俗で、何等よむ人の心を強めも深めもせ

ぬものがあることも事實である。しかし、かくの如きものが多いといふことだけの理由で、思想に關するものと、藝術的作品とを青年から奪ふといふのは、甚しき無思慮であつて、それは青年に對する冒瀆であると同時に、眞理と藝術とに對する冒瀆である。人はパンのみで生きうべきものではない。青年は、農事養蠶全書と貯金年利計算表とだけで、果して、よき人生を生きうるであらうか。

しかし、それ等のものを青年から奪ふ原由が、多くの場合、彼等指導者たちが、それ等に對する批判を有ち得ず、評價をもち得ぬ思想と藝術とに對する彼等の盲目に存するのである。凡そ、最もよきものを與ふることの代りに、何物をも與へぬことは、人をして中正の道を行くことを難くするのである。私は、我が國所在の青年——無論學校教育系の青年は除外して——たちの胸に流るゝ一流の暗潮に、少なからず戰慄すべきものがあるのを看取せざるを得ないが、彼等をしてかくの如くならしめたのには、彼等から思想に關する読みものを奪つた指導者の罪が多いことを疑はない。補習教育をうくる青年には、先づ最もすぐれた思想をもつた読みものと、最もすぐれた藝術的作品とを與へよ。それを否認する人があつたならば、それは青年たちの全人的教養を否認する人である。

三二

第二に、青年に與へらるべき読みものゝ選擇は、青年が、教育に於て小學校を卒へたばかりであるといふ事實から考へられなければならない。

補習教育は、實際に於ては、まづ職業教育である。小學校を卒へたが、進んで中等學校にはいる事は出来ない、けれども、遊んでは居られぬ。居るべきでもないといふやうな青年に、その性向に適した若くは従はねばならなくなつて居る職業に關して、その知識技能を授けるのが補習教育である。近來此の補習教育が著しく世間の注目を惹くやうになり、その内容の改新も着々實績をあげて來て居ることは、いかにも喜ばしいことであるが、教育の機會均等若くは教育の極限擴充の立場から見れば、補習教育が單なる職業教育であるといふ境域から躍出して、或る意味でのプロレツトカルト (Proletkult) ——社會革命の最後の仕上げの準備であるといふ一派の考へとは違つた意味での、さうして本當に文字通りの意味での——にまで進むことは好ましいことである。すなはち中等學校、大學といふやうに學校の教育をうへに進めるには、資金なり事情なりが許さぬ多數の青年に對して、相當高き國民としての教養を與へ、單に自己が或る職業に従事して、自己の生活を確保する

に止らず、更に社會をよりよく整調するために正しく意志し、行爲する力を與へる機關であらしめることは、好ましいことである。

此の立場から、與へらるべき読みものは、まづ職業的陶冶の方面に關する読みものと次に國民的陶冶に關する読みものである。職業的陶冶に關するものは主として補習學校に於ける實業教科の參考書として、最も適切な、且つその方面では充分に權威あるものである。此の外に、自然科學の發達を知り得るやうなものも、必要である。國民的陶冶に關するものの中には、國民性の由來を明かにし、國體の淵源を明かにし得るものを是非忘れてはならぬ。小學時代に彼等がつかみ得たロマンティックな、ミッシカルな國體觀念、國民性觀念を洗煉して、彼等の現實生活の信念に鑄換へることは、青年たちに對しての一つの大きな仕事でなければならぬ。

三三二

第三に、青年に與ふべき読みものゝ標準は補習教育をうくるものが、時代に對して如何なる立場に置かれて居るかといふ點から考へられねばならぬ。時代に對する立場を知るためには、時代そのものを知らねばならぬ。凡そ時代に對する態度には、三通りの態度があり得る。時代は今如何に働

きつゝあるかを一切知らぬものが、其の一である。時代はどうやら動き方がひどくなつたやうだなど、たとゝ感ずるものが其の二である。時代の動く方向、原因、それを明かに知るものが其の三である。すべての人は、第三の態度であるべきである。特に時代の轉向を決し得べき未來を有つて居る青年は、さうであるべきである。特に、況んや、社會改善機關としての生命をもつて居る補習教育——田子一民氏は、補習教育は社會改善機關としての生命をもつて居るといつて居る。(小學校第三十四卷第五號四二頁)——をうくる青年に於ては、さうでなければならぬ。

此の立場から、現代の情勢を鳥瞰的に知り得る読みものが與へられなければならぬ。が、恐らくこの條件を最もよく具備した書物は、求めても得難いであらうと思ふ。それ故、各方面に就ての權威ある述作を蒐集して、その各冊をよませるか、その蒐集を拔萃して編著するかするより外はなし。

近來、多くの補習教育を近頃終へた位の青年たちの間に、雜多な傾向が見られるなかに、戒心すべきものが少くないのは、多くこのやうな方面の彼等の教養が等閑にされて居た結果である。

青年團を訪ねて

赤江と廣瀬

—赤江村廣瀬町ともに鳥根縣能義郡にあり—

月の十日陸軍記念日祝賀宴のかへりを松江驛に出て、私は一時五十九分發の上り列車に投じた。赤江村で行はれる聖徳太子千三百年奉賛記念講演會に列席するためである。

荒島驛から車にゆられて十五分ばかり、會場である赤江小學校に着くと、會はもうかなりに進んで、黒川知全師が壇に立つて居られた。休憩室で錦織寒晴さんや、井川春童さんと話し乍ら、折々玻璃窓から外をのぞくと、風はかなりに強さうであるが、空は夢多い春の雲が動かうともせぬ。

黒川師を送る嵐のやうな拍手のあとをうけて私が壇上に立つたのは三時半に近かつた。世界地圖を鞭でさしつゝ蕪雜な取りとめもない話を二時間近くつゞけて、私は壇を下りた。時々笑ひ聲をあげながら、私の話に聞き入つて貰つた満場の人達の教朴らしい顔付を、私は永く忘れ得ないであらう。

錦織さんの面白いなかに教訓を織込んだ木村長門のお話がすんだのは六時を過ぎて居た。六時三十八分の下り列車に乗るのであるから、私は緩りと村の有志の方からお話を承ることも出来ず、大急ぎで車に乗つた。せめて松浦村長、小松原伴次郎、長谷川辨次郎兩氏となりとも、お挨拶する時間があつたならばと、今にも残り惜く思つてゐる。十三日の松陽新報の社説「民力涵養と町村」の一篇は實に町村主體の文化運動の一例を赤江の太子講に見出したよろこびの所産であつた。汽車がゆるぎ出したのは六時五十分に近かつた。たそがれの中の海のいさり火が、花のやうに瞬いて、春らしい情味を見せて居たことは、二週日を経過した今日でも忘れ難い。

赤江に行つた翌々日、私はまた荒島驛のプラットフォームに下り立つた。今度は能義郡青年團總會に出講するためである。

その日は朝から春雨が降りしきつて居た。風も相當に強かつた。廣瀬行きの自動車が生憎先約客で満員であつたため、私は同じ目的で松江から同車して來た永田聯隊區司令官及び内藤理事官と一緒に、約一時間を驛前の乗客待合室で費さねばならなかつた。それでも永田司令官が提出される珍

妙の話題のために、私共は幾度か笑ひこけた。

そのうちに自動車が来た。雨勢はすこしも衰えない。濁り水のはねを上げあげして、車は廣瀬街道を走つた。当日の会場である廣瀬小學校に着いたのは、十一時であつた。會は間もなくはじまつた。

内藤理事官の情のこもつた講話がすんだのは一時であつた。休憩一時間、再開直ちに私の談話といふ段取であつた。私の話は「何を子供に譲るべきか」といふユーゼニツクスの見地に立つた青年への相談であつた。

私はこの話題を選ぶ迄に、實はさまざま心の動搖を感じたのであつた。それは開會間もなく行はれた優良青團長の團況報告をきいたからである。その報告は勿論皆が皆讚すべきものではなかつた。しかし其のなかゝら、謙虚な、若くは殉教的な態度で、何者かを求めて止まない思ひつめたやうな青年の生一本さを發見するには充分であつた。この人達は、敏感な世界の青年達と同様の悩みを惱んで居るのだ、思想界の表面に立ち騒ぐ様々な音のシンフォニーに耳をひたして居るのだ——私はいつそのこと、私が此の數年來心を潜めて來た思想變搖の社會學的考察を説かうかとも思つた。しかしながらそれには私に與へられた一時間半の時間が餘りに短過ぎて居る、他日にしよう、

私は思ひきつてユーゼニツクスを説いたのであつた。

私の次には永田聯隊區司令官が日本第一主義を高唱せられた。話の大部分を占めた實例は、如何にも吹き出さずには居られぬやうなものゝみであつたが、其の底を流るゝ一味の基調には、涙ぐましい程嚴肅なものであつた。

司令官が壇を下りられたのは四時であつた。引つゞいて各町村選出の青年によつて學藝會が行はれた。此頃になつて雨も霽れた。青年達は、五分間置に壇に上つて、火のやうな叫びを上げた。中には發表の技術にばかり骨を折つて、發表の内容は他人の借物かと思はれるやうなものもあつたが、多くはかうした機會を待ち設けてゐたといふやうな眞味の籠つたものであつた。さうしてそれ等には必ず時代の苦惱が聞かれた。私はチツと耳を傾けて居る間に、私の山陰道の文化程度に對する値ぶみが、段々に覆へされて行くやうに感じた。

五時過ぎに私は永田、内藤兩氏と一緒に會場を辭した。六時發の自動車に乗る迄を、初めて見た廣瀬町の探究に費すためである。廣瀬といふ名は、私にとつて初めての名では無い。十何年前、すべてのヒーロイックな行ひに夢のやうな憧憬を寄せた中學時代に、讀み入つた大町桂月の山中鹿

之助傳のなかで、何度か出逢つた名である。廣瀬町、月山城趾、それは何度か私の胸に畫がいた町であり、山である。その町とその山を前に、今私は立つて居るのである。雨はあがつたが山にはまだ白い雨後の霽が立ち迷ふて居る。町は濡れたまゝの屋根をそのまゝにして靜かに連らなつて居る。初夏の日の下に牡丹が咲いたやうな尼子全盛時代の榮華、赤い太陽が嵐の中に落ちて行つたやうな尼子滅亡時代の悲愴、私の心にはたゞ回顧のみがあつた。

私は廣瀬町の現在及び將來に就いて、何事をか聞き知り得ないうちに、自動車に乗り込まねばならなかつた。自動車は春泥の街道を飛ぶやうに荒島驛に急いだ。

大庭と講武

——大庭村講武村ともに島根縣八束郡にあり——

二十一日の春季皇靈祭は、幸に雨でなかつた。其朝、私は幸町の寓居から車を大庭村に驅つた。外出兵士、墓参りの善男善女、乃木街道は相應に人の往來が繁かつた。間を置いて彼岸の鐘もひびいて來た。

十時半に大庭村の役場に着いた。役場では廣江村長と山陰日々の梅田主筆との間に話しの花が咲いて居た。梅田さんに初對面の挨拶をして、私も話仲間に加はつた。そのうち開會の時刻が來たので、私達は一緒に椅子を立つた。

會は禁酒會の創立會に雄辯會を兼ねたものであつた。禁酒會は石倉君が説明者ともなり、座長ともなつて、滞りなく成立した。私は青年の感激と、その感激から生るゝ實行とによつて、此の會が必ず生ひ立ちゆくであらうことを信じた。

禁酒會に引つゞいて雄辯會が開かれた。福島君の開會の辭につゞいて私は壇に上つた。さうして「不景氣の原因及び國民的對策」を説いた。私は青年の感激を尊いものに思ふ。しかしその感激は廣い知見と深い理解とから生れたるのでなければならぬと思ふ。私は大ざつばな確信、ふとした心の閃めきを根據とする決意、さういふもので堅まるよりも、思想、外交、經濟、政治、それ等を統合したラインから、國家若くは國民の生活に觸れるやうな用意がなければならぬと思ふ。さういふ意味で、私は國家の經濟的生活といふものゝ輪廓をあさやかにしようと思つてかうした題目を選んだのであつた。たゞ私の混雜した言ひ現しが、私の所期をすら裏切つたことが此上もない遺憾であつた。

壇を下りたのは、十二時半であつた。役場の控室で晝飯をとりつゝ私達はまた話し込んだ。「官尊民卑」が其の話の中心であつた。官尊を當前とする役人と民卑を恥辱とせざる地方民と、罪は双方同じであらうと思ひつゝ、私も折々口をはさんだ。

二時間の後には、私はもう高峠を北に越えて居た。

高峠をすこし北へ越すと、講武小學校はすぐ目の前にあつた。日本海から吹き上げて來る風は、

道の兩側の松の樹に鳴つてゐた。私は車上で外套の襟を立てた。

講武小學校の門前で車をすてゝ、設けられた控室にはいつた時は、もう三時過ぎて居た。そこには青年團顧問の方々が開會を待つて居られた。やがて柚本梶右衛門、井上茂、柚本定義、青山淺之助、宮廻重美、井上敏、中村峰義の總裁、正副團長、幹事の方々もはいつて來られた。

幹事の一人から青年團發達の概觀をきいて居るうちに、會場ではすんぐプログラムが進行してゐたのであつた。四時三十分には朴實な顔と姿の持主である百餘名の團員を前にして私は登壇してゐた。午前の大庭村での私の話は、こゝの團員達にも聞いて貰つていゝのであつた。けれども、同じ日に同じ話を繰返すことが、私には厭であつた。そこで私は「文明諸國民の性情の比較」を話材に選んだ。私は國民的自卑を排すると同じ程度に國民的自惚を排するものである。私は、我が日本民族がすぐれた素質を傳へて居ることを承認するに於て、何人にも劣らぬつもりである。しかし、すぐれた素質を傳へて居るといふことの次には、その素質を充分に磨き光らすことをしなければならぬことをも同時に主張する。この事を考慮の外に置いての言議は、我が國民的生活を正しくする所以でもなければ、高くする所以でもないからである。今日の私の話材は、實はかうした私の心の傾きから生れたものである。團員たちが興味ある面持で私の話にきゝ入つてくれたのは、私にとつ

て此上もない悦びであつた。

辭して校門を出ると、銅盤のやうな月が向ふの山の上にあつた。私たちは、今日の國情に絶望してはならない。政治の上に、經濟の上に、今私たちが見うる様々な破綻は、それは多くの國民がさし示されたる國民的生活理想に生き得るだけの目ざめがなかつたからである。今の青年は、それを嘆かほしいことに思つて、眞剣な目ざめに急いで居る。私たちは絶望してはならない。——私はかく思ひふけりながら、車にゆられた。

屋裏村行

屋裏村は島根縣大原郡にあり

大原郡屋裏村農會自治協會聯合總會に出講のため、三月三十日午後一時二十八分松江發の列車に乗つて。その日は、湖が光り、麥が光り、竹の葉が光り、樹の梢が光り、道行く人の小笠が光り、それはもう云はうやうなき春麗朝の上日和であつた。列車の窓にもたれながら、岡村司博士と古市春彦君と私と、初めて山陰に見参した一年前のことを、それからそれへ思ひ出して居ると、汽車は尖道驛に着いた。

乗り換えた簸上鐵道は、私には最初の線路である。勾配の急なレールを、小さな機關車は喘ぎ喘ぎ上つて行つた。刻々展開される風景は、皆一やうであつた。木次まで、引つゞきかうした山ばかりであらうかと思つてゐると、急に眼界が開けて來た。間もなく汽車は加茂中驛に着いた。

驛前の駐車で車を蹴はうと思つたが、人力車は四臺あつても、ひき手は一人も居なかつた。私はどうしても歩かなければならなかつた。

加茂の平の午後の春は、うちうせぶ程に濃く熟れて居た。田の畦に蓬摘む子供の群も春であつた道傍に話し込む學校の先生らしい二人づれも春であつた。向ひ合つた林の中で啼き合ふ鶯の聲も、勿論春であつた。習々たる春風の中をコツ／＼と歩いて行くとカピタリズムとかソシアリズムとかまたはプロリタリアとかブルジョアとか、それ等はいつか夢のなかでできた言葉のやうであつた友愛會の議會否認決議などは、どこか遠い世界での出来事であるやうな氣がした。私は、私の身體の中に刻々柔かい春の氣がとけ込んで來るのを覺えた。

會場である屋裏小學校につくと、會は既に早くから開かれて居たと見えて、階下は春晝、まことにしづかであつた。休憩室に通ると、そこには千葉農學校長と吉木書記と小村技手とが講演會をまつて居られた。千葉さんは嘗て京都市外の某農林學校に居られたといふ。吉木さんも亦嘗て京都市外の某實業學校に居られたといふ。話しは自然京都市に落ちて行つた。

四時半、私は千葉、吉木、小村の諸君と一緒に、村農會長の錦織さんに導かれて會場にはいた。そうして直ぐ壇上の人となつた。私は、早きものは老い行き、遅きものは育ち行き、漸次脱殻され漸次に更新されて行くやうの道程を、我が國も辿れかしと念ずる。「若き日本」と「老いたる日本」と

が交錯するばかりか、更に鬭争にまで進むことは、私の到底堪へ得ざる悲しみである。しかも私の念願はきゝ入れられず、私の悲しみは繁からうとするこは、とりも直さず、我が國民の多くが知識を愛することを知らず、又相互に芳情を寄せ合ふことを知らぬからである。長い間、私は私の努力をこの二つの缺陷の補填に注ぎたいと希ふて來た。新しい人達は、勿論、かうした私の心的改造論をば、必ず時代後れであるとして笑ふのであらう、しかし今日の私には未だ物的改造主義に直進する迄の絶望を、心的改造論の上に見出すことが出來ないのである。私が二百餘名の人達に向つて「正しい知識と相携の情と」を説いたのは、決して其の場の思ひつきではなかつたのである。

私は話しても話しても、私の話したいと思ふ事柄がつきないやうな氣ばかりした。ソレでも一時間と四十分程で打ちきつて、私は壇を下りた。

私の次に壇に上られた千葉さんのお話は、ホントウに落ついたしんみりした内容と表現とをもつてゐた。六時五十七分加茂中驛渡の汽車にのらねばならぬために、終りまで聞き得なかつたことはまことに心残りであつた。

加茂驛に着いた時は、もうたそがれて居た。一草も揺がず、一樹も鳴らず、大沈黙のなかに加茂平の春の一日はくれて行かうとする。乳色に醸され行くその夕靄の中に、私は久し振に、さうして

またしみじみと「自然」のすがたを見出した。

加茂驛から松江驛迄、私は偶然にも掛合からの内藤理事官と九州からの原衛生課長と落合うて、一緒に春らしい話に耽り得るよろこびをもつた。

飯 梨 行

— 飯梨村は島根縣能義郡にあり —

四月三日 —

廣瀬行きの自動車を待つて荒島驛前待合所の一時間は、譯もなく長かつた。外には花を催すにしては凄味の勝つた雨と風とがあれてゐた。

三時四十一分荒島驛發の上りに間に合ふ筈の廣瀬發の自動車が、僅に數秒を遅れた爲めに數名の乗客は六時三十八分迄退屈な時間を待合室で待たねばならなかつた。其の乗客のうち一人の兵卒があつた。歸營時間の關係があつたのであらう、非常な困惑と焦燥を示してゐた。私はその人達を氣の毒に思ひつゝ、自動車に乗り込んだ。自動車は風雨を冒して、廣瀬街道を走り出した。

自動車の雨覆の破れをもちて、外套に落ちなゝる雨滴に心を遣ひながら、聞くとなしに私は運転手と助手との話を聞いた。運転手は、しきりに汽車に乗り遅れた客の狼狽を冷笑してゐた。助手もそれに同じて、更に運転手を責めた一人の客を痛罵してゐた。

「乗つてゐる時には、ナニに遅れたら遅れたで驛前で一杯やる分のことよなんかと言つてた際に、サテ愈々遅れたとなると、血相變へてブリー／＼したぢやないか」

『馬鹿だナア』

二人は聲を立て、一緒に笑つてさへゐた。

たゞ數秒で汽車に乗り遅れた人の心持は、運轉手にでも、同感出來ぬことではない。さうして、その責任者が自分達であるといふことも、覺知出來ぬことでは無い。勿論、例日に比して風と雨とは強かつた。しかし、それには自ら相應の對應法がある筈である。私は、運轉手と助手とが、數名の客人を汽車に遅らしたことに關して、何故、自らを責め得ないのであらうかと思つた。自らを責め得ないのみか、反對に其の人達を笑ひ罵るのであらうかと思つた。自らを責め得ぬ眞の勇氣のない人、他をのみ笑ひ罵る恥しい粗野な感情の持主、運轉手と助手との言葉から、私はその人達を怒ることの代りに、深き憫さを感じない譯にはゆかなかつた。更にかうした運轉手や助手の心持ちは日本人一般にとつてさほど珍らしいものでないであらうことに考へ及んで、たゞ／＼心かなしく思はぬ譯にはゆかなかつた。

そのうちに自動車は飯梨小學校の前に來た。

飯梨小學校では、飯梨村青年團總會が開催されてゐた。私はその會で一場の講話を、みる爲めに來たのであつた。板垣團長と初對面の挨拶をすまずと直ぐ私は會場にはいつた。會場には百人足らずの團員が、待ち草臥れたやうな顔をして、おとなしく話をうち交して居た。

私は「模範村になるまで」の基礎をかなりくはしく説くつもりで壇上に立つた。話の基調が例によつて文化國家顯現を目標とするのであり、心的改造を手段とすることは申す迄もない。私は一人でも多くの人が、すこしでも多き幸福に生きる事の出來るやう、すべての人は悉くこひ望むべきであると思つて居る。それ故、私は力の文明を過去のものとし、愛の文明を來る可き正しきものとする。力の文明のあるところ、そこには必ず英雄主義と商業主義とが跋扈する。

英雄主義と商業主義との跋扈するところ、そこには必ず中傷と鬪争と排擠と我利とが跳梁する。そこでは人と人とが不斷に心の刀を磨き合はねばならない。人と人とが斷崖の上に立ち並びつゝ互に落し合はなければならぬ。さうして、自分の魂をのどやかに素直に育てる爲めに努力するやうな人は、全くの馬鹿者にされて了はれねばならない。かやうなる社會は、私の最も忌み嫌ふ社會である。さうして現在の社會は實にさやうなる社會ではないか。私は今の若き人達をして、このやうな社會をそのまゝうけ繼がしむることを此上もなき悲しき事に思ふ——かういふ平素の聲を私は、

「國民性」と「日本文明」との傾向から説き明かさうと試みたのであつた。風も雨も、夕近くなるにつれて吹き募り、降り募つた。私は話の中程から、妙に歸途の自動車に気がかり出した。それが私をして私の落着きを失はしめた。私は、今それを思ひ出しても、恥かしさの念に打たれる。話はまとまらなかつたけれども、六時に打きつて壇を下りた。

十五分程して荒島行きの自動車が來た。けれども車は満員であつた。私は歩くより外に方法はなかつた。

風と雨との吼り狂ふなかを、私は荒島驛にむけて足をあげた。私の心はもうその時には平常の落着きを得て居た。

能 義 村

——飯義村は島根縣能義郡にあり——

「變更出來ぬどうぞ來てくれ」といふ電報を、八日の晩に受取つて私はいさゝか當惑した。二女の病氣が大分いゝとはいふものゝ、また半日以上、~~島~~松江の市を離れることは、出來さうになかつたからである。しかし——何といふても私事である。能義の方は夫々手配りが出來て居るのであらう。それを期日間際になつて變更するといふことは、主催者として出來にくいに相違ない。兎に角行かう。私はかう思ひ決した。

明けて九日は美しい春日和であつた。幸に廣子の熱もさほどでなかつた。私は割合に心ひかるゝことなしに停車場に急ぐことが出來た。そうして午前十一時五分發の上り列車に搭じた。丁度去年の今日、河田嗣郎博士や古市春彦君と一緒に今市かつ乗つた列車である。去年は此列車で米子に下りて午後一時から何とかいふ劇場で、一場の演説を試みた。今年は、私ひとり、米子の手前の安來で降て能義村で一席の講話をするのである。私はまたしても去年の今頃に思ひ耽つた。

豫定よりは十分程遅れて、汽車は十一時五十分に安來についた。安來町は、船つきの町としては感じのいい、小綺麗な町であつた。町を過ぎると田圃の春は十分に熟れて居た。車は氣持よく春日に乾いた路面をすべつた。小丘の裳をまはつて、小橋を渡ると、能義小學校は目の前にあつた。平野には一面に陽炎が立つてゐた。そここの丘には桃が咲いてゐた。左手には伯耆大山が見えた。清水寺の塔も見えた。

能義村役場の前で車を下りて、私は車屋さん足場の高い石階路を校庭へ上つて。校庭には櫻が三分通り咲いてゐた。會はとうに始まつてゐたと見えて、時々笑ひ崩れる聲が校庭まできこえて來た。今日は何を題材に選ぼうか、それを考へながら私は控へ室にはいつた。控へ室には澤村さんが居られた。私はその方と四方八方のお話を交した。

やがて團長の山本さんも見えた。能義郡立農學校長の西谷さんも見えた。話は、村情から村名の詮鑿にまで進んだ。

「山本村長の長い間の努力で、村治がよく行届いて、ホントウに圓滿な村です」
かう西谷さんが被仰ると

「いゝえ、圓滿ではなうて平凡なんです」

と村長の嫡子である山本團長が謙遜される。平凡でいゝんだ。日本の今日は非凡な少しの町村よりも、平凡な多くの町村が必要なんだ。村當局だけで無理につくり上げた模範村などは、モウ全く無用だ。——私はかう思ひつゝ、その問答に耳傾けた。「こゝの郡名はこゝの村名をとつてあるやうですが、こゝの村名は何か由緒があるのですか」

今度は私が口をきつた。さうして私は、能義は「ノキ」と清んで唱ふるのが本體で、その「ノキ」は「野城」であるらしいこと、今日なほ字名に飯生——イナリとよむと——いふのが残つて居るところから見ると、そこが大國主命の御食調進所であつて野城は御別城であつたらしいこと、さういふ事を山本さんから聞き得た。古傳に残る地名の解釋は、大概、荒唐な土俗的語源釋義である場合が多いが、ノキとイヒナリの解釋は、太古に於ける出雲民族活動の情況を推知せしむるに足るだけの確實性があるやうである。私は私の言語研究癖が満足されたやうにおぼえてうれしかつた。

そのうちに二時になつた。午前からの團則改正協議は未だ決定しないのであるけれども、私の歸り道の都合もあらうから、今から壇上に立つてくれといふ事であつた。私は直ぐに壇上に立つた。さうして最も容易なる言葉と、最も適當なる實例とによつて「社會聯帯の思想を説かうと試みた。

能義村が至極圓滿な村であるといふ控へ室での話に動機づけられたのである。

不安動搖といふ語が、今日の社會全體の調子を言ひあらはす恰好の言葉であることは、誰もが思ひ、誰もが言ふて居る所である。そこで私共今日の急務は、この不安動搖を整調して、少しでも住み心地よき社會へ近づけやうとする爲めの努力でなければならぬ。

さて不安動搖は整調する爲めには、社會制度や經濟組織の改善も必要であらうが、制度組織は人心の産物であるといふ時代後れの信念を、今日まで捨て得ない私は、そうした物的改造よりも、心的改造をば手段の重なものとして、數へ上げたいのである。謂ふ所の心的改造とは何であるか。それは協同の精神と公正の精神との二つである。若し社會の人々がお互に此の精神に鼓舞されたならば、よりよき社會の顯現は、決して困難でないであらう。

公正の精神は、姑く他日に譲つて、今日は協同の精神について、すこしく説き述べるであらう。

或日、一人の青年が訪ねて來た。その青年は、中堅青年講習會から知り合ひになつて、度々の往復などしたのであつたが、極く眞剣に思想方面の言論を味ふ性質の青年であつた。私は心から欣

んで、その青年を迎へたのであつたが、青年は一向、平素の快話さをあらはさない。訝かしく思つて、二言三言、雑話をはじめると、その青年は「實は私の決心をお話しに上りました」といふ。「その決心といふのは」と私が訊く。「まあ聞いて下さい」と青年は膝を正す。話によれば、その青年は出来るだけ正直に、出来るだけ奉仕的に、その生活を立て、來たが、友人も、先輩も、誰も彼も、彼に對して決して正直でもなければ、奉仕的でもなかつた。つまり、「あるべし」「なすべし」の世界に生きんとする心がけは、實際の社會に生きる上に、何の利益にもならなかつたのである。こゝに彼の煩悶があつた。彼、此の煩悶を解く爲めに、非常な心の苦しみをなめた。しかし、その心の苦しみも、何物をももたらすことは出来なかつた。そこで、到頭、彼は一切社會とたつて、眞個にひとりの生活をしやうと思ひ立つた。青年の決心といふのは、この思ひ立ちの事であつたのである。

私は、この話を青年が語り了るのを待つて、次のやうに言つた。「成程、君の苦悶はお察しする。しかし一切の社會とたつて、ひとりで生活するといふことは、空想か、若しくは言語の上のみ可能であつて實際に於ては出来ることではない。つまり、一切の社會とたつといふことは、自らを殺すといふことの外にあり得るものではないからである。第一、君は「どこに住む。」そうすると、その青年は、以ての外なことを言ふ。どこに住むなどの問題は、わかりきつてるぢやないかと言はぬば

かりに、「どこに住むつて、そりや山中でサ、一切の社會と絶つんですから」と答へる。それで私は「よろしい、わかつた。が、山の中に住むとして、まさか木の根を枕にし、木の枝葉を屋根にするといふのではなからうな」

「それはそうです」

「ぢや、家を建てなけあなるまう」

「はア、ですが、六疊一間と土間、臺所位のものですから、簡單です」

「簡單かも知れぬが、一切社會と絶つとなると、容易ぢやあるまい」

「先生方のやうに農家に生れない人には、ひと仕事に見えやうが、私共のやうに百姓ぐらしをして来たものには、何でもありませんよ」

「然うかな、でも、イクラ掘つ立小屋でも、建てるとなれア鋸もいれば、鉋もいる、釘もいる。無論、材木や、藁もいる。そんなものをどうして手に入れるかな」

「ソナものは皆宅にありますから、心配はいりません」

「宅にある——宅とは何だ」

「宅は宅です」

「ウム。もう棲處は建築すみなのか」

「イ、エ。今居る宅ですよ」

「今居る宅といふのは、お父さんの宅だらう」

「そうです」

「そうすると少し訝かしいぢやないか。一切の社會と絶つて生きるといふ人が、その生きる爲めの住家をつくるのに、社會の一部であるお父さんから道具をかり、材料を貰ふなんかは。それともお父さんは君のいふ社會のうちには入らんのかナ」

こゝ迄話が進んで来ると、その青年も少し氣付いたのか、口を噤んで暫らく黙として居たが

「成程、そう云はれて見ると、そうですね。ぢや、住み家だけは、他の厄介になつて建てることにして、その後を一人切りの生活にします」と云ふ。

「よろしい。それでは家だけはやはり社會の恩恵によつて建てるとして、さてそれからの生活だが、君は一切の他の人から離れて、暮して行けると思ふかね」

「それは出来ます。何人の手をもからず、煮たきをし、調理をし、身のまはりの始末をします」

「如何にも、それだけのことは他の人に無関係でやれる。が、この煮たきするものはどうするかね調理するものはどうするかね。身のまはりにつけるものはどうするかね」

「煮たきするものつて、米です」

「それは判つて居る。が、その米を他人に無関係で、どうして君は手に入れるかね」

「……………」

青年は私の言葉をきいて、だまり込んで了つた。私は尙ほ語を繼いだ。

「調理するものだつてさうだ。調理することは君獨りで出来やうが、その調理するものを君一人の手で調理出来るまでにするには、中々一通りの骨折ぢやないと思ふ。例へば菜つ葉にしても、種子をまけばはえるけれども、さてその種子を君一人でつくることは出来まい」

「そうですね。そう言はれると成程さうです……………種子だけは、最初一遍だけ買ふことにします」

「ハ、ア種子も社會から貰ふんだナ。段々社會に單獨生活の部分をせばめて行くね。が、マア種子も一遍だけ貰ふとするか。ソレナラ米はどうする。米も一種の種子だから一遍貰ふことにするかね。尤も數百萬石一遍に貰ひこんで置けば問題でないが」

青年は黙り込んで了つた。私も黙り込んだ。彼是、十分間も沈黙の對座を續けたのであつたが、しまひに青年はきまり悪いやうな笑ひをうかべて、

「私の考へは淺はかでした。あまり當り前な事なので、つい私共月々の生活が、悉く他人に負ふものであることを忘れて居ました。如何にも、お話の通りに一切の社會と絶つて生きることは出来ることでない。一切の社會と絶つには、自らを殺すことより外に方法はありませぬね」

と云ふ。それより種々と雜談をして別れたことがあつた。

これは全く一場の閑談に過ぎないが、しかし、何の爲めに此の一挿話を私が諸君に物語つたかは聰明な諸君のたやすく氣付かれる所であらうと思ふ。げに、社會の生活は、人と人との交渉である社會の成員である所のすべての個人が、互ひに強く影響し合ふ一曲のシーフホニーである。それで一見何等の關係なき人と人との間にも、よく檢べ訪ねて見れば、大きな紐帯で結ばれて居るのである。而して、一人の人の存在は、第一その父母のおかげである。その父母は、またその父母と同時に生きた他のすべての人と連帶的交渉を有つて居たことは無論である。そうすれば、一人の人の存在は、悉くをその前代のすべての人に負ふて居ることにならねばならぬ。更にまた父母は、夫々その父母のおかげによつて生きたのである。而してその父母は、同じくその同時代のすべての人に

連帯關係をもつて生きたのである。かやうに考へて行くと、一人の存在は、一切の過去並に現在に負ふて居ることがわかつて来る。これを他の方面から言ふなら、個人の生活は、自分以外のすべての社會人の力が作用して来るのを受けとり、それに又自分の力を加へて、今度は夫れを他に送りかへすところの生活であるといふことがわかつて来る——我々の生活が報恩感謝の生活であるべき原據は、實にこの點に存するのであるが、これに關しては、今こゝに話をすゝめることは差控へるであらう。

昨今個人と社會とは同一生の兩面であるといふ考へ方が、急に多くの人たちによつて採用されるやうになり、個人の精神現象を研究する心理學や、個人の身體現象を研究する生理學なども、社會的に、若くは社會的部面から、研究しなければ、正しき業績をあげることが出来ないといふ風になつて來たのは、素よりそうあるべきことである。つまり社會的生活を離れて、個人の生活は存在し得るものでないのである。だから、各個人は、互ひに相協同して、社會の幸福をもち來たすために努力すべきである。そうすることなくして、純粹な意味で自己の力によつて、自己の幸福をもち來たすことは出来ることでない。出来ること考へることは、それは全くの謬想である。

例へば、各個人の健康であるが、今日のやうに密集生活を營んで居ては、自己一人の注意だけで

自分の健康を増進させることは、出来難い相談であつて、他の社會人が、一樣に同一の希望の下に努力を続けなければ駄目である。試みに日英佛獨四ヶ國に於ける十年單位の死亡率(千人に對する)の統計を見ると

明治五—八	明治一七—一八	明治二四—二八	明治三四—三八	明治四五—大正元
日本 一七	一九	二四	二二	二一
英國 二二	一九	一八	一六	一三
佛國 二五	二二	二二	二〇	一七
獨國 二八	二五	二三	一九	一五

となつて居る。これで見ると、四十年以前に四ヶ國中、最も死亡率の低かつた我が國は、四十年後に於ては、一番高い死亡率をもつやうになり、他の英、佛、獨は、何れも反對に順次死亡率を低めて來て居る。これは、ある一つの社會團の成員が、互ひに協同の目的に向つて心を合はせたならば死亡率すら低めることが出来るといふことを物語つて居るのであつて、反對に、個人の健康も、その社會團の他のすべての人の協同によつて、保有され、増進されることを物語るものとも云へる。これによつても、個人の幸福はその屬する社會の成員總體の協同努力によつて持ち來られるもの

であることが、明瞭にわかると思ふ。だから自分一人の力で自分のみの幸福を求めようとしたり、又自分一人の力で他よりずつと利益を得ようとしたりすることは、正しい事でもなければ、又効果をあげ得ることでもないと思はねばならぬ。

第一、今日の経済組織が、「自分一人」とか「自分の家一軒で」とかいふことを許さぬやうになつて居る即ち経済學者は、今日の経済組織を交換経済と呼んで居る。交換経済といふのは、自ら耕して自ら食ひ、自ら織つて自ら着るといふ自給自足の情態ではなく、農家はその收穫した諸穀を賣つて反物を買ひ、呉服屋は呉服を商ふて、諸穀を買ふといふやうな情態をいふのである。これを他の方面から見ると、分業である例へば私の場合で云ふと、私は今、新聞記者をして居る。(淺山申す。此の講話を試みた時は未だ新聞記者であつた)さうして毎日一篇の社説を書き、また編輯局でいろ／＼編輯上の事務をとつて居さへすれば、毎月きまつて、社から金が貰へる。私としてはこれだけしかないのであるが、米屋は米をもつて来てくれる。呉服屋は呉服をもつて来てくれる。青物屋は青物を、牛乳屋は牛乳をもつて来てくれる。私の生活に必要なものは、何でもよつて来てくれる。であるから、私は新聞記者といふ私の仕事に、一圖にあることが出来るのである。このやうなことは、また同時に諸君各自の場合についても云ひ得るのである。我々の生活は、實にかくの如き

組織の上に保たれて居るのであつて、我々各自は、實に現在に生きる一切の人々のお蔭によつて生じて居ると云はねばならぬのである。而して、我々は、我々の父母によつて生を得たのであるが、その父母も、夫々その時代に生きた一切の人々のお蔭によつて、自己の生を保つたのであつた。そこで、我々は、間接には、我々の父母と同時代に生きた人々のお蔭をも蒙つて居るのである。祖父母曾祖父母についてもまたこれと同様のことが云へる。であるから我々各自の今日の生活は直接間接の差こそあれ、すべての過去に生きた人々、すべての現在に生きて居る人々の力によつて營み得て居るので、人と人との間には目にこそ見えぬ、きつてもきれぬ連帯關係をもつて居るのである。

かく連帯關係をもつて居るのは、獨り人と人のみではない、職業もさうである。

それは十年に近い或る年の夏、Aといふ都市で起つた出来事である。どこの都市でもさうであるが、都市にはきまつて其の周圍若くは多少の距離をもつてゐる島などの農業者が、糞尿の始末に来るものである。某の家は某のお華客先きといふ風になつて居るのも少くない。そのA都市でも、やはりさういふ風になつて居つて、毎朝、その周圍の農業者は、肥料車をひいて糞尿くみにはいつて来るのであつた。或る朝その一人が平素の御華客である或る呉服店に肥料くみに行くと、すこしく

時刻が早かつたので、便所口の戸が開いてゐない。そこで止むなく店先からはいつたのであるが、さてその時、その肥料くみの肩にかたがて居た肥料杓が、店と臺所のしきりになつて居る暖簾に觸つたのであつた。全くの不注意であつたのであるが、粗忽は粗忽である。肥料汲みの農夫は、心から其の粗忽を詫びた。その言葉と態度との眞實さに、最初騒ぎ立てた丁稚小僧たちは静まつた。が静まらぬのは、其の家の内儀さんであつた。内儀さんは、其の時未だ寢床の中に居たのであるが、金切り聲を張り上げて叫び出した。「ナニ、肥料杓の糞を暖簾につけた、不作法にも程があるぢやないか。流石に人間のしないやうな仕事をして居るものは、禮儀を知らぬ。もうそんな奴なら是から出入して貰はなくてもいい」此の言葉を聞いて、肥料取りは、何といふ侮辱だらうかと思つた。口でだけは「何と御叱りを蒙つても、致方はございませぬ。また御出入り叶はぬといふことも残念ではあります、致方はございませぬ。永い間、御厄介になりました」と、叮嚀に言ひはしたものの、心の中では「人間のしないやうな仕事をしないもの」とは何といふ暴言だらうかと思つた。肥料取りの胸には、漸々に憤激の情が燃えて來た。そこで尙ほ二三軒華客先を廻るつもりにしてゐたのであつたが、もうその日はそのまゝにして空桶をひつばつて歸途についた。何時も寄りつけの茶屋で休んだ。そのうち、ポツ／＼仲間の肥料取りが、三人五人と重い車をひつばつて來た。さうして、

その人達も、その茶屋で休んだ。この茶屋で休んで、一時間か二時間、たはいもない雑談を取り交したり、罪の無い笑話に興じたりするのが、肥料取達の毎日の習慣であつた。その日も、例によつてかす／＼の雑談に興じたのであつたが、例の肥料取りが只一人浮かぬ顔をして沈黙して居るのに氣付いた一人が

「君、今日はどうしたのぢや。エライ澄ましてゐるぢないか」

「澄ましぢやゐない」

さうすると、他の連中も、口々に

「いゝやちつと變だよ。何かあつたに相違ない」

といひ立てる。そこで、その肥料取りは、今日の出來事を詳細に物語つた。さうすると、皆の者は一齊に憤り立つた。「人間のする仕事ぢやないとは不都合ぢや。元來が、町の奴等は、皆そんな考へをもつて居る。人を侮辱するにも程がある。何も、かういふ侮辱をうけてまで、肥料を取らなくつてもいい。」といふのが、皆の人達の一致した心持であつた。その心持は、やがて肥料取りのストライキといふ形をとつて爆發した。

それから二三日経つと、此のストライキは一人の除外例もなきものになつて、その市には肥料取

りの隻影も見ぬことになった。市の人達は、最初にはこれを怪しみ思つたのであつたが、事情がわかると、誰も誰も肥料汲みたちの身の程を知らぬ計謀を嗤つた。が、十日も過ぎると、嗤い事ではすまされぬことになった。小人数の家は、さうでもなかつたが、番頭、丁稚の多数を使つて居るうちでは、満ち溢れる糞尿の始末に困り出した。殊に季節は夏の初めである。紛々たる悪臭が、市の人達を不愉快にさせたばかりでなく、その市にはいつて来る人達をも不愉快にさせた。その市は、とりわけ花時から青葉時がよかつた。多くの観光客はその時節を目にかけてはいつて来た。その観光客が、その悪臭に辟易した。さうして、悉くその市での宿泊を見合せ、その市での買物を見合せた市の人達は、一年中の書き入れ時に、このやうな事態が生じたので、糞尿以上、悪臭以上に困つたこれではならぬといふので、市内少壯の連中が四五人相談したが、其の結果は肥料取りに詫を入れようといふことになつた。そのうちの一人が代表者になつて、例の肥料取りの家を訪ねた。そうして、呉々も市民の態度の無禮であつたことを詫びた。詫びられて見ると、其の肥料取りも釋然とした。

「イヤ、貴殿のやうな立派な紳士が、頭を下げてそのやうに被仰つて頂くと、却つて痛み入ります。人間でないやうな扱ひをされたので、腹が立つたのですから、それで悪かつたと被仰れば、問題

はそれだけで消えて了ひます。ぢや皆にも話して、早速明日からでも、肥料汲みに参るやうに致しませう」

かうして問題は漸く解決したのであつたが、さて此の市民の代表者になつた人は、東京高商出身の少壯實業家で、呉服店の主人として新人振を發揮してゐたのであつて、何時も口癖のやうに、自分の新式經營法を吹聴し、近年に於ける同店の繁昌は、全く自分の力量であると信じて居つたのであつたが、此の肥料取りのストライキによつて、その確信はみごもに裏切られた。さうして、自分の店の繁昌には、澁滞なく糞尿を汲み去る肥料取りのお蔭も加はつて居ることを了得したのであつた。

この一つの挿話によつて、講君は直接何等の關係もないやうに見える職業と職業との間にも、實は密邇不離の連絡があることを認め得られたであらうと思ふ。若し私が市の繁昌と肥料取り、若くは呉服店と肥料取り相互の關係を論ずといふやうな題を掲げて、突如として諸君に臨んだならば、諸君はむしろ滑稽の感を以て迎へられるであらう、實は斯くの如き深い關係を有ち合つて居るのである。

しかし演説二時間以上にわたつても、私の話はまとまりがつかかなかつた。或る種の期待をもつて居られたかと思ふ聴衆に對して、私ははぢなければならぬ。

話を了つて、私が校庭に出たのは四時半であつた。夕近い春風が靜かに櫻の梢をわたつてゐた。

古江村

——古江村は鳥根縣八東郡にあり——

四月十三日は、長女京子の誕生日である。花の最中に生れし子、花の如く美しかれと喜び祈つたあの日から、まる四年の月日が経つたのかと、私は、「コレは山の字ですね」「これはタカシのタ字でぢやし」と繪本の文字を拾ひよむ子を目の前に置いて、朝まだきからそれとない感慨に耽つたのであつた。

その日の午後、私は社から車に揺られて、市外古江の小學校に行つた。そこで開かれて居る同村の戸主會總會に出講する爲めである。昨日來の春雨もすつかりあがつて路には薄柔かい春が落ちてゐた。市外に出ると、どこにもこゝにも、目がさめる様にさくらが咲いてゐた。散り残りの桃もあつた。所々に白木蓮もあつた。燃えるやうな紅椿もあつた。その間を縫ふやうに、順禮の菅笠が近づいた。車夫の一足ごとに展開され行く眺は、「綠風の春」そのものであつた。

村役場の前から右に折れて、田中の小道を向ふの小丘まで行くと、そこが學校であつた。會場で

は畑菌苗品評會の褒賞授與式が行はれてゐた。私は控へ室で、安原校長とお話した。話の大部分は出雲史蹟に關するものであつた。さうしてそれは私の考古癖、語源探究癖を咬るに充分なものゝみであつた。「未明」ホノカとよむ、といふ地名は、十六島、出雲郷、飯生などゝ一緒に、私にとつての新しい收穫であつた。御津にあるといふ穴居の遺跡は、出雲地方の先住民族を考へつゝある私にとつての、願ふてもない知識であつた。古江村は古志、古會志、長江の三村を合併して、明治四十年に新置したものであるといふが、その三村の名も、又、必ず此の地方に於ける、往古の民族移動を物語るに足るものとして、私にとつての尊い材料であつた。

こんな話に耽つてゐるうちに、會場で褒賞授與式がすんで、椋木警部のお話が始まつたらしかつた。

さうかうして居ると田尻村長が見えた。私の壇に立つべき順番が來たのである。會場にはいつて見ると、そこには三百人に餘る戸主其他中堅階級の人達が、一ぱいに座つて居られた。其の朴實にして敦厚な多くの人達を前にして壇上に立つと、私は心から「民力涵養」の談義をしなければならぬやうな氣持を感じた。私はこれ迄、多くの場合に於て、豫め選んだ話材を説き得たことは少い。そ

れは聴衆の質が多くの場合に於て私の豫想と相反する雜多を有つからである。しかし、此日だけは私の豫想した通りの比較的粒の揃つた聴衆であつた爲め私は躊躇なく私の豫め選んで來た話を其のまゝに進め行くことが出來た。

その豫め選んだ私の話といふのは民力涵養五大要目中の第三項並に第四項に關して、島根縣で設定し、八束郡で實行を期して居るといふ細目の中にある「世界に於ける帝國の地位を理解せしめ國民的自覺を促すこと」及び「隣保相扶の醇風良俗を尊重して之が助成に努むること」の二項の解釋であつた。例によつて私は多くの耳に入りやすき事例を引證して、理論的談義を試みることを避けなければ、實は、國際生活の原理も、含めたものであつた。社會構成の原理もつゝんだつもりであつた。資勞協調の本義、社會聯帶の眞諦も織込んだつもりであつた。私は最も難解なる原理を最も容易に説き示すことによつてのみ、一般民衆の心的生活を高揚し、リファインを得ると信じてゐる。一般民衆の心的生活が高揚され、リファインされることが、我國民の國家生活社會生活を正しきものに改める方法であり、機會であると信じてゐる。私はかういふ信念のもとに、この數年間、出來得る限り諸方の講筵に列して、拙い言葉を吐いて來て居るのである。

二時間近くお話をつゞけて、私は壇ををりた。私の次は郡長の吉村さんが立たれた。さうして戸

主の権利と義務を説かれたさうであるが、私はそれを聞き得なかつた。私は休憩室で椋木警部と、現代の新聞の有つ可き意義、有たらしむべき意義などを、取りまぜてお話した。さうして六時すこし前、椋木警部と連立つて學校を出た。吉村さんの話は未だすんでゐなかつた。暮せまる佐太川の平野には夕靄がなつかしく煙りそめて居た。

母里 往復

——母里村は島根縣能義郡にあり——

「此の十七日に在郷軍人會、青年團の聯合總會を開くから、都合がついたら来て貰ひたい」といふ猪子團長からの手紙を見た時から、私は母里藩の城下であつた母里の風物を彼是と想察して居たのであつた。嘗て榮えた、さうして今は時代の變轉——それは主として、交通機關の發達によるのであるが——によつて頽勢を増しつゝあるやうな土地には、剝落した錦繪を見るやうな或種のなつかしい情緒が漂つて居るものであるからである。

其の日は、濃きに過ぐるほどの花曇であつた。午前十一時半安來驛着の列車を下りて車にのると安來の春は、乗相院の櫻と共に、今甞であるかに見えた。社日櫻の下には、花見の人達が冠履を倒にして踊つて居つた。伯太川堤の街道には、清水寺詣りの人達が、蟻の行列のやうに續いて居つたさうしてそこら一面、さくらと菜の花と、桃と杏と、麥の青とが、山陰道といふ語感からは、どうしても生れて來ぬやうな明るい色彩にうち映えて居つた。私は其の間を車にゆられ乍ら、宇賀莊を

左に大塚の田原を右に顧眄した。車夫は一々名蹟を指示してくれた。

安來から車上一時間十餘分で、母里村についた。私の目の前に展開された母里、それは鐵道と港灣と工業とのみが繁榮を呼び招く現代に取殘されて、偏へに運命を時の導くにまかせて居るいちらしい連擔地であつた。私は、十年程前、東海五十三次の名に呼ばれた關、龜山、石藥師を歩いて得たと同じ感じを、初めて見た母里によつて思ひ蘇へらさざるを得なかつた。それは慘い時代の悲劇である。しかし、機械が此の世から姿を消さない以上、何とも詮すべきなき悲劇である。私は母里村の振張を計つて居られるであらう母里の首腦者に對して、深い同情を寄せない譯には行かなかつた。會場である小學校に着いて見ると松江聯隊の杵村中尉を中心にして在郷軍人會、青年團の幹事諸君は晝飯を共にしつゝ、種々な談話を取交して居られた。午前中の武道大會が終つて、丁度晝食休憩中であつたのである。

講演會は一時半から開かれた。午後三時二十分安來驛發の列車で松江にかへらねばならぬといふので、杵村中尉が最初壇に立たれた。中尉は、昨年に最優等で陸軍大學を卒へた聰明にして俊敏な若き秀才である。講演の内容は軍事に關するものであつたが、新しき統計材料から世界に於ける

戦費の増減を説かれるあたりは、軍備に關する議論多き今日に於て、誰もが聞き置くべき暗示に富んだ尊い言説であつた。かね／＼強國といふ言葉を、何等の檢覈を加ふることなしに、たゞ漫然と受取り、且つ誇る我が國民の無省察な態度を慚らす思ひ嘆いて居た私にとつて、かうした言説が、深き理解と鋭い機略との所有者である若き將校によつて一般民衆に傳へられたることは、此上もない喜びである。

杵村中尉のあとを受けて、私は壇上に立つた。さうして、杵村中尉の講演に、多少内容上の連絡を有たせるつもりで、我が國力の他の諸國に對して劣弱なる點、それを補填すべき方策としての心的改造論を内容として約一時間半程説述した。在郷軍人會員、青年團員以外、一般の聽衆もかなり居られたやうであつたが、その人達が快よく私の話を聽いて呉れたのは、何より嬉しかつた。

私の次には、黒川知全老師が壇に立たれたのであつたが、六時半安來驛發の汽車で歸らねばならぬ私は、切角の機會であり乍ら、其の尊いお話を聽く時間がなかつた。私は控へ室で母里村長や、森木校長などゝしばらく閑談を交えてやがて辭去した。

濃く暖い花曇りの空の下には、花の枝を手にした晴着の男女や、菅笠とゴザ簍をつけた順禮やが長閑な顔をして往來して居つた。

「今年は、旅宿の規則がやかましくなつたので、順禮は大困りです。寝るに寝られず午前二時頃から歩き出す人達がちつとやそつとではありませんせ」といふやうな車夫の話にきき入乍ら、丁度六時に安來驛についた。それから七時五分に松江驛に下りて、其の足で粵堂の軍備制限演説をきくべく松江座の繪看板をくゞつた。

婦人會を通して、せめて日本の女性の魂を、すこしなりとも生かしたいと考ふる私は、私の上京を延期することに決めた翌日の二十三日に母里村の小學校長大森さんからの、婦人會の講演に來ぬかといふ手紙に接した時、何等の考慮をも拂ふことなしに、参上いたしますと御返事したのであつた。

二十六日の午後、丁度十日前に同じ母里村の在郷軍人會青年團聯合總會に出講するために車に揺られた伯太川堤の街道を、私はまた車に揺られた。あの時に、白い塊のやうに丘や山に咲きこぼれてゐた花は、もうどこにも見られなかつた。その代りにこゝそこの畑や春戸の柿の芽や桑の芽が、あはたゞしい自然の推移を見せるやうに萌え立つてゐた。

學校について、大森校長といろいろな話を取交してゐるうちに、母里の町は昔も、立てず暮れ初

めた。近代的繁榮を將來に待ち設けられぬとすれば、思ひきつて愛と公正の精神にみちた平和な村をつくり上げることが、母里の人達にとつては、最も賢い方法ではなからうか、さう思ひつゝ、私はそれに見入つた。

そのうち柴田さんが見え、曾田村長が見え、學校の職員の方が見えた。釣ランプの光が、やはらかくなつかしく控室を照した。私は、なにがなしに悠揚と溫柔とを感じた。話は、ほんとうにとりとめもない雑談の領域を出でなかつた。そのうちに會場の方では、學校兒童の唱歌や、朗讀のやうなことが始まつたらしかつた。校庭には砂土を踏む會員達の下駄の音が、ひつきりなしにつゞいた山陰道に來て僅に六十日であるけれども、青年團の總會や戸主會には幾回も列席して、大概の見當はつくやうに思ふが、婦人會は今夜が初めてである。私は、山陰道の女人文明の一端を知り得ることを興味深く思ひ耽りながら、開會を待つた。私は、「女性の力」に目ざむることなく、たゞもう安價な、低級な一生を送つて悔ひない日本の女性に對して、憤ろしき程の齒痒を感じるものである。とりわけ、「農村の女子」といふ名のもとに娘となり、妻となり、母となる女性の一生に對しては、どうしても憫み悲まざるを得ないものである。久遠の女性、それを希ひ望む私は、婦人會に出席することに、いつも女性の力の尊さを説かざるを得ないやうに感ずるのであるが今夜も、同じ感じに

囚はれてゐた。

山陰道の女人文明の一端を知り得るといふ一種のよろこびと、女性の力の尊さを説か……といふ一種のぞみと、此の二つの感情を糾らせながら、壇上に立つたのは午後正九時であつた。会場には老壯若すべての階級を網羅した母里の婦人達が、一パイに集つて居られた。私は何よりもその集まりのいゝのが、心他よかつた。

私は、最初は、主として中年以上の主婦らしい人達を目やすに置いて、就學前の子供の躰かた、就學後の家庭に於ける復習の指導法、さうしたことに對する母親の正しい態度が、子供の將來を偉れたものにするのであるといふやうな内容で「母性の力」を説いた。次には、主として教育あるらしい若き人達を目やすに置いて、女性の社會的・位置の變化、女性の修學、並に結婚に對する正しき態度、さうしたことに對する若き女人の深い自覺が、社會の將來を正しきものにするのであるといふやうな内容で「女性の力」を説いた。中年以上でもなく、うら若いといふでもない二十人程の小學校を卒へて聞のないらしい人達は、しまいまで私の目やすの外であつた。その人達はいかにも退屈らしい風であつた。私はすまぬすまぬと思ひ乍ら、ついその人達に話しかける機會を有ち得ぬうちにもう私の話は二時間近くにのびて居た。

私は、今少し女人文明の體様を説明したかつたが、しかしこれ以上話をつゞけることは、さらだとも倦怠しきつた會衆を、一層なやます所以であると思つて、それらしい結論ものべすに壇を下りた。私は二時間に近い私の話が、恐らく一人の理解者も、共感者も呼び得なかつたことに對して恥ぢなければならぬ。

話を終つてから、控へ室に落着いて、私は數人の方々と様々なお話をしたが、私の心は尙ほ婦人會から離れることは出来なかつた。私は、私の説く女性論に對して、むしろ物足らぬやうな顔付をする多くの女性があつて、いゝと思ふ。物足らぬ顔付をせぬ迄も、うち首肯だけの女性はすべてあつてほしいと思ふ。しかも、私のかうした希望は多くの場合に於て裏切られる。私はこんなことを思つた。しかし、今それを直に要求するのは、要求するものゝ無理だ、今日に於ては集まりのいゝといふことだけで満足すべきであらう。私はまたこんなことも思つた。

旅館の寢床に身を横たへたのは、もう一時を過ぎて居た。蛙の聲が夢を物語るやうにきこえた。

三島の村

——生口、高根、佐木は瀬戸内海中の小島にして廣島縣豊田郡に屬す——

尾道から西南へ五里、吳から東へ十里、備後と伊豫とに挟まれて安藝の東南の隅、ソコには詩のやうな剝落した錦繪を見るやうな、けたしましい改造の叫びを他所に彌が上にも寂れ行く瀬戸田町を中心として三島七箇村がある、一を生口島一を高根島、一を佐木島と云つて一葦の水を隔て、互に相臨んで居る。北は佐木、高根の兩島が糸崎三原忠海方面に對し東は生口、佐木の兩島が備後の因島に接し南は生口の背面が伊豫の岩城、西は生口と高根との側面が大三島に向つて居る。

この三島の中心地である生口島の瀬戸田は日に凋落の色を濃くして居るところの海沿ひの町である。數年前迄は、數雙の汽船が寄港して居たが、糸島忠海から大迂回することの損ばかり見るに過ぎぬといふ理由の下に、今日ではモウそれも無くなつた。それ故因島に行くにも、糸崎に行くにも三原に行くにも、大三島に行くにも、スベテ和船を漕がねばならぬ。尾道だけには發動汽船の便を

かり得るが、ソレモ風の日の事である。

かうして交通が不便になればなる程、瀬戸田町の存在は人に忘れられて来る。これは併しながら心ある三島の人にとつては堪へられぬ無念でなければならぬ。彼等が生き残つてゐる老人達から徳川時代の町の盛賑を聞き、又目のあたり其の誇り得べき美はしき風光を見る毎て、モウじつとして居ることは出来なかつた。事實、汽船がなく、汽車がなく、上り下りの旅人達が多くの帆前船によつた時分、町は如何にも船つきの街らしい賑さと情調とを漲らしたのであつた。また其の風光は變化と溫籍とを飽有したもので三島七箇村、岩角に立つも、丘陵に佇むも、到る處に活きた美術を遺憾なく展開してくれる。わけて陽春の三四月には、桃と梨とがすべてを埋めつくして、空氣は蜜よりも甘い。全く捨つるには惜しい町であり、村であり島である。

サテこの三島七箇村が日に衰頹して行くのに反比例して、數年前町制を布いた隣島の土生町は、時代が生んだ造船熱のお蔭で譬へようも無く急速な發展を示した。三島の青年と壯者と長らく他郷に漂泊をつゞけて居た勞働者とは、潮のやうにこの故郷近い土生町に流れ入つた。一家を擧げて移る者も決して稀では無かつた。

瀬戸田の町には久しい以前、三島七箇村組合立の工業學校が設置されて居た。高根生口島の北側五箇町村の組合立高等小學校も設立されて居た。しかし後者は併置校増加の機運のため、前者は思はしい入學者を得られないため、孰れも廢校になつて了つた。かうして瀬戸田町の三島に於る中心地位は漸々に動搖し、其賑しさは際立つて失せて行く時に、因島が出現したのである。瀬戸田をはじめとして島々が火の消えたやうな寂しさに落ちて行くのに無理があらうか。

隣合せの因島が目まぐるしい發展を續けて行くのをじつと見守つた時、三島七箇村の人達は、モウとても黙つて居る事は出来なかつた。所謂有志連はヨリ／＼集まつては思ひを凝し／＼した。結果、其の人達は先づ其の誇り得べき風光の上に復活の第一歩を見出さうとして保勝會を發起した。しかし交通が不便で、風光以外に相當の設備を有たぬことが、何よりの不都合であつた。自然彼等は遊覽客と觀光團とを誘引することに失敗した。

有志達は、また造船所の設置によつて衰勢を挽回しようと思つた。幸に夫は某資本家の發奮と某資本家の後援とによつて、二箇所に創設することに成功した。所が幾何もたゞぬうちに戦争がすみかゝつて、多く工場の煙突から吐き出す煙が青い吐息に變ずる時が來た。見る／＼一箇所は工場の

完成も見ぬうちに中止された。他の一箇所は木造汽船二隻を進水させたまゝで工場は雨曝しになつて了つた。昨今その造船所に船渠を掘つて居るが遅々として工事が捗どらぬ。恐らく何等の利益も與へぬ上に、徒らに風致を傷ふのみであらうと思はれる。のみならず土方が荒しまはり、土方相手の怪しい連中が手放しに風俗を紊す。三島の人達は船渠の成功を祈るかたはら、其のために招現せられる將來の事態を思つて心を顛はして居る。

數日前から生口、高根兩島は電力を因島電氣會社から得て殆んど各戸に點燈することになつた三四箇月前から工事に着手して居たのであるが、遂々ソレが完成して、いよいよ今夜から點燈するといふ夕方一やうに集まり噪やいだ島の人達は、たゞ珍しい電燈のみを求めたのであつたらうか。光明へ——光明へ——彼等はタゞもう無意識に時代につれた土地の發展をのみ望み憧れて居るのである。

何故に三島七箇村はしかく萎靡、振はないのであらうか。島の人達は決して怠惰でない。山村の農家は時に悠閑であり得るが、島の農家は常に小忙しい。春夏秋冬、島では男も女も寸時も休まな。言はゞ齷齪として働いて居る——事實、ソウしなければ生活を滑らかにすることが出来ないの

である。

米、米の刈入れがすめば麥、瘠地には薩摩芋、除蟲菊、——除蟲菊は四五年前までは畑の大部分を占めて居たが、近頃は植ても枯れるので段々減つて來た——谷地と窪地には夏蜜柑、ネーブル。日當りのよいところには桃梨。ソレにこの一兩年來煙草と桑とがめつきり増えた。島の人達の八分通りはかうした耕作と栽培とに身を粉にして居るあとの二分が小商賣者と漁業者とである。

私は島の人達が隣島因島の繁榮を羨んで、徒らにヤキモキして居るのを誹議することも敢てせぬが、此の伊豫と備後とにはさまれた三島七箇村は、永久に詩のやうな島として残り、剝落した錦繪のやうな村として残ることが定められた運命であり且つそれが幸福でもあるといふ感じに堪へられない。

三 良 坂

——三良坂は廣島縣双三郡にあり——

三次から馬洗川に沿うて、尾道に通ずる坦々たる縣道を自動車で飛ばすと三十分餘で、一寸した連簷地に停車する。ソコが三良坂である。三良坂は昔三郎坂と云ひもし書きもしたといふが、何故に、若くは何時から、現稱に轉化したものか、同地の古老も知らぬと云ひ文献にも徴し難いといふ。従つて他の多くの地名にはつきものである土俗語源の口碑もない。一坂東に越ゆれば吉舎があり、三里を西に行けば三次がある。其の上、特産もなければ、交通の衝路にも立つて居らぬため、大した膨脹も發展もなしに三良坂は永い寂しい時を送らねばならなかつた。殊に尾道三次間の縣道が開通されてからは、ウマイ汁の多くは吉舎に吸はれる形勢に墮ちた。ソコデ村當局や有志達は村發展の計策を講究した。其の結果、工業地にしようといふことに一決したにはしたけれども、材料を得るにも、製品を搬出するにも、共に利便を缺いた此の土地に工業の花が咲く筈は無い。殊に花筵製造の如きは、村民に對して唯損失と銷心とを與へたに過ぎなかつた。

然るに數年前、藝備鐵道が開通して以來、ドコとなく村内の空氣に活氣が蘇り、村民の面貌に希望が動いて來た。「驛路」の面影を止めて、譯もなく鄙びた色調に包まれて居る三良坂にも、新局面展開の機運が近づいて來たのである。村の人達、わけても青年達は早く「あらしむべき状態」を其の胸裡に描き成して、その實現に最善の努力を拂はねばなるまい。ナゼならば、今日に於ける地方農村の現代文化は、多くの場合訓練されたる眞の文化を招來することではなくて、「俗惡頹亂の似而非文化」に墮在することであるからである。自らの肉體の知見と靈魂とを正しく大きく生ひ育てるために奮闘することではなくて、入り込んで來る不眞面目なるサトの人達の淫蕩、浪費、不誠實を模倣するために努力することである。

若し私の此の望囑が幾分にてても實現されたならば、三良坂は現在の持つて居る三つの名物——二十年勤續の篤實誠意の現小學校長世良茂君、弊衣亂髮しかも談論風發の現助役伊藤豪二君、徒競走で日本的になつた伊達洋造、林富二郎君——以外に今一つの名物を加へ得るのであらう。四月の下旬、春の夕陽が三良坂川の小波を染めて綠亂のかぎりをつくした桃櫻、杏の樹々に靜やかな風がわたるのを車上から打眺めつゝ私はかなり多い感懐を残しつゝ、三良坂を後にしたのであつた。

出雲往復

ふと目がさめると、夜はもうすつかり明け離れて居た。カーテンを挑げて外をのぞくと、湖の光がしむやうに目にはいる。何時の間にか彦根は過ぎたと見える。

此の邊から大阪迄の沿線の風光は、前後六年に近い日子を京都で過した關係で、私には極く親しいもののみである。極めて簡単に洗面をすまして、また讀みかけの「解放」五月號をひろげる。此の號は、人物月旦を中心材料にして居るが、去年の五月號も人物月旦であつたと思ふ。その頃、私はまだ松江に居たが、「人物月旦は、多くの場合に於て、いゝ加減な評判や、筆者の想像やをこつちやにして組み立てたもので、成程讀物としては面白からうが、しかし其の價値は、市井の井戸端會議

の記録以上に出来得るものは少ないやうである。況んや、自分の私憤、私怨をそれによつて晴らさうとするやうなものに至つては、言語同断である。つまり、親和と公正との精神を、社會のすべてに行きわたらせねばならぬと信じ、若くは行きわたらせやうと乞ひ望むものにとつて、從來の人物月旦は、好ましいものではないのである。他を評價し、若くは非難し、いかにも我偉しとする代りに、すぐれた性向を相互から見出して、手を握りつゝよき社會の實現に急ぎたい。他を是非し、若くは褒貶し、さうしてわれ快なりとする代りに、なつかしい心を相互に感じ合つて、相携へて好ましい時代の招來に努めたい。「解放」の人物月旦をのこらず讀んだが、かういふ記述が、我が國社會の正常な發達に貢献し得るものとは考へ得なかつた」といふ意味のことを、松陽新報のどこかに書いたことを記憶して居る。すこしく考へ方が一圖に過ぎるやうであるが、一年をたつた今日でも、大體に於て、此の考へはかはらない。

此の號も百五十頁をこの人物月旦に費して居るが、讀んで見ると私の考へ方を訂正させるやうな眞劍なものはない。たゞ、千葉龜雄君の「賀川、西田、倉田三氏」といふ一篇だけは、本物であると思つた。私はこの三氏の月旦をせよといはれて、かうより外には言へないと思つた。

同君は、三氏の説く新宗教は、どの思想を採つても、決して新しいと云へるものではないと断定

を下して「それから賀川氏は基督教的社會主義を祖述して居り、倉田氏は耶蘇教、佛教を混同した愛の福音を説いて居り、西田氏は耶蘇教、佛教の上に報徳宗まで採り入れて、雜然として消化し切れない實際道德を語つて居る」といひ、更に、「詩人である賀川豊彦氏と、倉田百三氏の信仰に共通するものは、その強烈なセンチメンタリズムであり、西田氏に見るものは、氏の人格が閃かす事業家的な思想を融通のきく抜目なさである。さうして三氏を通じて感ぜられる處は、その態度がすべて消極的な思想であると共に、とりわけ物心二元をどこまでも差別して、その一つが他の一つを征伏するところによつて、始めて解脱の理想に達するといふ舊宗教の觀念から一步も出ないことである。それはたゞ舊宗教を美しい表現と、近代的な或る傾向で脚註したゞけでそれ以上に何等の創造をも提出して居るとは見られない」と云つて居る。これは正しい見方であると思ふ。私は、いつも、賀川氏にも、倉田氏にも、それから西田氏にも、そしてセンチメンタリズムの空疎なことに氣付き消極道のもの足りないことに思ひ及ぶことがないであらうかと思ふて居る。つまり三氏の今の心もちに行き詰りが來ぬであらうかと思ふて居る。

千葉君の人物評を讀んでは考へ、考へては讀んで居るうちに、汽車は、大津を過ぎて、東山にさしかゝつた。こゝから、一丘一川、悉く、私には舊知の思ひをひき起させるもののみである、京都

の驛は、その朝英皇儲の御着車を迎へるために、清楚に飾られて居つた。若き日の夢を抱いて、幾度かこのプラットフォームに立つた十年前の自分の姿をなつかしみ乍ら、汽車にゆられてゐると、間もなく大阪驛につく。四月二十七日午前八時半である。

二

松江列車が出る迄、一時間。山陰線待合ベンチに腰をかけて、新聞をよむ。内閣改造問題がいよ／＼本物になりさうな記事が目につく。一體、内閣改造といふことが實現出来るものか出来ぬものか、抑々またさういふことが許さるべきことであるかないか、それ等の問題は姑く別として、この問題の起因が、政友會内閣が、従來の通りの政綱を持ち續けたのでは、とても國民の信望を繋ぐことが六ヶ敷いといふことを必々感じた結果であることは、疑ひない。此の問題は、如何程に展開するであらうか。未だ議會政治を否認することが出来ない所の、従つて政黨政治、政黨内閣を否定し得ない所の私は、かうした問題には、かなりの熱心を懸けて、其の経過を見まもりたく思ふ。

やがて發車時刻になる。空は水色に晴れて、暖か過ぎる位の日和である。大阪から福知山までは私には始めての線であるので、新聞や雑誌から目を離して、過ぎ行く窓外の山河に見入る。無論凡

山と庸水と、取り立てゝいふ程のものもないのであるが、篠山を過ぎると丹波らしい色調が強く感ぜられる。

一時過ぎに福知山驛を通り、二時半に和田山驛につく。私が始めて山陰線に乗つたのは一昨年の四月で其の時は広島から姫路を経て、こゝで大阪を九時半に出る丁度この列車に乗り換へて、今は亡くなられた岡村博士や古市春彦君と一緒になつたのであつた。あれから丁度二年振りである。

三月一日來、日々社説一篇づゝを草して居るうちに、四十日は夢のやうに過ぎた。さうして何時の間にか、橋南と橋北とを一色に染むるかすみの中に、松江の春は更けて行つた。靜かに光る宍道の湖、春空に打ち黙す千鳥の城それ等を俯仰すると、私は今更のやうに去年の今頃をば思ひ出す。

其の頃、私は大正日々新聞社の社員であつた。大正日日新聞をして、其の使命を全うさせることは、日本文化をして正しき道に押し向けることに外ならないと信じた私は、たゞもう輝かしい望みと、強い決意とを以て、最善の努力をつくしたのであつた。當時の私の心もちは、今思ひかへしてさへも、涙ぐましい程の譯もないなつかしさに打たれる。

二月の末、原内閣は、突如として議會解散を奏請した。生活問題は急迫し、外交問題は行詰り

國民は上下をあげて不安に襲はれて居る時に、かくの如き議會の解散は、民心の動搖を更に一層はげしくするものではないか。私たちは、たゞ紙上での時局批評のみでは、物足りなくなつた。中島胡泉、花田比露志、丸山侃堂、賀川豊彦、室伏高信、稻垣伯勝、大石泰藏等の諸君は、直に大阪を中心として東海、山陽の各都會に飛んだ。さうして親しく民衆の前に立つて、火のやうな叫びをあげた。私は岡村司博士、古市春彦君、と共に道を裏日本にとつて、山陰道の諸都市に出講した。

四月四日の午後、私たちは鳥取驛から車を連ねて、鳥取温泉旅館にはいつた。岡村博士にも、古市君にも私にも、山陰道は初めての土地であつた。花曇りといふには雨模様のかちぎた空を仰いで「これが山陰日和なのかなあ」などと言ひ合つた。

夕方から雨が落ちはじめた。夜に入ると、春雨とは言ひ得ぬ程の大降りになつた。雨聲と風聲と相もつるなかで、私たちは眞面目に私たちの信念を語り、所見を語つた。會場は鳥取市の公衆堂であつた。

五日の朝は晴れて居た。それでも春寒い風が、しきりに襟元に流れ込んだ。其の日の豫定講演地は、倉吉町であつた。倉吉町についたのは十二時頃であつた。驛を立ち出で、眞正面

に見上げた城山には、淺みどりの樹葉のなかにところ／＼白い塊のやうにコブシが咲いてゐた。私たちの宿は、その城山の麓にあつた。ブルジョア文化を論じたり、岡村博士の歐洲談に耳を傾けたりする私たちの宿に、鶯の聲がひつきりなしに流れて來た。

開會迄の五六時間をじつと宿屋で過すのも面白くない。——私たちは、ラジウム放射量で世界第二であるといふ三朝温泉に自動車を飛ばした。芹つむ子供、散りかけた籬の桃、そこ／＼の林には櫻が五分通り咲いてゐた。自動車は其の間を勢よく走つた。狭いさうして凹凸のはげしい道と砂塵を捲いて疾走する自動車との不調和なる對比は、今日の日本文明を象徴するやうだなど、考へつゝ私は車にゆられた。

一浴を了へてまた倉吉町に歸りついた時には、もう街には電燈がともつて居た。小急ぎに夕飯をすまして私、古市君、岡村博士といふ順に會場に入り込んだ。會場は城山の麓であつた。其の四周には數多き櫻があつた。その半開の花が、所々に點されて居る電燈に映えながら春の夜空の下に打しづもつて居るさまが、妙に私の心を惹いた。私は、前以て「現前の事實を直視して」といふ演題をかゝげ乍ら「日本語に現はれて居る國民性」を説いた。其の翌朝、倉吉驛に見送りに見えた倉吉分署長に「倉吉町の空氣は、私の闘志を失はせて、言語の話をせねばならぬやうにさ

せた」とお話しした位、私の心は静かであつたのである。

翌朝は、朝早く倉吉を立つた。上井で乗り換えると、眞白い伯耆大山が、常に車窓にあつた。たゞなはる群山を脚下に見て、大空をついて立つ其の姿からは限りない力が放射されて居るやうに見えた。私たちは長い間、其のすがたに見入つた。

やがて、米子を過ぎて安來にさしかゝつた。「社日櫻に十神山」その十神山は、松翠に蔽はれた恰好のいゝ山であつた。

「滑車のもともまで帆をまいて、といふのが、大概、三味のいとはど帆をまいて、と訛つてるね」「所謂、言語轉化といふやつだ」

こんな閑談をかはして居るうちに、汽車は松江驛の構内にはいつた。大正九年四月六日の午前である。

赤木館で晝食をすまして、私たちは城山に登つた。城にはさくらが咲きこぼれてゐた。私たちは、そこから始めて松江の城下を一瞥した。春らしい日光の降り濺ぐ下に、街はおとなしく並んで居た。宍道の湖には動くともなく白帆がすべつて居た。あらゆるものに落つきがあつた。「山陽と山陰とはすつかり違ふ」と私がいふ。

「産業革命以前だ、煙突だつて一本も見えぬぢやないか」と古市君がいふ。

「閑寂は茶の湯につきものだよ」と岡村博士がおつしやる。

櫻餅うる茶店の前で、私たちは初めて見た山陰道の印象を語り合つたのであつた。

それから天主閣も見た。嫁が島も見た、が。私たちの前にある出雲は、古代民族の目ざましく活動した「八雲立つ出雲」ではなく、柔かに春日てり、なつかしく陽炎もゆる「見らくうまし」の出雲であつた、若槻禮次郎氏大學同期の卒業である岡村博士は

「こゝが若槻君の故郷かなあ」

さう云つて、はこゝかしこを見まはされた。

これやこの楠稻田姫のみ裔かもみちに逢ふ人みなうつくしき私ばかりの晶子ばりの歌を思つて、ゆる／＼と歩を運んだ。

「こんなところで人類解放史概観でもあるまいぢやないか。講演はやめにして、四五日温泉にも浸つた方がいゝね」

古市君はかういつて煙草の煙を輪に吹いた。それでも、其の晩、古市君は、母衣小學校の講堂で人類解放史の概観を説いた。私は教育上の二三の問題を説いた。岡村博士は、政治思想の三大變遷を説かれた。其の夜は、月なき春の夜空に、星のみが夢のやうに照つて居つた。

翌日は玉造で休養、翌々日は今市町で講演翌々日は米子町で講演。私が京郡驛のプラットホームに立つて、廣島行きの汽車をまつたのは、四月十日の早曉であつた。

その日から今日まで、正に一ヶ年の月日が流れた。其の一ヶ年の間に、大正日々新聞は夏の眞晝にばかりとくづれ落ちる牡丹花のやうに、崩れた。同人は四離五散した。私は廣島市のはづれ己斐の里で、なやましき心を抑へ抑へ、書を読んだ。そのうちに秋が來た。國情と世態とは、愈々大正日々精神を生かすことを必要とするやうに見えた。しかし、私には詮術もなかつた。十月頃から、皇道大本教の經營で同じ名の新聞が刊行されたけれども、前の大正日々とは何の關りもないものであつた。やがて年があけた。二月の末、私は筆を提げて、松江に來ることになつた。丁度一年振りである。偶然か、否か、それは知らぬ。因縁か、否か、それも素より知らぬ。

これは去年の四月、松陽新報に居た折に書いたものであるが、これを書いてからまた丁度一年振りに山陰線を西に走つて、松江に行くのである。その一年の間に、岡村博士は亡くなられ、古市君は再び學窓の人となり、私は松江に居ること三ヶ月、今は東京に居て風塵にまみれて居る。豊岡を過ぎ、濱坂をすぎ、汽車は隧道を出てはまた隧道にはいりつゝ、日本海の宏宕たる波濤をチラ／＼と掠めるやうに車窓にうつすのであるが、私はそれに見入らうともせず、甚だ感傷的な氣持で、この二年間の私の心の推移を思ひかへし、思ひかへしするのであつた。

鳥取を過ぎ、上井を過ぎ、米子に近づく頃には、夜はもう更けて行つた。伯耆の大山も見えず、夜見濱の白砂も見えず、たゞ同車の人のひそ／＼と語る出雲音をば、なつかしく聽き乍ら、私は腕をくんだまゝちつと目をつぶつた。

松江についたのは、十時四十分。直に車を走らせて赤木館——二年前の松江への最初の旅で數泊した所の——に投じた。窓の下には、夜の宍道湖が、小波の音ひとつ立てず、しづかに眠つてゐた。

三

私が今度の松江行きは、四日の二十八日から五月の四日まで、鳥取縣縣廳で開かれる同縣神職講

習會で「農村に於ける社會教育」を講ずるためである。去年の同講習會で、「社會教育概論」を講じたのであつたが今年各論にはいつて其の第一部を説かうと云ふのである。「言語學を専攻するものが何を醉興に社會教育などといふ飛んでもない方面に首を突こむのだ。そんな暇があつたら、なぜ平素志して居るといふ言語學史の二頁をでも書かぬのか」と云はれれば、一言の答も出來ぬのであるが、大正六年、廣島縣で多くの青年と接し、地方有志と接する機會を得て以來、私の興味は「社會教育」といふ言葉でひつくるめ得られるやうな仕事の上に向つて行つた。爾來今日まで五年、私は依然として、私の力をさうした方に注ぎたいといふ熱望を持ちつゞけて居るのである。だから私の「社會教育論」は、アメエチユアの社會教育論であつて、人に説くなどは甚だ僭越の極みであるが、それだけおつとめで説く社會教育でもなければ、止むを得ず講釋する社會教育でもないのである。これが、取柄といへば取柄である。

特に、私の「農村に於ける社會教育論」は、五年來、數多い農村青年の悩み、悶え、訴えをきくことによつて方向づけられた一種の農村文明建設論であつて、何等の省察なき翻譯でもなければ、い加減にこねあげた空理でもない。私の農村社會教育論に存在理由がありとすれば、まあ此の點であらうと竊かに自信して居るのである。

この農村社會教育論を、十四五時間、聽いて頂かうといふのである。

二十八日は、暖かい風が湖面をなで、嫩黄に萌える若葉に、初夏の日光がにこやかにかゞやいた。私は赤木館の二階から、しみ／＼と眺目に耽つたのであつたが、本當に松江は水郷であり、詩郷であり、畫郷である。あの繁雜な東京からきて見ると、一層にこの感じが深い。

朝めしを了へると、引つゞいてM、Kの兩君が見えた。「もう見えるだらうと思つて」といふ最初の挨拶もうれしかつた。一時間近くさまざまなお話をして、それから連れ立つて宿を出で、教文館の前で別れて、私は松陽新報社をたづねる。編輯局と營業局とで、久潤を叙して居ると正午に近くなる。

二時すこし前に縣廳に行き、二時から講義をはじめ。會場は縣會議事堂である。——社會教育は言ふまでもなく「社會の情態」に應じてなされるべきものであつて、「社會の情態」に頓着なしに、諸種の計劃、施設を進めても、それは寸效だもあげ得ないであらう。それ故、社會教育に力を致さうと思ふほどの人は、充分に「社會の情態」に對する理解を深めねばならぬ。而して、件の「社會の情態」は常に推移する。だから「社會の情態」に對する理解を深めることは、一通りならぬ骨折りである。といふやうなことから話を起して、「社會變移」の本質的考察を試み、「社會變移」の際に常に相争ふ

二つの力を剖拆し、更に進んで、文化運動と社會教育との關係を説明して居ると、私にあてられた二時間がすんだ。

四

明けた二十九日も、また、靜かに晴れた青葉日和であつた。

欄によつて、夢のやうに煙波を展開する宍道湖の曉色に見入つて居ると、萬波君が「五六月の宍道湖は、何ともいへませんなア」と言ひながら、室にはいつて來た。萬波君の書いたものには、どこかにセンチメンタリズムの調子がにじんでゐるが、逢つて話して見ると、何時も元氣が潑刺として居る。靜かな宍道湖の曉の色を讀へる口の下から、農村の現状論が出る。政局の批判が出る。文壇の傾向の是非が出る。創作家の品定めが出る。私もついそれに釣込まれて、口をはさむ。舵を失つた帆船のやうに、私たちの話は甲から乙、乙から丙急調展用ですんだ。

朝食を終ると八時が過ぎる。九時すこし前に講習會場に出かける。今日から、私の話は本論にはいつて、先づ「我が國に於ける農民の社會的地位」を時代的に概観して見ようといふのである。我が國に於ける農民の社會的地位に關する研究は、これまで餘り多くの人によつて手をつけられな

つたやうに思ふ。近來、早稻田大學の佐野君や猪俣君が、これに關する多少の考察を試みて居るらしく聞いて居るが、まだ纏つた研究は公にさて居ないやうである。今日の農村に對して何程かの考察を向けようとする場合に、我が國の農民が長い間、どういふ社會的地位に置かれて居つたかは、必ず知つて居らねばならぬことであるに拘らず、かういふ現状であるのは、至極遺憾である。私が何よりさきにこの問題に觸れやうとするのは、常に此の遺憾を痛感して居るからに外ならぬのである。といつて、私の農民研究が、世に示すほどの深さと、正しさと、まとまりとがあるといふのではない。たゞ、少しばかりの資料と暗示とを提示し得るに過ぎないのである。

私は先づ大化改新の前後から、徳川の末期迄に於て、眞に平和なる勞働群であつた我が農民が、如何なる社會的地位に置かれ、さうしてまた如何なる生活を營んで來たかを、最も信憑するに足るべき文書を材料として、年代的に説述した。さうして、最後に次のやうなことをつけ足した。

以上、述べ來つたところによつて、我が國に於ける農民が、徳川時代迄、どんなやうな地位に置かれたかの大體の概念を得られるかと思ふ。諸君は、農家の人ではない故に、どういふ感じをこの説述から得られたか、それは私には推察し兼ねることであるが、若し農村の青年たちが今日の私の話を聞いたならば、恐らく一人の除外例なしに、憤激に似た感情を湧きあがらすであらうと思ふ。

がこゝに注意すべき點がある。それは獨り、此の場合のみでなく、總じて歴史を見る場合に、ある一つの時代をとつて、其の時代の情態を詳かに研査し、さうしてその後を或る一つの時代に比較するのは、よろしい。しかし、其の研査の結果の上に様々の感情を動かして、或は呪咀し、或は驕傲するのは、つゝしむべきであると思ふ。すべて、歴史は人類發達の年次的記録であつて、社會は、さまざまの波瀾をたゞみつゝ進化の路を辿るものである。それ故、或る一つの時代は他の或る一つの時代と共に、社會進化の、若くは人類發達の、一つの段階として存在價值を有するのである。従つて、その時代の各の情態は、その前の成る時代又はその後の或る時代に比較して如何様にもあれそれはさうあるより外に詮方はなかつたのである。他の言葉で言へば、その時代の人々のすべての努力は、そのやうな情態より招來することすら出来なかつたのである。それで若し、嘗ての時代に於て、或る情態の下に置かれて居つたものゝ子孫が、何代かの後に於て、その時代に受けた父祖の社會的待遇に憤激の情をもやし、その報復を今日にはらさうとするやうなことがあつたらば、それは言ふ迄もなく無理由であり同時に無謀である。つまり、過去の各々の時代は、進化の一路程として、あるがまゝに見ねばならぬので、若し諸君にして、私が今日説き述べたやうなことを農村の青年たちに話されるやうな機會をもたれることがあつたならば、此の點は吳々も御留意を願ひたいと思ふ。

ふ

私がかやうなる補説を試みたのは、農村争議の圈内に立たうとする農村青年が、その父祖の前代に於て受けた社會的地位に關する知識をば、その闘争意識の高揚に役立たせるやうなことがあつては山々しき事であると思つたからである。

五

十二時すこし前に宿にかへると、萬波君のところには、其日の午後二時から開かれる筈の竹柏會山陰支部總會に列するため、山佐村の加藤理義君、宇賀莊村の原耕村君見えて居た。加藤君には去年幸町の當時の私の僑居でお話したことが、あつたが原君には初對面である。萬波君が中心になつて、例の文壇やら、農村やら、政界やら、多方面にわたつた話に夢中になつて居ると、竹柏會支部會開會の時刻である二時になる。三人はそゞくさと服裝を改めて出かけた、私は一步後れて出かける。會場は、松江商業會議所である。會の様子は、萬波君が何か詳しく書かれるだらうと思ふから一切を省略するが、たゞ本誌の讀者は「心の花」一派の短歌會だからと思ひ、竹柏會員は「漸進」の讀者が一緒に集るのはと云ひしものか、會衆が豫想の外に少なかつたのは、何だか物足らぬ感じがし

た。かういふ譯で、自然、また私が其の席上で述べようと思つてゐた「短歌のスタイルと用語」に関する私見も。そのまゝにしてはねばならなかつた。

——私が短歌に興味をよせ初めてから二十年あまりになる。その時分は所謂新派和歌の勃興期であつたが無論、私の短歌に對する態度も淺薄であり、幼稚であつて、多くは模倣か、羅列に過ぎず、短歌と私の生活との間には、かなりの距離があつた。明治四十年頃に刊行された「新詩辭典」といふ一種の歌集に、當時の私の作が少しばかり採録されてあるが、骨肉の和解を破つてまで、敢然東京に踏み止まる勇氣もなかつた。平凡な、その癖多感な十九の一青年は、そこに深い苦惱を味はざるを得なかつた。その苦惱をば、私は短歌に托したのであつた。かくして、短歌は私の生活になつたそれから今日まで十五年、竊かによみ出で、竊かに書きつけて來た短歌の數は、二千首を越えて居ようと思ふ。今それを讀みかへして見ると、その藝術的價値は別として、その調子はまことに千差萬別である。萬葉ばかりのがある新古今調のがある。口語體に近いものもある。全くの古語體のものもある。或る年の歌をとつて、これを他の年の歌に比べると、全く別手に出たと思へぬものが多い。これは一體どういふ理由であらうか。若しこれが他人の場合であつたならば、それは恐らく當時の歌壇に對する模倣か、或はその時に於ける作者の愛誦して居つた歌人の影響か、何れかであらうと斷

定しだでもあらう。諸君も、また必ずやこれと同様の斷定を下されるであらう。が、それは決してさうでは無い。私が萬葉や、新古今を愛誦したのは、明治四十年以後である。しかし、其の頃の歌は、一種の口語體に近いやうなものが多い。近來は、殆んど古人の歌集も、今人の作品も、目を通さない。それによみ出づる歌の調子は萬葉ばりである。結局、此の十四五年間に於ける私の歌の調子の變化は、當時の歌壇や愛好する詩人たちの影響ではなくて、全く他の原因をもつて居るのである。その他の原因は、實に私の生活氣分である作歌をば、餘細工か何かのやうに心得て、自己の生活とは何のかゝはりも無く、いゝ加減な文句や題材をよせあつめ、こねあけてそれを三十一字にならべ立てる程度の人達は姑く別として、自己の生活を三十一字に小詩形に表現しようとする人は、誰でもその當時の自己の生活氣分が、何よりも強く出來よつた歌の調子の上になじみ出でることに氣付くであらうと思ふ。さてこの調子であるが、表現しようとする思想、感情、若くは直觀を、出來得るかぎりそれにふさはしい調子をもたせて表現させる爲には、用語を選択することが大切である。そこで所謂歌の調子は、用語によつてきまるものである。此の意味から考ふれば「歌の用語」の考察は、單に語學興味を與ふるだけで無いことがわからうと思ふ。諸君は、恐らく今日の文章が殆んど現代語で書かれるやうになつて來たに拘らず、短歌には、奈良平安朝時代から現代までの、さまざま

な言葉が使はれて居ることを認められるであらう。さうして、各々一派を立て、居る歌風といふのも、畢竟、その用語の種類別に過ぎぬやうや觀を呈して居ることも、また同様に認められるであらうと思ふ。

私はかういふ前置をして、アラ、ギ派、明星派、竹柏會派の歌風を比較し、それから短歌の本質論にはいつて、所謂歌風なるものゝ價値を論斷したいと思つたのであつた。

かやうな遺憾があるにはあつたが、もの靜かな商業會議所の一室で、明るい初夏の空の下に屈託もなく風にうちゆれて居る閑庭の草花に目をやり乍ら、歌を思ふひとゝきを有ち得たといふことはうれしいことであつた。席題「花」二首といふのであつた。みんながきめられた二首が、すんでしまふ頃、私はやつと一首出來た。それは、

夕かぜに大根の花ゆれやます離れひさしき母のしのばゆ

といふのである。恐らく何人も、平凡の作としか思はぬであらう。私も決して傑作とも、佳作とも思はないたゞ此の一月ばかり心のすみに藏めて置いた景情が、ふと歌の形になつて表はれたといふところに、私としてのひそやかな喜びがあるのである。實は、私の東京郊外の僊居の裏に百坪程の畑地があつて、その三分の二程は麥が植ゑられ、三分の一程は大根が植ゑられてゐた。三月の始

め頃になると、三分の一の方は大方空地になつたが、それでも、雜草の生ひ立つた中に、七八株の大根が小さな白い花をつけて、のびて居つたその白い花があたり、薄暗くくれそめる夕暗の中に、ふるえるやうに風に揺れるのを見ると、私の心は譯もなくはなれて遠い人を追ひなつしむのであつたその情、その景、それがたま／＼此の場合に歌として表現されたのであつた。競點の結果、どうしたものか、此の歌は最高點を得たのであつたが、選ばれた方が、どれ位、この歌にあらはれて居る私の心持の眞實さを思はれたか、それは疑問だと思ふ。

六

六時すぎに會がすんだので、直ぐに赤木館にかへつて大阪の新聞を見ると、内閣改造問題が、大分進展した様である。高橋首相は、人心一新の要を認め、人心一新は閣僚の二三を更迭することによつて成し得られると信じ、さうして内閣改造運動をはじめたと傳へるものである。が、人心一新の爲めに内閣改造を策することは、無意味ではなからうか。何故といふに、若し人心が倦んで居るとするならば、それは内閣閣僚の一二に對してゝなくて、内閣全體に對してゝある。それ故、最も効果多き人心一新策は、現内閣が總辭職をして、全く新たな主張と綱領とを掲ぐるものに國政變理の

任を譲るといふことでなければならぬからである。又内閣改造は、原前首相からの計劃であるが、それは別として、高橋首相にしても一度閣臣の首班となつた以上、やはり自分のやりよいやうな内閣組織をもつことが、望ましくなつて来る筈である、これが内閣改造を策する原由であると云ふものもある。が、それならば、高橋首相が大命を拜した時、辭意を洩した閣僚を慰撫し、留任させたのは何ういふ譯であつたか。大命を拜して半歳、すこし都合がよくないといふので、この際犠牲になる積りで辭表を出して貰ひたいと云ふのは、すこし身勝手が過ぎはしないか。或は又、政友會があまりに膨大になり、あまりに得意時代が続くから、天運循環して、ポツン／＼下り坂になりかけたのだといふものもあれば、原さんが亡くなつて、これ迄抑へられてゐた暗闘がポツ始まつたのだといふものもある。私は、此の方がどうやら本當のやうに思ふ。河上肇博士が、何かに次のやうなことを書いて居られたと記憶する。「自分の寓居の庭先きにも、樹があるが、毎年初夏になると澤山の毛虫がわく。見る／＼うちに大きくなつて、糞を落す音が雨のやうに聞えて来る。盛夏になると、その毛虫が加速度でふとると共に、木の葉もまた加速度でなくなる。さうするとそれらの毛虫が列をなして樹から降り、さうして四方に散ずる。椽側にはひ上るものも少くない。つまり毛虫の一族は、繁榮の極に達すると同時に、間もなく一大崩壞の運命に出喰はすのである」。これは資本主

主義の歩むべき必然の徑路を例示されたものであつたと思ふが、資本主義はしばらく別問題として政黨といふやうな團體も、實はやはりかうした歷程を歩むものではなからうかと考へる。今度此の内閣改造騒ぎの如き、さしあたり毛虫が樹から降りはじめたところであるのであらう。そこで今度の改造が成功しても、しなくても、何れにしても、現内閣の壽命が長くないことだけは、殆んど斷言出来ると思ふ。

七

夕めしをすましてから、萬愁、加藤、原の三君と打ちつれて、夜の松江市をあるく。私たちは何よりもさきに、大橋の北詰に新しく建てられた松江倶楽部の三層樓に上らうといふので、同倶楽部の食堂のドアを押した。たゞ高いところの上つて下を見下ろさうといふ子供らしい希望に一階から二階、二階から三階へと階段を上つて行く私自身の姿をぼ／＼えましく思ひながら三階に上る。

そこから見下すと、松江市は宍道の湖の兩側に、はなやかな色を展開して、初夏の街らしい情緒をたゞよはせてゐた。やはり、松江は、生きの苦しみに尖鋭にされた神経を回復し、汚れ傷いた魂を慰安する理想郷として、永く残さるべきではないか、松江市の發展は、すこしばかり工業が起り

すこしばかり取引がふえたといふやうなことで、計量さるべきでは無いのではなからうか。無論、地域が擴まり、人口が増すといふやうなことや、まねごとのやうな洋食屋がふえたり、ちいつほけな洋式建築が多くなるといふことなどが、松江市の發展ではあるまい。それよりは、そこに住む人の心のもち方、それが文化的になること、従つてその心から生れる生き方、ものゝ見方、行爲、さういふものがまた文化的に洗煉されること、さうした人々の住み、さうしたものゝ存する所として松江が存在することこそ、松江が本當に生き得る所以では無からうか、私は三階の窓にもたれながら、私はこんなことを思つた。かうした考へは、去年、私が自分の住むべき土地として松江を見た時には、ちつとも浮んで來なかつたのであつた、今度、一年ぶりに、繁忙雜駁そのものゝやうな東京から來て始めて湧き出た考へである。

宿にかへつて、またしばらく話し込んで、床にはいつたのは、十二時を過ぎてゐた。その夜の夢は、靜かであつた。

模範村を訪ねて

廣村

——廣島縣賀茂郡にあり——

吳市電を鹿田で捨て、いやな思ひをしながら、中畑峠を越え、そこから一気に阿賀町に下りて東に折れると、一直線に砥のやうな大路、それがつきると川床の浅い砂の奇麗な川、ソノ川に沿ひつゝ眼を轉ずるとゆほびやかに展開した平地、點在し斷續する小ザツパリした家——廣村に足を入れた人は、何人もが必ずや最初に、平明と溫藉との感觸に包まるゝであらう。

さうして此の感觸は、更に村の人達と談語し、村治の状態を尋究し終つた時に、それが單々風物からばかり得能ふところの感觸でないことに氣付くであらう。事實、廣村は内務省や縣知事の選奨の辭——それは多くの場合に於て誇張され、過大され勝ちであるのである。その儘に「人々雍和其の業を營」んで居り、「協同緝睦相率ひて克く公共の事に竭し」て居る。

舊幕以來負債に苦しめられて、苦慘の限りを嘗めてゐた難村から、全國二萬何千の町村の筆留に位置することの出来る模範村にまで漕ぎつけた徑路は、更めて茲に説くを要しまい。それは四十二年以來、殆んど毎日同村を訪ねる數多い各地からの視察者によつて、事つまびらかに説き廣められてゐるであらう上に、時の廣島縣々治課長であつた武岡充忠君の監修になつた彪然たる大冊「廣村」の一卷が、實に其の詳細を語つてゐるからである。

私が、語らんと欲するのは、廣村の現状である。そうして、それは、恐らく多くの讀者の聽かんと欲するところであらうと信ずる。何故ならば、近頃に至つて、「亡び行く模範村」といふやうな語辭の下に、同村の今日を嗟嘆し、惘哀するものが決して少くないのみならず、またその語辭を裏書きするやうな事實が、地方の新聞によつて、一度ならず、傳へられるからである。

現に、大正八年來、萬三千余圓を投じて、起工中であつた演藝場は、其後着々工事が捗つて、十年一月に上棟式を舉行した。それから、廣村の人達も、他村から流れ込んで來た職工達と肩を並べて、淫蕩な舞臺面に心をふるはして居る。——とか、阿賀、仁方に、廣村を合せて、現在二十余名の藝妓が居るので、住本、西田、小田等の諸氏が發起となり、檢番設立の計畫を立て、過日、發起人の總會を開いた、とかいふやうな廣村の從來の傾向に對しては、タトヒ逆行はせぬまでも、少くとも合致はすまいと感ぜられる出來事が報ぜられて居る。

かと思ふと、又——近時廣村の地主や、村有志が相はかつて村當局と協議の上、末廣、中植、本古新開等の新開地を整理して、道路、住宅其他の區劃を正して居るが、更に最近に至つては統一的な新廣村を建設せねばならぬといふ運動が起つた——といふやうな、破壊と更新とを想はせるやうな出來事が報ぜられて居る。

何れにしても、廣村の今日が、一大轉機に際會して居ることは、拒むことが出来ない。然らば彼の美しかりし模範村の廣村の形態は、もう既に破壊しられたのであらうか、若しくは去られつゝあるのであらうか。

私は、此の問題に觸るゝ前にかうした嗟嘆と惘哀と、及び事實と機運とを生み出した原體を述べねばならぬ。それは其の惘哀と事實とが、漸を趁うて生じ來つたものでなく、三年前來俄かに起つたものであるからである。それ故に、若し其の原體に對する廣村の消化力、若くは對應力を檢覈し得たならば、その嗟嘆が果して受け取らるべきものであるか、その機運が、本當に呪はるべきものであるかは、直ちに知り得るべきであるからである。

と書いて來ると、所謂原體なるものが、素より尋常一様のものでなく、従つて甚だ奇怪を極めたもののやうに思へるが、事實は甚だ簡單で、さうして又明瞭である。即ち先年吳海軍工廠の支廠が新設されることになつて、其の設定地が廣村に決した——既に工事は着々進捗して、ドス黒い文明の吐息が林立する煙筒から見られるやうになつた——といふ事、其の事に過ぎぬ。一昨々年の二月本文の筆者は廣村に於けるすべての問題と行事とが解決され、實行される聖樂の場公會堂で、丁度舊正月を利用して、歸村してゐるといふ二百足らずの青年團員に對し「廣村はまたもや試さる可き時期に出會した、諸君は新しく出現した海軍工廠に對して十分の消化力を有つて居るか」と説いた事があつたが、其の時聴衆の面貌からは、何一つ共鳴らしいものも、感憤らしいものも受取ることには出来なかつた。否、軽度の昂奮すらも受け取ることは出来なかつた。

私は、怪しむもし、惑ひもした。しかし仔細に廣村の過去と現在とを調べて見ると、それが實は當然であるのである。元來、廣村は與へられたる天恵の村ではなかつたのである。それが日本一の模範村になつたのである。その間に村民が如何に多くの戒心と、努力とを必要としたかといふことは、推斷するに困難でない。それからまた、廣村は其の生業が純一であり、其の地域が狭少であ

つたのではないのである。それが天下の廣村になることに成功した。それ故、村民が雑多な職業にも馴れて居り、多衆者の共同にも馴れて居つて、極めて多方面の經驗を持つて居ることは、同時に想定することが容易である。

私は、廣村から中畑峠を越えて吳に出る途中、小走りに近路を辿つて家路を急ぐ多くの淺黄服の廣村の青年に出逢つた。支廠の工事に流れ入つたらしい無教養な工夫達の卑雑な饒舌の間に伍して黙々として忙しく動いて居る多くの廣村の若い女達を見た。本文の筆者は、これまで「職工」並に、「工事手傳人」に對して抱いて來た印象がどうしても訂正されねばならぬことを思はずには居れなかつた。つまり廣村にとつて、海軍工廠支廠は一個の異國人ではあるが、必ずしも異端者では無いのである。廣村過去の歴史と、現在の生業とは、此の新らしき闖入者をば、甚しく恐るべく且つ到底並立し得ざる底のものとするには、餘り複雑であり、又鍛練されてゐるのである。

遮莫、廣村が今試されんとしつゝあるは事實である。「算數統計を根據として、之を行ふに道德を以てすること」といふ廣村の信念が、果して今後も強い權威を持續し得て、今日迄の榮譽を過去のものにするやうの事なきを得るや、此の一大問題が——それは地方自治を思念する人達の誰もが注